

た。すると可巧又そこに史湘雲が來了個、那の史湘雲が又是極て説話愛的だから、那裡で香菱が他れに教へて請うて詩を談すことなどを禁得起こそ、越發高興起來て、晝となく夜となく、高談闊論起來るので。寶釵、我實正に聒噪的て受不_レ得了わ、(一個の)女孩兒家、只管詩を作るとを挈著 正經事の當に 講起來、學問でもある人に聽かせたら、反て己の本分を守らぬと笑話説ませうに、(一個の)香菱に没_二開_一清_一に居たのに、偏又爾這麼一個な話口袋が添_レ了て、滿嘴裡も是什麼を説的れるかと思ひますと、怎麼だか 杜工部の沈鬱とか 韋蘇州の淡雅とか、又怎麼是か 温八又の綺靡とか 李義山の隱碎とか云つて居て、反て現的の兩個の詩家を放著それも知道んで那些な死んだ人を提うて什麼に作ります。すると湘雲は之を聽いて忙、現在是那兩個の方で御座いますか、好姐姐爾告訴てきかせて下さいましたと笑問た。寶釵は、默香菱の心苦と、瘋湘雲の話多ですよと笑道た、二人は之を聽いて都な大笑起來た。正説著て居ると、只見寶琴がやつて來て、其披著居る(一領の)斗篷は 金翠輝煌して何物だか知れなかつた。寶釵は忙、是は又那裡的のですかと問道た。寶琴、雪珠兒が下りますので、老太太が找_レ了出_レて給_レ我的ので御座います。すると香菱は上來てそ

【五二】 人が見ても尤もと思ふ職務。

【五三】 やかましく云ひたてる。

【五四】 原文、杜工部之沈鬱、杜子美の詩調のどことなく重しく沈み勝なこと、下各詩人の批評。

【五五】 韋應物。

【五六】 温庭筠、晚唐、八たび手なくむ間に詩をつくと、作詩の敏捷巧妙なことをほめたあだな。

【五七】 原文、李義山之隱碎、晚唐の李商隱、むづかしい故事など使ひし詩をつくつたもの。

【五八】 翠色の中にびかびかと光る。

れを瞧て、怪道で這麼なに好看のです、原來それは孔雀の毛で織つたのですもの。湘雲、那裡では孔雀の毛で織つたものでせう、就是は野鴨子の頭上の毛で作的のですわ、是は老太太が爾を疼_レになりますますからですよ、這樣に寶玉を疼_レになつても、也他に 給穿_レになりませんではありませんか。寶釵、各人にはみな縁法が有るとは、眞に俗語によく説うたことで御座います、我は他が這會子來ませうとは再と想もありませんでしたよ、既來_レ了ましたら、又老太太が這麼に疼_レ他になつてほんとに仕合です。すると湘雲は、爾は老太太の跟前に在に除_レ了ときは、こちらの圍中に就在來なさつて、這兩處でも只管頑笑吃嗑して居らつしやい。太太の屋裡に到_レ了とき、若し太太が屋裡に在る様でしたら、只管太太と説笑なさいまして、多坐一會ても妨_レませんが、若し太太が不在_二屋裡_一ですなら 進_レ去_レらない方が宜_レう御座いますよ、那屋裡には人多心壞で、要_レ害_二僭_一們_一からと説的て寶釵、寶琴、香菱、鶯兒等は都な笑了居た。すると寶釵は、爾は沒心と説うて居ましたら、到_レ又て有_レ心で、然し有_レ心でも到底嘴太直_レ了ですが、我們的這琴兒が丁度爾によく像_レて有_レ些ます、それから爾は天天も我に 親姐姐に作_レつてくれと説ひですから、我今兒 叫_三爾認_二他作_一親妹妹_一罷と道_レうた。湘雲は又半日と寶琴を嗽_レ了て居て、やがて、這

【五九】 きせてやる。

【六〇】 原文、可別進去、進去(おいで)に別(ならん)が可(よい)ございます。

【六一】 しんみのあれ、他人なれども、肉身の姉の様になり、己を妹分にして下さい。

【六二】 他(寶琴)をあなたの親妹妹(いもと)に認(し)して下さい。

【六三】 這一字にてよけれども、此の如き場合、俗文慣用にて一枚と加へ云ふたり。

一件衣裳は、也就只く配他穿一ですこと、別人が穿了は實在に配ませんがと正説著て居ると。只見琥珀が走て来て笑道、老太太が説ひになりますには、寶姑娘は、どうか琴姑娘(他)は還た小呢御座いますから、管緊了別やう(六四)讓下他愛二怎麼著、就由他怎麼著、什麼も要東西は、只管要去て、あまり多心云ひなさいます別とのことで御座います。すると寶釵は忙く站起身來て答應了しながら、又寶琴を推しながら、(六五)爾也不知是那裡的這段な福氣な目に、さあ爾去罷、仔細ませんと、我們は委二屈著爾一よ、我は那些兒爾(寶琴)には、不レ如レ爾我就不信だのになど説話之間に、寶玉、黛玉などが都進來了が、寶釵は猶是嘲笑つて居た。すると湘雲は、寶姐姐爾這話は是頑話でせうけれども、どうかしまたら、真心に是這樣想ふ却有レ人ますかも知れません。すると又琥珀は旁から、他到は是這樣人ではありません、真心に惱的居らつしやるのは、別の人ではありません。就只是他でせうと口裡説寶玉を手指著た。寶釵は湘雲に、是他じやありませんと笑道た。すると琥珀は又、是他でなければ、就是他でせうと、又黛玉を指著た。湘雲は便く不レ噴聲一しようた。寶釵は笑道、更に是ではありませぬ、我的妹妹は他的妹妹も一樣で、他は我よりは還更喜歡呢よ、那裡で惱て居ませう、爾雲兒の混

【六四】 女中の名。
【六五】 他寶琴が愛(すき)なものに怎麼(なんでも)も他(その)の怎麼(おも)ふ由(とほり)にさせよ。
【六六】 原文、爾也不知是那裡的這段福氣、爾也、俗調、是那裡(どこ)から這段(こん)な仕合せを受くる目にあひましたらう。
【六七】 原文、仔細我們委屈著爾、つしみませんと、爾を委屈著(しかり)ますから。
【六八】 爾にしがざらんや、まけぬ、反語。

説を信てはいけません、(六九)他的那嘴が什麼で實據になりませう。然るに寶玉は素習から深く黛玉の小性兒などは知つて居たが、然し尙だ近日の黛玉、寶釵の事は知らず、正だ賈母が寶琴を疼かられるので、他の心中にも不三自在て居たが、今湘雲が如此を説了、寶釵が又如此答をするので、再びじつと黛玉の聲色を審てみると、亦往日とは不レ似、居然寶釵の説ふところと相符うて居るので、その心中ひどく悶悶不レ解。因から想ふやう、他兩個は素日は是這樣ではなかつたやうだに、如今看來と竟更に別人よりは十倍も仲が好了やうだとおもひ。一時又見るに林黛玉は寶琴の趕著妹妹と叫うて、竝二不提レ名道レ姓、真是に親姊妹の一般であつた。然るに那の寶琴は年輕く心熱で、其上に其本性が聰明、幼の時から書を讀ひ字を識つて教育があるので、今賈府には僅に兩日位はか住了ぬに、大概の人物は已に知合ひになり、又邸内の諸姊妹を見るに是那の様な輕薄な、脂粉でもなく、且つ又(七〇)姐姐とも皆な和氣ので、故也肯待慢にもされず、其中にも林黛玉は又出レ類拔レ萃人なので、便更他とは異常親近した。寶玉は看著、只是暗暗に納悶であつた。一時して寶釵姊妹は薛姨媽の房内に往去後、湘雲は賈母の處を往て來、黛玉は又己の房に回つて歇著と、寶玉は黛玉を找ねて來て笑道、我は西廂記を看了也會(七一)明白的幾句が有つたので、それを説了取レ笑を云うた積でした雖、爾は

【六九】 あの人(嘴)くちで云ふこと。
【七〇】 居然の原意は、怡然、安然といふが如くなれども、轉じてはおもひのほかと云はんが如し。
【七一】 女の形容。
【七二】 此は寶釵。
【七三】 能く意味のわかつた面白い句。

還た惱過たではありませんか、這を又如今想來ましたら、又竟も一句解らぬ的が有きましたので、我が今念出來ますから、(爾)我に講講聽せて下さい。すると黛玉は之を聽了、便くそれには何か文章が有ることであらうと、因笑道、爾念出來聽聽て下さいよ。寶玉、那の(西廂記)鬧箇中に、是幾時か孟光、梁鴻の案を接了たかと、一句最好が説的てありますが、這の梁鴻案接了の五字は不遇是現成的典雅だけで、他が這是「幾時的」と三個虚字を爲て問的は仲伸趣が有ります、是幾時爾に接くなりましたか、爾説我聽下さい。すると黛玉は之を聽いて、禁不レ住也笑了て、這は原と西廂記に其間ことを載せたのも好く、(七五)他が也問的も好く、それに爾が也問的なさつたのも仲伸好う御座んしたわ。寶玉は、先時爾は只だ、我を疑つてゐましたらうが、如今は爾也、沒二的説了、我は反つて、單に落てしまつた。黛玉、誰知他、は眞是個に好人ですわ、我は素日他を藏レ奸の様に當つて居ましたかと。それから、酒令に説、錯了こと起、寶釵が、燕窩を送つた病中の所談之事連も細細寶玉に告訴したので、寶玉は方めて其原故を知つて因て笑道、我説呢と、今正ど、是幾時孟光が梁鴻の案に接したかわからず、(七六)悶が原來、小孩兒家と云ふものは、口に遮欄が沒上で、就ち案に

- 【七四】 紅娘の語也。
- 【七五】 紅娘、崔鶯鶯の女中。
- 【七六】 原文、只疑我、寶釵とあやしいと疑ふ。
- 【七七】 あやしなく、説(いふ)ことが没的(ありません)。
- 【七八】 原文、説了酒令、此のこと前に出づ。
- 【七九】 原文、送燕窩、黛玉の病中に、身體のためになるからと云うて、寶釵が黛玉に燕窩湯を送つたこと前に出づ。
- 【八〇】 西廂記中の紅娘のこと、その紅娘などは、つまりまた娘の子で、あんなことをべらべらと云つたのです。

接したなどと云ひたてたのですよ。すると黛玉はそれから又寶琴の事を説起來るので、自己に姉妹が沒有ことなど想ひ出して、免はず又哭了したので、寶玉は忙に勸め道ふやう、這に又自分で煩惱することはないではありませんか、爾瞧瞧、今年は舊年よりも越發瘦了た様です、爾は還て保養保養もせんで、每天好好的(爾は)必是自分で煩惱を尋ねて一會子哭了は、纔で這一天的事が算完了でもしたやうにしてゐる。黛玉は涙を拭きながら道ふやう、どうした譯かわかりませんが、近來我は心酸く眼涙は却て舊年よりも少し些像似ですけども、(八二)只管心酸くなつて涙は却て多くでません。寶玉、這是は爾が哭慣了からでせう、心裡に疑的て、豈て眼涙が反て會少譯がありませんと、正と説著て只見他の屋裡の小丫頭が、(八三)猩猩毡の斗篷を送了來て、大奶奶が纔人を打發に來まして説になりました、雪が下りますからよく商談して明日は請人て詩でも作りませうとの説で御座いますと、一説未了と、只見李紈的丫頭が黛玉を請に走來た。すると寶玉は黛玉を邀著て同に稻香村を往て來つた。黛玉は、(八四)金挖雲紅香羊皮の小鞵を換上、身には(一件の)大紅羽紗面白狐皮裡鶴髦を罩了、腰には(一條の)青金閃綠、(八五)雙環四合如意縵を束め、頭上には雪帽を罩著、二人一齊に雪の踏を行て來つた。只見已都那邊に在る衆姊妹は、都是

- 【八一】 原文、心裡只管酸痛、眼淚却不多、こころかなしくて、涙はでません。
- 【八二】 毛深毛氈の類。
- 【八三】 原文、金挖雲紅香羊皮小鞵、紅地に金絲の雲がたの縵をした羊皮の下ぐつ。
- 【八四】 粗い長毛羅紗に白狐の裏付きの鶴髦、此の鶴髦は羽衣の様なもの、一種の道袍なり。
- 【八五】 雙環は二つの輪、裝飾と何かの用のためのもの、四合は四子也。如意は緊緩如意になる也。閃綠は甲斐絹の玉蟲の如きを總て閃といふ也。

て一色大紅腥腥毡（一）か羽毛織的斗篷（二）かを披著て居る人ばかりなのに、獨り（三）李宮裁のみは（四）一件の青哆囉呢（五）の對襟の褂子（六）を着て居、薛寶釵は（七）一件の蓮青斗紋（八）錦上添花（九）の洋線（十）番把（十一）絲的鶴髦（十二）を着て居るに、邢岫烟は（十三）仍是家常舊衣裳で、竝に雪遮の衣（十四）を着て居なかつた。一時史湘雲が來了（十五）のに、見れば賈母が與（十六）他になつた（十七）（二件（十八）の貂鼠（十九）の腦袋（二十）面子大毛（二十一）の黒灰鼠裡（二十二）子（二十三）つきの大褂子（二十四）を着、頭上（二十五）には（二十六）一頂（二十七）の挖雲（二十八）に鵝黃片金（二十九）の裡（三十）をつけた大紅猩猩毡（三十一）の照君套（三十二）に大貂鼠（三十三）的の風領（三十四）を圍著居たので、黛玉は先づ笑つて、僮們（三十五）瞧瞧（三十六）孫行者（三十七）さんが來（三十八）ました、他（三十九）一般的（四十）は雪褂子（四十一）を挈（四十二）著（四十三）ゐるに、此人（四十四）は故意（四十五）に、こんな（四十六）（一個（四十七）の）小騷達子（四十八）みたやうな粧（四十九）をして來（五十）な（五十一）さつたのでせう。すると湘雲は、でも僮們（五十二）我（五十三）の裡頭（五十四）打扮（五十五）的（五十六）を瞧（五十七）て下（五十八）さいましなと一面説（五十九）て、一面其褂子（六十）を脱（六十一）了（六十二）だ。只見他裡頭（六十三）には（六十四）一件（六十五）半舊（六十六）的（六十七）靠色（六十八）の三鑲（六十九）いりの領袖（七十）つき、秋香色（七十一）に（七十二）盤金（七十三）五彩（七十四）綉（七十五）龍（七十六）窄（七十七）褶（七十八）小袖（七十九）掩襟（八十）には銀鼠（八十一）の革（八十二）つきの短襖（八十三）に、又其裡面（八十四）には短筒（八十五）的（八十六）（一件（八十七）の）水紅粧（八十八）緞（八十九）に

【六】 李紈。
【七】 まん中で、ぼたんでしめる様になつてゐるもの。
【八】 紋織、綾織。
【九】 きれいな。
【十】 西洋出來の。
【十一】 哆囉呢よりあらい羊毛にて織つたもの。
【十二】 面子は衣物のおもて、下の裡子に對する言。
【十三】 普通の栗鼠のこと、黒は銀即ち白に非ざることを云うたもの。
【十四】 西遊記の孫悟空、湘雲の服裝のをかきき云ふ。
【十五】 外の姉妹たちは、上の記事は黛玉の人と異なり、ひれくれを現す。
【十六】 野暮な蒙古人。
【十七】 袖又は領のところに、陸海軍服の金筋入りの如く、すぢが三筋ついてゐるなり。
【十八】 窄褶（わきのした）から小袖（そで）まで盤金五彩（きわいと）で龍を綉（ぬい）し窄小ともにほそき意なり。

狐の吹（一）の褶子（二）を着、腰裡（三）には（四）一條（五）の蝴蝶結（六）子（七）した長穗（八）つき五色（九）の宮織（十）を束著（十一）、脚下（十二）には緑皮（十三）の小鞆（十四）を着著（十五）、其様子（十六）が越（十七）で蜂腰（十八）猿背（十九）、鶴勢（二十）螂形（二十一）顯得（二十二）、衆人（二十三）は都（二十四）な、他（二十五）は偏（二十六）に戊（二十七）個（二十八）小子（二十九）的（三十）樣（三十一）兒（三十二）な打扮（三十三）をするのが愛（三十四）ですが、原（三十五）又（三十六）（他（三十七）が）女孩兒（三十八）の樣（三十九）な打扮（四十）してゐる比（四十一）は、其方（四十二）が更（四十三）に俏麗（四十四）ですことよと笑道（四十五）た。すると湘雲は、さあ快く詩（四十六）を作（四十七）ることの商議（四十八）をしようではありませんか、又た今度は是誰（四十九）が東家（五十）ますか我聽聽（五十一）なと笑道（五十二）た。李紈、我的（五十三）の主意（五十四）想來（五十五）は昨兒（五十六）的（五十七）（一〇〇）正日は已過（一〇一）了（一〇二）ちましたから、再（一〇三）に次（一〇四）の正日（一〇五）等は、又太（一〇六）り過（一〇七）ますが、可巧（一〇八）と雪も下（一〇九）つたことですから、僮們（一一〇）大家（一一一）社（一一二）を湊（一一三）め、又ついでに（一一四）他們（一一五）に（一一六）接風（一一七）を給（一一八）てあげた方が不（一一九）如（一二〇）ではありませんか、又丁度（一二一）詩も作り可（一二二）以（一二三）、僮們（一二四）の意思（一二五）は怎樣（一二六）樣で御座（一二七）います。すると寶玉（一二八）は先（一二九）く、這話（一三〇）は很（一三一）く是（一三二）です、只是（一三三）今日は晚（一三四）了（一三五）ましたけれども、明日（一三六）に到（一三七）たら晴（一三八）了（一三九）てしまつて又（一四〇）趣（一四一）がありますまいと道（一四二）ふ。衆人（一四三）は都（一四四）な、這（一四五）の雪（一四六）はこの様子（一四七）では未（一四八）こ必（一四九）晴（一五〇）し、又（一五一）縦（一五二）し晴（一五三）了（一五四）ても、這（一五五）一（一五六）夜（一五七）下（一五八）的（一五九）ましたら也（一六〇）穀（一六一）賞（一六二）する丈（一六三）はあります。李紈、我這裡（一六四）も好（一六五）う御座（一六六）んせうが、又蘆雪庵（一六七）の方（一六八）が不（一六九）比（一七〇）御座（一七一）んせうから、我（一七二）は已（一七三）經（一七四）に人（一七五）を打發（一七六）て（一七七）地炕（一七八）をちやんと籠（一七九）いて去（一八〇）了（一八一）から、僮們（一八二）大家（一八三）で爐（一八四）に（一八五）攤（一八六）りながら詩（一八七）をつくることなどは、老（一八八）太太（一八九）の想來（一九〇）では未（一九一）だ高（一九二）興（一九三）ではないかも知（一九四）れませんけれども、況（一九五）

【九八】 褶子は乗馬に適することき窄き袴也、湘雲のやうすはきりりと男めきたる也。
【九九】 定日、きまり日。
【一〇〇】 社、詩會。
【一〇一】 李嬌、薛寶琴、邢岫烟其他、今度上京して來た人たち前に出づ。
【一〇二】 おちつきふるまひ。
【一〇三】 原文、籠地炕、をんどうろを焚く、勿論火をたくことなれども、火をたきこめて温めるもの故、籠と云ふ。

且僧們の小頭兒で御座いますから、單だ（二五）鳳丫頭までちよいと其事を信兒給おきましたら就是了、
 で爾們每人で一兩づつ御出になれば就了から、それだけはどうか我這裡に送到來まし、香菱、寶琴、
 李執、李紋、袖烟の五個人さんは（二六）指著算ません、又僧們的裡頭の（二七）二丫頭は病了ですから算き、
 又四丫頭は暇を告了て、やすんで居られますからそれも也算ません、それ
 から爾們四分子の費用は送了來よ、我包總て其五六兩の銀子で也（二八）儘
 穀ようにしますから。すると寶釵等は一齊應諾したので、因又詩題を擬め
 たり韻字を限めたりするに。李執、我は明日に到了等てから期に臨まして
 知道せすることに（二九）心裡に自己で定了て居ますと説畢たので、大家は又一
 回閑話了して、方て賈母の處を往て來つた。本日は話なく、次日の一早
 に到了と、寶玉は這事が心裡に記置著て居るので、一夜好生も睡れず、天
 が亮けると就く爬起来、帳子を（三〇）掀起て一看と、門窓などは尙だ掩めて
 あつ雖然、只見窓上から光輝が奪目て居るので、其心内に躊躇起來、定た是晴て日光が已出たのか
（三一）抱怨ひ、一面忙く起來窓扉を掲き起け、玻璃窓内から外往一看と、原來是は日光ではなくて
 （竟是）一夜大雪が下の一尺多の厚も有らうかと思はれ、天上から仍是搓絮一般であつた。此の
 時寶玉は非常に歡喜で、忙く人を喚び起來、盥漱已畢、それから（三二）茄色の哆囉呢に狐の皮

の裏のついた襖子を穿、上から（三三）一件の海龍皮小鷹勝褂子を罩り、又腰を束了て玉針篋を披上、
 金簾笠を戴了、（三四）沙棠の履を登上て忙忙的蘆雪庵を往來て、院の門を出了、四顧を一望に竝無二色、
 遠遠的には（三五）青松や翠竹がみえて、自己は却て琉璃の盆内に裝在如一般で何とも云へぬ様子であつ
 たが、於て是山坡下に走至、山脚に順著て剛と轉過去とすると、已に一陣と寒香が鼻を拂て聞得ので、
 回頭て一看と、却是妙玉尼の攏翠庵の門前中に胭脂の如一般に奇麗な十數株の紅梅が有つて、其雪
 色に映著うて、分外顯得精神、（三六）好不有
 趣ので、寶玉はそこに脚を住了て、細細的一
 回それに賞玩、方て走かうと欲ると、只見蜂腰
（三七）板橋の上からたれか一個人傘を打著て走來
 ものがあつたが、原來は李執が鳳姐を請に打發
 了去的人であつた。寶玉は蘆雪庵に來て至と、只見丫環や婆子たちが正ど那裡に雪を掃ひ徑を開きつ
 つあつた。原來這の蘆雪庵は山に傍て水の臨の（三八）河灘之上に在、一帶幾間の茅簷土壁に、（三九）權の籬
 竹の牖と云ふ工合に至極質素な家作であるので、其窓を推し開くれば、便そこら釣が垂れられる様
 になつて居て、四面は皆是蘆葦繁つて、掩覆に一條の去逕がついて、透迤と穿蘆度葦過去ば、就是
 藕香樹的竹の橋了なつて居た。すると其丫環や婆子たちは他が篋を披笠を戴つて來たのを見て、都な

- 【二五】海龍皮小鷹勝褂子、毛皮のマント様のものとおもへど不明也。
- 【二六】堅き木。
- 【二七】はなばだ趣(おもむき)有らざらんや。
- 【二八】鳳姐。
- 【二九】原文、不算、會費を取らんと訓す。
- 【三〇】原文、儘穀了、またたらんと訓す。
- 【三一】原文、掀起帳子、支那人の床は多く四方に幕を垂れあり、其幕をあげて。
- 【三二】うらみ思ふ。
- 【三三】桔梗色。
- 【三四】よく石橋、土橋などあるが、是は板橋なるを云ふ。
- 【三五】灘は本來淺瀬のこと。
- 【三六】原文、僅籬竹牖、田舎の百姓家式。

笑道、我々は、ここに一人漁翁が 少個と纒説て居ましたら、如今果然すつかりそれが全了しました、姑娘 們は飯を吃了になつてから纒來になりますの呢、爾は也太性急了であらつしやいますこと。すると寶玉は之を聽了、只得回來て、剛ど沁芳亭まで至ると、只見探春がその秋爽齋から出て來るに、大紅の腥腥毡の斗篷を圍著、觀音兜を戴著、一個の小丫頭に 扶著られ、後面から又一個人の婦人が一把の青紬の油傘を打著て居るので、寶玉は其他が今寶玉の處に往去うとするのを知つて、己は遂にその亭の邊に立在て、他來到のを等つて居た。其二人は一同に園を出て前て去た。その時寶琴は正ど裡間屋裡で 梳頭更衣、一時衆姊妹は來齊たが、寶玉は餓じいと嘔うて連連と飯を催促した。好容易と飯を擺上て來等が、頭一様な菜は、便是牛乳で羊羔の肉を蒸たものであつた。すると寶玉は、這は我々有年紀的藥用にするもので、惜ながらまだ天日に没見様なこんな東西は、爾們小孩子は吃ては得ませんし、今兒は另外に新鮮い鹿肉を有てありますから、爾們は等著それを吃り罷。衆人は答應了居た。寶玉は却て等得ず、只と茶を一碗飯に泡了、野雞の瓜子を就著、忙忙と咽完了だ。寶玉は、それを見て、我知道た爾們は今兒又何か事情ますな、飯も也願はぬ様なこととして、便で鹿肉

【二八】原文、少個漁翁、雪の景色のあしらひに漁師が足らぬと云ふ、面白半分に云ふ也。
 【二九】原文、扶著小丫頭、支那にては風にもたへぬ様な風して、女中などにたすけられ、肩などによりすがりゆくを貴婦人の特質としたり、此の扶著とは形容に非ず。
 【三〇】頭をとき、衣物をかへる。
 【三一】色色持ち出すが、初に出た。

を留著てあるから、與他晚上吃りなさいと道はれた。鳳姐兒は忙く、還だ有りますから、方罷了と説うた。すると史湘雲は悄に寶玉と計較する道、新鮮鹿肉がありますなら、俗們一塊要、あとは自己拏著いつて園中で 弄著、又頑ながら又吃じやありませんか。寶玉はそれを聽いて、把三不得一聲兒に便真く鳳姐兒一塊肉を要了、婆子に命じて園中に送入去つた。一時大家散つて後園に進き、李紈の 出題、限韻のことを聽きに齊蘆雪庵に往來ても、湘雲と寶玉の二人が見えなかつた。黛玉は、他兩個は再一處に到不了のね、若し一處に到ると多少か事故を生出來なさるですが、這會子は一定那塊鹿肉を何とかしようと思算計で居なさるのでせうと。正説著と、只見李嬌が也走て來て、其熱鬧なのを見て、因て李紈に問ねる道、怎麼那一個 玉を帶て居られる哥兒と、那一個 金の麒麟を掛て居られる姐兒とは、那樣に乾淨清秀様子をして居て、又食物に少吃はないのでせうに、他兩個は、有來とか有去とか説的て、那裡で生の肉を吃要かと商議著居られる様ですが、我は只も肉也生吃的せられる様なことは信ませんでした。衆人之を聽て、そりや了不得了でせう、さあ快く他兩個さんを拏了ませうと都笑道た。黛玉、這は雲丫頭の

【二三】他寶玉に晚上になつたら吃べさせておやり。
 【二四】料理して。
 【二五】詩題の何を作ると云ふこと、例へば詠菊とか、觀月とか云ふ様なこと、限韻とは一東とか、八庚とかの韻を用ふることを指定すること。
 【二六】原文、帶玉的哥兒、寶玉のこと、またはつきり名を覺えて居ぬ故、かく云ひし也。
 【二七】掛金麒麟の姐兒、寶釵のこと、矢張名を知らぬ故、云ひし也。
 【二八】鬧的、物を生で食へる様なことを云ひ出すのは湘雲のさせること。

鬧的でせうよ、我的的

卦は更に錯ひますまいから。すると李執等は忙出て來つて他の兩個を找著出して、爾們兩個さんは生吃的を吃なさるさうですが、我送爾們「老夫の那裡へ到去なさつて吃つて下さい、那なら生鹿一隻吃ても怕ひませんが、撐病了ても」(二五)我與相干ませんよ、怎麼で此の大雪の怪冷的に、我替禍を作なさるのでせう。寶玉、そんな事は沒有的、我々は燒著吃るの呢。李執は、這なら還罷御座んす道うた。只見老婆子們が鐵爐や、鐵叉や鐵鑊を挈了來た。李執は、仔細なさい、手を割つて、哭いても不許ですよと説著て、其のまま探春と前に過つて去了。丁度その時鳳姐は、年例の放發をする爲に正忙くて、來不能からと回覆しに、平兒を打發した。湘雲は平兒を見了、那裡しても肯放なかつたが、平兒も也「是個」頑好で、素日から鳳姐に跟著無所不至ものだが、今如此に趣さうなのを見て、樂得頑笑、手に上の居た鑊子を褪去て、其三個人は火に圍著ながら、平兒は便く先づ其肉を三塊程燒て吃べた。那邊に居た寶釵、黛玉は、平素看慣了て居るので異とも以爲はなかつたが、寶琴及李嬌たちは深く罕事がつて居た。すると探春は李執に、爾はあの香氣を聞聞ですか、ほんとに這裡までも聞見了のね、じや我也吃べて去ませうと説著て、也他們的(二六)找了來と、李執も也隨て來つて、客が齊了うても還だ沒吃、鼓ののですかと笑道た。湘雲、我は這個を吃べて、方酒が愛吃で御座いますから、酒を吃了、方纔詩を有ることにはませう、若し是這な鹿の肉でもありませんと、

【二五】原文、不與我相干、我とは干係ありません。
 【三〇】やきくし。
 【三一】そこにゆきて會ふ也。

今兒は斷しても詩が作れ能せんでしたらうにと一面吃、一面と(二七)説道説著、只見寶琴が身歷表を披著て那裡に站在笑つて居た。湘雲、傻子ね、爾も噉噉に來な。すると寶琴は、(二八)怪僻的ですからいやですわ。寶釵はまた、爾噉噉去、吃的甚有味、林姐姐は弱くて、吃了ても消化ませんから、吃べられませんのです、然でなければ(二九)他也も愛吃ですけども。寶琴は之を聽了、便く過去て一塊吃了てみると、果して好吃かつたので、便也吃起來居た。一時鳳姐から平兒を叫に丫頭が打發來たので、平兒は(三〇)史大姑娘がちよいと拉著我ですから、爾は先去罷と説た。その小丫頭は説を聽いてそのま去了一時只見鳳姐が也斗篷を披了て走來て、這様な好東西を也我にも告訴んでと笑道説著、也一處に湊在て鹿の肉を吃起來居た。すると黛玉は、那裡から這一羣(三一)花子さん等は(三二)找て去ましたらう、罷了罷了、今日は此の蘆雪庵も(三三)劫

に遭うて、生雲丫頭に作踐了まして、我ほんとに蘆雪庵の爲に一哭ますわ。湘雲、爾は(三四)知道什麼から、是こそ眞に名士は自ら風流で、爾們が清高がるのは(三五)最可厭です、我々は這會子に腥羶を、大吃大喝て、回來でまた都是錦心繡口ですわ。寶釵、爾はそんなことを説ひですが、回來で作不好了と、

【二七】俗文は此の如く冗慢な筆使ひ多し。
 【二八】怪は甚也、僻はきたないこと。
 【二九】林黛玉は、此の他はなきもよし、俗語體也。
 【三〇】史湘雲のこと。
 【三一】みんなが鹿の肉を食べるのを戯れ言ふ也。
 【三二】原文、找去、此の肉の在る處をさがして去(き)た、找はさがす、尋ねる、北京地方の俗語。
 【三三】原文、遭劫、因果にも。
 【三四】何も御存知ない、なにを知らんや。
 【三五】最も厭ふべし。

【四二】その鹿の肉を口から掬り出して、其かはりにこの雪の壓になつてゐる蘆葦を搥んで、【四三】此劫一からと説著て吃畢り、一回洗滌了が、平兒が其鐺子を帶めようとしてさがした時、却も一個少了ので、左右前後一番找したけれども、踪跡全無ので、衆人都て詫異んでゐた。鳳姐、我はちやんとこの鐺子の去向を知つて居ます、爾們只管【四四】不用找、今此の詩を作去て三日を出ないうちに、管と就見了からと説著て、又、爾們は今兒は何の詩を作ります、老太太は説了て居られました、離年も又近りましたし、正月裡には還た【四五】燈謎兒など作些て大家頑笑該から。すると衆人はそれを聽了都な笑道、可是、到忘了居ました、如今趕著幾個か如的作て正月裡頭を預備著ませうと説著て、一齊に地炕のある屋裡に來て至た、只見杯盤菓菜は、俱已に齊備で、牆上には已詩題が貼出れて來たのを、寶釵、湘雲の二人が【四六】忙看時、(只見)題目は(是れ)即景 聯句の五言排律一首を、二蕭の韻に限ると出て居て、其後面は未だ次序が列て居なかつた。すると李紈は、我は大詩は作れ會んから、(我は)只だ三句だけ起り罷から、後には誰でも先に得了たのが【四七】誰でも先に聯けるとしませう。寶

【四二】原文、把那鹿肉、把は助動詞の「を」に當る。
 【四三】前に黛玉は遭劫と云ひし故、それを受けて、ここで、そんなことをしたわるきの返報をすると云ひしなり。
 【四四】此の鹿肉を食べ始める時その腕輪をぬいで、そこに置きしこと前に出づ。
 【四五】其腕輪をさがしなさいますな。
 【四六】燈になぞの詩を書いて、何を云ふかあてること。
 【四七】此の如き忙は、意軽く、寧ろ語呂上の辭、下の只見も同じ。
 【四八】我國の連歌の如く、一首の詩を、幾人もよつて作ること。
 【四九】原文、誰先…誰先、どなたが一ばんさきに、五言律の詩が出来ませう。

釵、到底もみな好く分別次序をつけました方が好う御座いませうと道うた。其端的是は下回に分解せん。

第五十回

蘆雪庵に争うて即景の詩を聯し、暖香塢に春燈の謎を雅製す

話說薛寶釵は、到底次序を分個なさいまし、我が寫出來からと説著て、衆人に闇を拈てもらつて
【一】原文、讓我寫出來、我に寫(か)き出來(ださ)讓(し)めよ。
【二】雕琢推敲をせぬ、ありのままの句。
【三】越は、いよいよ也。粗話は雕琢の反、自然的句調。
【四】詩作などは頑要的、即ちなくさみで、職務などは正經事なり。
【五】そこをみぬ、後が。
衆人も也た一句上頭の句を在説う。すると衆人は、それは更に妙御座いませうと笑説た。寶釵は便く稻香老農の上に鳳の字を補了個、李執は又詩題目を他に講與聽た。鳳姐は半日想了て居て、爾們笑話ては別ませんよ、我は只の一句粗話が有ただけで、下剩的は我は(就ち)知道ませんから。衆人、爾の越是粗話越好御座んせうから、爾説了になつて、就只管爾の正經事を幹去罷な。すると鳳姐は、我想雪が下ると必と北風が刮くものです、昨晚一夜的北風が聽見ましたので、我は(就是)一夜北風緊と一句有りましたが、使得で可。衆人は之を聽いて都な相視て、這の句は粗の様でも、不見底下る、這は好但ではなく、而且多少の地步を後の人に留了て與てあります處などは正是詩を作ること會つてゐるの起法です、就是這の句を首として、稻香老農さん快く寫上て、續下去下さいと笑道うた。鳳

姐は李嬌や平兒と又兩杯の酒を飲んで各自了た。這裡で李執は一夜北風緊と寫上、それから自己は聯句をつけて、門を開けば雪尙ほ飄る。泥に入つて潔白を憐み。
【六】此の聯句は八蕭の韻を用ふ、上句は下句につづいて對聯をする也。
【七】原文、入泥憐潔白、此の潔白な雪が泥にまみれて、人に踏まるるは、いじらしい様な氣がする、此の入泥は、下の迎地に對す。
【八】いづこも。
【九】原文、惜瓊瑤、奇麗な雪で。
【一〇】此の有意は下の無心に對聯す、以下皆な此の如き意にて見よ。
【一一】つまらぬ草。
【一二】良き村釀、即ち酒が出來る、即ち豊年になる。
【一三】原文、失翠、冬になつて、山などの霜枯の様子を云ふ。

と道ふ。香菱は
【一〇】意有りて枯草を榮えしめ。
と道ふ。探春は
【一一】心無くして、萎蒼を飾る。【一二】價高くして村釀熟し。
と道ふ。李綺は
【一三】年は稔りて府梁饒なり。【一四】葭は動いて灰管に飛び。
と道ふ。李紋は
【一五】陽は回つて斗杓を轉ず。寒山已に翠を失し。

と道ふ。岫烟は

凍浦潮を聞かず。(二六)掛り易し疎枝の柳、

と道ふ。湘雲は

堆り難し破葉の(芭)蕉に。(二七)麝煤は 寶鼎

に融け。

と道ふ。寶琴は

(二九)綺袖は金貂を籠む。(三〇)光は窓前の鏡を奪

ひ。

と道ふ。黛玉は

香は壁上の椒に粘む。(三一)斜風仍ほ故故。

と道ふ。寶玉は

(三二)清夢轉た聊聊。何れの處の 梅花笛ぞ。

と道ふ。寶釵は

誰が家の 碧玉簫ぞ。(三三)熬は愁ふ坤軸の限り。

丁度其時李紈は、我は(儂們的替に)熱酒を看去罷からと笑道た。寶釵は寶琴に、さあ續聯をと命

【二六】原文、易掛疎枝柳、雪の下り積る形容。

【二七】香炭のこと、寒き故に云ふ。

【二八】必ずしも鼎に非ず、茶釜などにも云ふ。

【二九】原文、綺袖籠金貂、縫などした服装に貂の皮などつけたり。寒き故也。

【三〇】原文、光奪窓前鏡、窓外の雪は窓下の鏡よりもひかるの意。

【三一】原文、香粘壁上椒、婦人の室は暖にして子に宜き様、椒木を壁にぬり込めると古よ

り云へり。香は椒を形容したもの、婦人の暖室にも。

【三二】原文、斜風仍故故、故故はしばしば。

【三三】夜もよく睡れぬ、それもその故、下を續け見よ。

【三四】梅花は笛の曲名、梅花の譜の笛を吹くためだ。

【三五】玉で飾った簫を吹くので。

【三六】原文、熬愁坤軸限、熬は海中の大魚也、昔し熬の足を断ちて四極を立つと云ふことあり。

うて居ると、只見湘雲が站起来て

龍鬬つて陣雲銷ゆ。(三七)野岸孤棹廻り。

と道ふ。寶琴も也站起来て

吟鞭 灞橋を指す、(三九)裘を賜ふ憐撫の成。

と道つたので、湘雲那裡肯讓人、且つ別人も也

他の敏捷なのに如はぬので、(都看)他は揚眉

挺身

(四〇)絮を加へて征徭を念ふ。坳垤夷險を審にす

べし。

と説道。寶釵は連聲に好いと贊ながら便く

(四二)林枝動搖せんことを怕る。皚皚として軽く

歩を越ひ。

と聯道る。黛玉は又忙く

(四三)剪剪として舞うて腰に隨ふ。芋を煮て新賞を成し。

と聯句を一面説、一面では、命ニ他聯一と寶玉を推るので、寶玉は正と寶釵、寶琴、黛玉の三人がか

【三七】野岸孤棹は訪載の故事、

【三八】孟浩然の故事、雪中驢に騎る孟浩然とあり、その如く灞橋あたりで驢に騎つた古詩人の雪中の姿をしのび。

【三九】原文、賜裘憐撫成、唐肅宗の後、戦士の袍を縫ひ賜ふと云ふ事あり、寒い時に裘を下さると云ふが、さぞ難有いとである。

【四〇】寒くて絮、即ち棉入の衣物を衣ては遠征の人を念ひ、

坳垤、即ち小丘の如きもの、

雪には知れぬど途の艱難なるを思ひやる。此たひらかさかしきを氣をつくべしと也。此句に二重の意あり。

【四一】折角枝上に積つた雪、如何にも奇麗である、此の句にも裏の意あり、雪中を軽く歩みながら、それをながめ。

【四二】ひらひらと舞ひ落ち、體(からだ)にふりかかる雪を拂ふ。又た芋など賞したべる。

りで湘雲と共戦ひ、十分趣いので、那裡還た己の聯詩を顧得ふ段ではなかつたが、今黛玉から推他

されて、方て
【三】鹽を撒は是舊語。艇簑猶ほ泊釣す。
と聯道る。湘雲は、爾快下去、爾不中用です、到就擱了我、ますますぞと笑道て居ると、寶琴が

忽ち
【三】謝道蘊が、雪景に對し、
林斧乍ち樵を停む。伏象して千峯凸し。
と聯道る。湘雲は又忙く
【三】鹽空中、差可擬と詠んだのは、むかし物語、今艇中にとぞこめられ、舟がかりして思はず雪を賞す。

【三】盤蛇一徑遙なり。花は冷を經に縁に聚り。
と聯道る。寶釵は衆人と好いと贊た。探春は
【四】樵夫も木を伐るをやめてながめ入るやうな絶景。前山雪ゆる、象が伏したやうに高く。

色は豈霜を畏れて凋まん。深院寒雀驚き。
と聯道た。湘雲は(正道)渴了たので忙忙と茶を吃んでる間に、已く岫烟に
【三】まはりくねつた山みち、雪に遙なるあたり、雪花は冷氣愈加るによつて深くな

【三】空山老鴉泣く。階墀には上下に隨ひ。
と聯道れて、湘雲忙はしく茶杯を丟下、
池水は浮漂に任ず。照耀として清曉に臨み。

と聯道た。黛玉は
【三】續紛として永宵に入る。誠に三尺の冷なるを忘れ。
と聯道る。湘雲は忙く
【三】瑞は九重の焦を釋く。僵臥するも誰か相問はん。

と聯道る。寶琴もまた忙く笑ひながら
【四】狂遊客は招せらるるを喜ぶ。天機綺帶斷え。
と聯道た。湘雲が
【四】海市鮫綃を失す。

と道へば、林黛玉は不容他道、それを接著て
【三】寂寞たり荒池の榭。
と便道た。湘雲は也忙く
【四】清貧なり陋巷の瓢。

と聯道ると、寶琴は不容情也忙く
茶を煮て氷漸く沸き。

【三】深院の寒雀は、しきりに驚かん。
【三】空山に老鴉ないて、一層雪中の凄寥をしのばせ。宮中の御庭には又た上下いづれも雪ふりしきる。
【三】池には只だ雪が、ひらひらと降つては積り、降つては積つて居る。朝には實に目もさむるばかり。漂は飄に同じ、雪のひらひらふる形容。

【三】續紛と夜深までふりしきる、雪を賞する人は、其三尺深くふつてもしみわたる様な寒さを忘れん。此の三尺は宋の程氏の門人、游揚、雪の中に立つて程氏の命を待った篤學の故事。
【四】此の雪は豊年の瑞であるから、九重の深院に在す天子も御満足であらう。漢の波黯の如く、役所に寝て居てもよからう。つまり雪の豊年の瑞たるを云ふ。
【四】上の僵臥、即ち只だ臥して居る人と違ひ、酒飲みまは

と道ふ。湘雲はそれを見て、又自己が該ぬものの様に自爲て、忙く

望酒を煮るに葉焼え難し。

と聯道た。すると黛玉は

【四六】 帯を没して山僧掃ひ。

と笑道ば、寶琴は

【四七】 琴を埋めて稚子挑ぐ。

と笑道た。すると湘雲は【四八】 腰を灣了て笑ひながら、忙ぐ一句念了、衆人

は、到底是什麼を説的でしたと問くと、湘雲は

【四九】 石樓睡鴨閑なり。

ですと喊道ので、黛玉は胸口を握著て笑的ながら、又高聲に

【五〇】 錦罽親猫煖なり。

と嚙道と、寶琴は也忙く

【五一】 月窟に銀浪翻り。

と笑道た。湘雲は

【五二】 霞城に赤標隠る。

【四六】 雪のために、木の葉ももえにくい。

【四七】 雪の深きをいふ。

【四八】 これも雪の深きをいふ也。

【四九】 灣了腰、腰をまげる、處かばれば品かばる言ひ顯し方なり。

【五〇】 何をながむるか、石樓の上に鴨など悠悠と睡つて居る。

【五一】 錦罽、きれいな煖かな敷物の上には猫は居睡りし。

【五二】 此の席をまく様な雪のふりかたは、月(い)はやに銀浪(しらなみ)天をついて湧くのかしら。

【五三】 孫綽、天台山の賦に、赤城霞起以建標とあり、ここにては、霞城とは、町の夕方のことを云ふ、夕方雪がふり酒屋の赤旗もみえぬ様になつた。

と聯道る。黛玉はまた忙く

【五三】 梅に沁み香嚼むべし。

と笑道ば、寶釵は好いと笑著稱て、也た忙く

【五四】 竹に淋ぐ酔調するに堪へたり。

と聯道る。寶琴は也忙く

【五五】 或は濕す鴛鴦帯を。

と道へば、湘雲はまた忙く

【五六】 猶ほ凝る翡翠翹に。

と聯道る。黛玉は又忙く

【五七】 風なくして仍ほ脈脈たり。

と道へば、寶琴は也忙笑つて

【五八】 雨ならざるも亦た瀟瀟たり。

と聯道た時は、湘雲は伏著て已に笑軟た様になつて居、ほかの衆人は他三

人がしきりと【五九】 對搶のを見て、自分等の詩を作ることなどは也顧不_レ得、也只笑つて看_レ著してるのみ

であつた。すると黛玉は還た他に往_レ下の聯はどうで御座いますと推しながら、爾也才盡力窮ではあ

【五三】 梅につもれる雪は、香もありて可_レ嚼と也。

【五四】 竹にかかれる雪は把りて啖ひて酔をとくべしと也。

【五五】 雪が鴛鴦帯を濕すとなり鴛鴦二字ほんの鳥をかれて趣あり。

【五六】 翹はかざりなり、翡翠の首飾に雪が凝る也、翡翠の二字趣ある也。

【五七】 脈脈とは、雪の降る形容。

【五八】 瀟瀟、ものさみしき音の形容。

【五九】 競争する。

りませんか、還だ什麼な舌根嚙了が有ますか我聽聽下さいなと又道ても、湘雲は只だ寶釵の懷裡に伏在てしきりと（六〇）笑個不住。すると寶釵は、他を推起來ながら、爾はほんとに本事がおりなら二蕭的韻だけ（六一）全用完了了ておしまひなさい、そしたら、我も纔に伏しませうと。すると湘雲は起身て、我は也詩を作りません、竟是（六二）命を捨られますからと笑道た。衆人笑つて、到是爾自己說罷と道うた。又探春は早已に自己の聯的分は沒有と料定たので、便く命で、書き出來せて、因で收住が沒ですぬと說道と。李紋は聽了、すぐ接過來誌さんと欲す今朝の樂を。

と聯道る、李綺は又詩に憑つて舜堯を祝せん。

と一句收了だ。李統は、穀了穀了でせう、韻はまだ（六三）作完了ますまいが、若し韻字を生扭して用ひます様では、到つて好くありますまいからと説著ので、大家よつて來て細細其詩を評論一回と、獨り湘雲の作が最多かつたので、都が這は都是那塊の鹿肉の功勞でせうと笑道た。すると李統は、句を逐うて評して去すと、都な（還た）一氣ですが、只是寶玉さんは又落了了了すね。寶玉は、我は原聯句は會ません

【六〇】 笑個不住、笑つて住（や）ます。
 【六一】 全用完了、韻字のあり丈け使ふ、詩才の高きを云ふ。
 【六二】 原文、捨命、捨の字にかしもある也、前の句を捨して、ひつたくるやうに次の句を聯するそれが對捨で、今まで三人篇を削つてやりあひ居し也、そこで捨命と云ひし也。
 【六三】 雖無作完了韻、二蕭の韻に屬する丈の韻字を使ひ盡さぬが也。
 【六四】 生は熟の反、扭はもぢること。

のですから、只好か我は擔待て下さい罷。すると李統は笑道、社に爾を擔待にする譯には沒有、爾は韻が險しいと又説なすつたり、又整悞了、それから又聯句は會きぬなど説ひですから、今日は必一つ罰、爾からさうお思ひなさい、我は纔か看見ましたら（六五）攏翠庵の紅梅が仲仲有趣御座いましたから、一枝折つ來瓶に挿さうと要ましたが、あの妙玉さんが（六六）爲人可厭ですから、我不理他が、如今爾は罰に一枝折て來て下さい。衆人、この罰は、又雅でもあり又趣もあつて、至極宜う御座いませうと都道ひ。寶玉も也た樂んでそれを爲ようと答應著、便く走かうと要た。湘雲、黛玉の二人は、一齊て、外頭は很く冷的ますから、爾は且熱酒を一杯吃で再去と說道て、湘雲は早く壺を執起來と、黛玉は又（一個の）大杯をわたした。一杯満斟了遞了て、湘雲は又、爾は（我們的）這杯の酒を吃了、それで爾は紅梅を取つて來て下さらぬと、その倍加に罰、爾ますから宜う御座んすかと笑道た。寶玉は忙く其酒を飲み雪を冒して去つた。李統は又人か好生跟著やらうと命ら、黛玉は忙に攏て説ふ様、必ずなさらぬ方が宜う御座んせう、妙玉さんは妙な人ですから、人が有てゆきましたら、反て紅梅を得なさらぬでせうから。すると李統は説是と點頭ながら一面丫環に命じて聳肩瓶を一個挈て來て、水を貯れて其梅を挿す準備をさせ、回來で此の紅梅を咏み詠うと因又笑説た。湘雲は忙く、我が先づ一首作ませうと道へば、寶釵は又忙道、今兒は斷しても爾は再作では容ません、爾が（七〇）都捨了去、

【六五】 妙玉はこの院主で、變な人物故、人之を嫌ふ也。
 【六六】 人となり厭ふべし、妙玉は古怪の性質故なり。
 【六七】 湘雲一人の獨占の様に、

別人は都な閑著では、趣が没から、それから回來で還た寶玉を罰せにや
なりませすまいよ、他は聯句は會ぬと説うて居られますから、如今は他
自に作去もらひませう。黛玉、這話は很是御座んせう、それから還た我の
主意では、方纔に聯句し不穀で居ますから、那聯句の少的人に今度の紅梅
の詩を作つていただきませうじやありませんか。寶釵、這話は是極せう、方
纔邢(岫烟)と李(紋・綺)の三位に屈才しても居、又且是客員でもありません、
琴兒と顰兒と雲兒の三個人は也許多搶了でしたから、我們は一概作ら
んで、只だ他三個に作つていただけかうではありませんか。すると、(李)綺
兒は大詩は作れませんかから、(還是)寶琴、妹妹に讓いただきませうじやありませんかと李綺は説う
た。寶釵は只得依允させることにし、又道ふ様、就紅梅花の三個字を韻として、每人で七言律を
一首づつ、邢大妹妹は紅字を、李大妹妹は梅字を、琴兒は花字を韻に用ひなさつたらどうでせう。李
毓、寶玉を饒過去なさるのには我は不依で御座んす。湘雲、ああ好題目が有個ますから、それを他作ても
らはうじやありませんか。すると衆人は、是何な題でせう。湘雲、題は妙玉を訪ひ紅梅を乞ふといふ
を作命、他じやありませんか。衆人は之を聽了都な、それは趣御座んせうと説一語未了と、只見寶玉は
笑嘻嘻して一枝の紅梅を 背て進來た。衆丫環は忙已く接過て、例の瓶中に挿入、衆人は都笑稱謝

詩を作りしこと。
【六八】原文、叫他自作去、寶玉に紅梅の詩をつくらせる。
【六九】寶琴、邢岫烟は年少なる故、妹妹とか、丁寧に大妹妹とか云ふ也。
【七〇】紅は一東の韻、梅は十灰の韻、花は七麻の韻也。三人各其中の一字を韻として詩を作る也。
【七一】原文、背了、其枝を背にかけて。

た。寶玉は、僮們で賞玩して下罷、不レ知レ費了我多少精神、呢と説著と。探春は又煖酒を一杯遞過來、
衆丫環は上來て其篋や笠を接了雪を揮つたりした。各人の房中の丫環が都な其主人の衣服を添送、
襲人も也半舊的狐腋褂を人に遣せて送了來。李毓は那の蒸的の大芋頭を一盤に盛了て人に命せ、又朱
橋、黃橙、橄欖等の物を兩の盤に盛了、人に命せて襲人に帶與吃去。又湘
雲は、寶玉に 方纔の詩題を告訴せ、快く作る様寶玉を 推た、寶玉は、
好姐姐妹妹、我は、私の自己に韻を用はせて下罷と一面説一面大家と一處
に其梅花を看るに、原來這枝の梅花は二尺來高で、旁から約そ五六尺長も
有る一横枝が縦横に出て、又其間に小枝が分岐、蟠螭の如にくねつたのや、
僵蚓の如になつたのや、筆の如に孤削つたのや、林の如に密聚つて、花は
胭脂を吐けたやう、香は蘭蕙をも欺いで其美しさ譬へがたないを各各稱賞
して居た。誰知邢岫烟、李紋、薛寶琴の三人は都已其詩が吟成て、各自寫
了出來。衆人は紅、梅、花三字の序に依つて作去と。
紅梅花を咏す (紅字を得)
邢 岫 烟
桃は未だ芳菲ならず杏は未だ紅ならず、寒を冲して先づ喜ぶ東風に笑ふ
を。顰は 度嶺に飛んで春辨じ難く、霞は羅浮を隔てて夢未だ通せず。
緑 夢 粧を添へて寶炬を

【七二】寶釵、黛玉、李毓等のこの。
【七三】原文、方纔詩題、訪妙玉乞紅梅。
【七四】紅字の韻でつくること、詩の意に云ふ、桃も杏もまだ花を開かぬに、寒中を犯して奇麗に花がさいた、東風は春の風なり、顰と霞は梅花を活喻して云うたもの、即ち梅と花を霞に見たてたるなり、度嶺の梅、羅浮山の霞、春はいづこぞ、夢。
【七五】度嶺は梅の名所。
【七六】緑の夢は、紅の花と相映じて一層の美を添へる、寶炬とは、あかきとを云ふ。
緑 夢 粧を添へて寶炬を

融し、(毛) 綺仙醉を扶けて残虹に跨る。看來れば豈是れ尋常の色ならん。濃淡由他氷雪中。

紅梅花を咏す (梅字を得) 李 紉

(一〇) 白梅賦するに懶く紅梅を賦す、艶を逞しうして先づ醉眼を迎へて開く。凍臉痕あるは皆な是れ血、酸心限なく亦灰と成る。誤つて丹藥を呑んで眞骨を移し、偷に瑤池を下つて舊胎を脱す。江北江南春燦爛、言を寄す蜂蝶漫に疑猜するに。

紅梅花を咏す (花字を得) 薛寶琴

(一一) 疎は是れ枝條艶は是れ花、春粧の兒女奢華を競ふ。間庭曲檻餘雪なく、流水空山落霞あり。幽夢は冷に紅袖の笛に隨ひ、遊仙の香は絳河の槎を泛ぶ。前生定めて是れ瑤臺の種、復た相疑ふこと無かれ色相の差ふを。衆人はこれを看了都なで一回と笑稱賞了、又

【七】 綺仙は雪のこと、雪は酔うて残虹の如き紅梅と相映じてうつくし、跨とは樹の枝などにふりかかる様子。

【七】 かく濃淡宜しきを得て、氷雪の中に咲いた紅梅の風情は、又た格段の趣がある。

【七】 梅字の韻で作る。

【八】 紅梅のやさしき姿は醉眼に映じて艶に、凍れる臉即ち花片に紅痕あるは、皆なその心血か、酸心限りなかりしもその今已に灰の如く消え散じたものか、曾て誤つて丹藥を呑んだ爲に、かく其丹藥の眞骨即ち紅梅となつて了ひ、遂に仙地瑤池に偷下(き)てかく舊胎を脱して、江北江南の地に春燦爛たるの美觀を添へあらはしたるものか、偕て蜂蝶

【六】 如何にも美しくして、春粧のよそほひを凝して、はでを競ふ有様は、げにうるはしさの極みである、今や已に春色催し來て間庭曲檻、何れの庭園にも、のこんの雪消え、野邊山地も霞たなびく、されば物靜にして人を醉はしむる花露の有する幽夢は、紅袖の麗姫の妙笛が、自然人を酔ひ迷はしめ、得も云はれぬ紅梅の香は、所謂遊仙の香が(絳河に槎(さな)を泛ぶ)來て人を撲つ如し、此の梅花の前身は天上瑤臺の仙種である、色がちがふとて疑ふ勿れ。

末の一首指更に好いと説うた。寶玉は他年紀が最小て、其才が更に敏捷なのに、深爲三奇異すると黛玉、湘雲の二人は一小杯に酒を斟了て寶琴を齊賀た。寶釵は、其三首の詩には各好處が有ります、爾們兩個は天天も我を捉弄厭て、如今は又他を捉弄來了かと笑道た。李紉は又寶玉に、爾はどうで御座んす、有可かと問いた。寶玉、有ることは到有了ましたが、那の三首の詩を纔と一看見ましたために、又(二) 嘯了ましたから、等我が再想一想。湘雲は説を聽いて、便く(一枝の) 銅火箸を拏了て香爐を擊著ながら、我がこんなに鼓を擊ますから、若し此の鼓をとつて絶ても詩が成ませなんだら、又罰しますからと説道た。寶玉、我は已に有了ました。すると黛玉は筆を提起來、爾念なさい。我寫しますからと。そこで湘雲が便く一下擊了て、一鼓絶よと笑道と、寶玉は、はい有了から、爾寫罷と笑道たので、衆人は、他が酒未だ罇を開かず (四) 句未だ裁せず。

【八】 はつと思つて忘れた。

【八】 原文、若鼓絶不成、此の香爐を、大鼓の代に拍子をとつてたたき、其たたくことがすんでも、詩が成(でき)ません時は。

【八】 原文、句未裁、詩はまだ出來ぬ。

【八】 起句、はじまり。

と念道のを聽いて、黛玉はそれを寫しながら頭を搖て、(五) 起的は平平凡凡です。湘雲、さあ快著。すると寶玉は、春を尋ね臘を問うて蓬萊に到る。と笑道と、黛玉湘雲は都點頭て、意思う有些と笑道た。寶玉は又

求め (六) 大士瓶中の露、乞ふを爲す嬭娥檻外の梅。
黛玉は其通り寫了、又頭を揺つて、巧湊而已ですと説うて居ると、湘雲は忙しく一鼓を催ると、寶玉は又

(七) 世に入つて冷き紅雪を挑げ去り、塵を離れて香紫雲を割いて来る。椗椀誰か惜まん詩眉の瘦するを、衣上猶ほ沾る佛院の苔に。

黛玉は其を寫き畢り、大家が纒て其を評論して居た。只見幾個の丫環は、老太太が來になりま

したと進來回道ので、衆人は忙しく迎出來ながら、大家は、怎麼して這様に高興あつしやるだ

らうと説著て居た。遠慮から賈母が大斗篷を圍著、灰鼠の暖兜を戴著、小竹轎に坐著、青紬傘を

打著せ、衆人が轎に擁て來たのを見て、李紈等は忙しく往上迎に出た。賈母は、只だ那裡に站て居たが

就是了と命人止住、跟前に來至と、賈母、私は爾太太と鳳丫頭を瞞著して來了のです、大雪地です

から、我は這裡に坐著て居るから無妨が、他娘兒們に雪の來踏ま叫のは氣の毒だから。すると衆人

は一面では上前て其斗篷を接、摺扶て轎から下してあげ一面空應著た。賈母はやがて室内に來至て、

好俊な梅花だね、爾們が會て樂んでると思つたから、我も來著了のですと説著ると。李紈は早く人命

て大狼皮の褥子を挈了來て當中に鋪在せ、賈母はそれに坐了て、因笑道、爾們只管照舊頑笑吃嗑く

れ、我は天が短い因爲、睡中覺は敢んで、一會と骨牌をして居て、忽然爾

們のことを想起來了、我も也趣兒を湊個に來ましたのじや。李紈は早又

手爐を捧過來。探春は別に (一副の) 杯や箸を挈つて來て親自で煖酒を

斟了て賈母に奉與ると、賈母は便く一口飲了、那個盤子の裡の東西は是什

麼かと便問たので、衆人が忙それを捧了過來て、是糟鷓鴣で御座いますと

回説た。賈母、這は到罷了、一兩點腿子のところを 撕來と道はれた。李紈

は忙答應了、水要手を洗ひ、親自で來撕てあげた。賈母は又、爾們は舊の

仍坐下て説 笑て我に聽かせてくれなと道はれ。李紈にも又、爾も也只

管坐下て 如同我沒來的一樣纒是、然してくれぬと我は就去了から。

衆人はそれを聽いて、方ら次に依つて坐下び、只だ李紈は 儘も下邊に 擲到去了た。賈母は因、

何事を作來著かと問かれたので、衆人は詩を作るところで御座いますと説うた。賈母は、詩を作るく

らぬなら、燈謎を作些方が不、如、して大家正月裡好頑ませう。衆人は答應了して又一回説笑了など

【六】 此は妙玉の處から紅梅を貰つたことを云うたもの、此のこと前に出づ、觀音大士の瓶中の柳をもとめるではなく、嬭娥の檻の外の梅を乞ふのである。

詩眉、即ちあらん限りの詩腸をしばつて汝を詠じたいものだ、今かくして汝を持て居るが、今迄居た佛院の苔に沾うて得も云へぬ可憐の趣をして居ることぞ。

【七】 入世とは、此の紅梅は元と寺内に在りしもの故、今ここに來てと云ふ也、爾紅梅は此の寒中に紅雪の如き艶姿を現し、又た離塵と云うて此の世に珍しき香は、紫雲をさいて來る、紫は紅に近き也、空をつんざいて香ふが、その椗椀たる趣ある椗椀を見ては、

【八】 上に衆人と云ひ、又たここに其衆人と同格の大家と云ふ、支那俗文、殊に本書の筆癖なり。

【九】 太太と鳳姐が賈母にお伴して來ることを云ふ、娘は母、兒は子、前にもある言なれども妙な詞なり。

【一〇】 一對の義になれども、本來は、只だ一個と云ふこと。

【一一】 斯と同じ、筋目の通りにさく。

【一二】 我がここに來て居ないと同じ様にして居ておくれ。如同一様、おなじやうにして、纒是、まきによし。

【一三】 盡と同じ、支那人は容易な字を、時としては難く書く癖あり、一番はし。

【一四】 うつる、ゆく。

した。賈母、這裡は潮濕から、爾們久く坐けて居ては、別、よく仔細ぬと潮濕を受たますよと便道
 して、因又、爾四妹妹の那裡は暖和だから我門那裡に到つて、他的畫をかくのでも瞧瞧ようじやない
 か、年趕には大方有ませうからと説はれた。すると衆人は、那裡(能く)年の下に就有了、只怕明年
 の端陽位に有了ませう。賈母、這は還だ了得が、他の畫をかくことは園
 子を蓋る比も還だ工夫が費りますねと説著て、仍竹の轎に坐了た。大家圍
 隨て藕香榭を過了て一條の夾道に穿入と、その東西兩邊に皆な過街門
 があつて、其門樓の上には、裡外皆に石頭匾が嵌つて居るが、如今進
 的たのは是西門の方で、其西門の外に向いた匾上には穿雲の二字が鑿著、
 裡の向には度月の兩字が鑿著てあり、そこを通りぬけて當中まで來至と、
 南に向いた正門があり、賈母は轎を下了されると、惜春が已に接了出來、
 裡遊廊を過去と便是惜春の臥房で、門斗の上に暖香塢と三個字が書いて
 有つて、そこには早に幾個人かで猩紅毡簾を打起て居たので、已に温香拂臉であつた。やがて大家
 が其房中に進入つても賈母は竝不歸坐、只だ畫的畫兒は那裡在と問いて居られた。惜春は、天氣
 が寒冷ので、膠性が皆な凝澁て潤びず、其爲畫了が好看ませんから、此に收起來御座います。賈母、
 我は此の年下に就要的思ふから、爾どうかね別脱懶兒に快く拏出來、我快畫給れよと、一語未了

- 【九五】 じくじくとそこびえする
ことなど。
- 【九六】 山門の様な門の上に樓即
ち二階がついて居るなり。
- 【九七】 門樓の表裏兩面共に。
- 【九八】 室の入り口、門は日本の
戸に當る。
- 【九九】 原文、畫兒畫的、畫兒は
名詞、畫的は動詞。
- 【一〇〇】 繪の具に入れ用ふる也。
- 【一〇一】 原文、給我快畫、わが給
(ため)に快く畫け。

ると、忽見鳳姐は紫の絨褐褂を披著て、笑孜孜としてやつて來了、老祖
 宗、今兒は也人にも告訴にならんで、私自と就來になつたものですから、
 要的で我好找をしました、と口内説道た。賈母は他が來のを見て、心中自
 是喜悅、我は爾們が冷著了と怕うた所以、人も爾們に告訴ぬ様にさせた
 のですよ、爾は眞個に 鬼靈精兒の如く、到底我を找し來ました、併し
 理論は我に孝敬て呉ると云ことは這な 上頭では在りませんよ。すると
 鳳姐、我は那裡も孝敬の心で找了來のではありません、我が老祖宗那裡に
 到了ましたら、まるで 鴉沒雀靜居ましたので、小頭子們に聞きまして
 も、他們肯とも説ひませんので、我を園子裡まで到來しめるので、(我は)
 正と疑惑して居ましたら、忽然又三個の姑子さんに見ましたので、我心裡
 は纔と明白しました、那の姑子たちは必是 年疏を送るか、或は 年例の
 香火銀子を要に來つたのでせうが、老祖宗は年下の事也多御座いますから、
 一定と是 驟債來了ことと思ひましたから、我は趕忙那の姑子たちに問
 了みましたら、果然不錯から、我は連忙年例を給了了他們、去了から、來ま
 して老祖宗に回しあげます、債主は已に去りましたから、もう驟に用ませ

- 【一〇二】 原文、不許人告、訴爾
們去、人が爾們に、我がこ
に去(ゆい)たと云ことを告
訴(いふ)を許さぬ。
- 【一〇三】 鬼神。
- 【一〇四】 事、老太太をさがし機嫌
を取る。
- 【一〇五】 烏は居なく雀はしづか、
無人の貌。
- 【一〇六】 原文、叫我到園子裡來、
園迄尋ねてゆきまして。
- 【一〇七】 毎年年末の御經をあげ讀
むこと。
- 【一〇八】 原文、年例香火銀子、例
年の通りの御布施。
- 【一〇九】 原文、驟債來、債主、用
事を債、即ち借金に譬へたも
の、上は借金を逃げる、用
事がうるさくての意。下は債
金取り、即ち尼等がつまらぬ
用事に來たこと。

んでも宜う御座いませう、で已に希嫩的野雞を備下しておきましたから、さあ請か晩飯を吃去て下さ
 いまし、再に一會子遅になりましたら就老了ますからと。(二〇) 他が一行説と、衆人は一行笑ふ様なこと
 で、鳳姐は也賈母がなんとも説話も等うちに、便く命入て轎子を擡つて過來た。賈母は笑著と鳳姐
 に扶了られて、仍たその竹轎に上、衆人を帶著、説笑著ながら、前の夾道の東門を出て一着られると
 四面粉粧銀砌であつた。忽見寶琴は例の(二二) 鳧髻裘を披著山坡の上に站着、身後には一個の丫
 環が一瓶の紅梅を抱著居るので、衆人、怪道であの兩個人が少了と思つたら、他は梅花を弄去了這
 裡に等著居なすつたのですか。すると賈母は喜的、爾們這の雪坡の上の他
 の這個人品や、又是這件衣裳、それから又是後頭の這の梅花の配著は、什
 麼と像ふ美しい様子だらうか眺て御覽。すると衆人は、就と老太太の屋裡に
 掛的居る仇十洲の畫の艶雪圖みた像ですと笑道た。賈母は頭を搖つて、
 那の畫的に那裡的這件衣裳が書いてあらう、その人物も這樣に好くは能ますまいと一語未了、只見
 寶琴の身後から、又大紅猩猩毡の披了一個人が轉出來。賈母は、那は又是那個女孩兒かと道はれると。
 衆人、姑娘們は都な這裡に在られます、那是寶玉様で御座います。すると賈母は、我的は眼が越發
 花了なと説話居られる間に、跟前に來至たのは、(二三) 可不是寶玉と寶琴とであつたが、寶玉はやがて寶
 釵、黛玉等に、我は纔がた擺翠庵に到了ら、妙玉さんは每人爾們に梅花を一枝づつ送了らと、已經

【二〇】鳳姐の言、全部俗にはあれどをかしく云ふなり。
 【二二】鳧髻裘、此の外衣は老太太の下された物、前回に出づ。
 【二三】いかさま。

人に打發て送去りましたと笑道た。衆人は、(二三) 多謝爾費心と笑説て説話之間に、已て園の門を出
 て、賈母の房中に来て、飯を吃畢、それから大家又一回説笑了居た。忽見薛姨媽が也來了て、説はれ
 る様、好い大雪で御座んすね、此の一日と云ふものは老太太を望候に過來
 ませんものでしたから、今日は老太太は正と雪を賞美なるのに纔是御座い
 ませんか (二四) (到て高興ならずや)。すると賈母は、(二五) 何曾不高興、我は他
 們姊妹們を找了去一會子頑了ませう。薛姨媽、昨兒晚上、我は原と、今兒
 は(二六) 我們姨太太から一日園子を借して、兩桌粗酒か擺しまして、老太太
 を請きして此の雪賞でも致したいと想著ましたが、又老太太が早く安息
 的になりまして、(二七) 女兒が老太太は心下不不爽快と聽得説から、因レ此
 で今日は(二八) 沒敢驚動したが、早く如此を知つて居ましたら、正ど我の方
 から請き該ところで御座いましたのに。賈母、這纔是十月裡頭(二九) 場雪だ
 から、往後又雪が下的日子も多呢から、再其時破費もらひ不遅じやあり
 ませんか。薛姨媽、果然なら、(三〇) 算我的孝心虔やうなもので御座いま
 す。すると鳳姐は笑道、姑媽、今度は忘了仔細、如今先づ五十兩の銀子を
 著、さすれば其雪が下ました時の爲に、我が預備下ますから、姑媽も也心操になることも用ませず、

【二三】爾の費心(心つかひ)を多謝す。
 【二四】原文、到不高興、面白う御座いませう、重複の云ひかた也。
 【二五】何ぞ曾て高興ならざらん。
 【二六】王夫人。
 【二七】寶釵、寶琴たち。
 【二八】敢て老太太をお邪魔せぬ。
 【二九】一場の雪の略、ふつた雪。
 【三〇】我が孝心虔(ころざし)が算しめとめらるる。
 【三一】支那は金銀をはかつて用ひたり。

(三二) 稱來て我に交給收

也忘に得こともありませんから。賈母、既這麼説、(二三) 姨太太は他に五十兩の銀子を給收著、我が、合他每人分二十五兩を出し、下雪的日子に到、我が心裡不快と粧うて、就混過去了、すれば姨太太は更に心を操ふ用もなくなれば、我も鳳姐も實惠を得了やうなわけですから。すると鳳姐は手を一拍て、それは妙極了で、我的主意も一樣さうで御座いますよ。衆人も也都な笑了た。賈母は笑道やう、(二四) 呸、没臉的ね、何とか云へば就ぐ(二五) 順著竿子一爬上來了しまふから困ります、爾は 姨太太は是客で、俗們家で委屈を受けて居られる位だから、我こそ姨太太を請して纔是該だのに、那裡で姨太太に破費かけてよい理が有りませう。(二六) 這樣説ひもしないで、還たどんな臉して先づ五十兩の銀子をお要しなさいまはとは、(二七) 害燥も不、真くいへたもんだね。之を聽いて鳳姐は、我老祖宗は最に眼色ですから、姑媽が若し、我の方の分と合せて鬆、其五十兩のうちを拵出來になるか試一試になつたが、這會子不中用だと估量著になつたので、早く(二八) 臉を翻過來、我(二九) 作法子、這些話を説出來になりましたのでせう、で如今我が姑媽から銀子を要かすと、我竟が姑媽に替つて銀子を出て酒を治了て老太太を請吃了、我が另外に再た五十

【二三】 薛姨媽のと。
 【二四】 他は薛姨媽、我と薛姨媽と一人毎分(ひとりまへ)。
 【二五】 ふうん、鼻の先であひしらひ云ふ。輕蔑の音。
 【二六】 蛇などが、己に都合のよいものに巻きつきあがる様

に。
 【二七】 薛姨媽。
 【二八】 こんな説ふべからざることを云うた上に、上の言をさす。

【二九】 原文、真不害燥、真に害燥(はづかし)からすや。
 【三〇】 原文、翻過臉來、臉(かほ)のむきをかへ。
 【三一】 だしにつかひ。

兩の銀子を(封じて) (二三) わたしは我がこんな閑事を包攬しました罰に老祖宗に孝敬ことにしましたら、(三四) 這可好不好かと、話末に説完と、衆人は已に 炕の上で笑倒れて居るばかりであつた。すると賈母は因又、寶琴が雪下で梅を折つて居る様子は、畫兒上比も還好と説及たり、又他 (二五) 年庚八字や、(竝) 家内の景況など細問るので、薛姨媽は、大約寶玉の與に配を求められることであることは、(二六) 度其意思、薛姨媽の心中では固より也 (二七) 遂意と思つても、只是已に梅家に許過しあり、殊に賈母は尙だ其事を明説れず、自己も也た (二八) 擬定好ず、遂に半吐半露に賈母に告訴る道、可憐に這の子は没福で御座いまして、前年他父親は就沒了ましたが、父親在世の時他は他父親に跟著て四山五嶽都く走遍了、到て多く小兒の時から世面を見的居ます、其上他の父親は是好樂的でしたから、各處にも買賣有るついでに家眷を帶著、(二九) 這一省に一年働き、明年は又那一省に半年も往住と云ふ有様所以、天下十停の中五六停は到了りました様な始末で御座います、那の年 (三〇) 這裡で他を梅幹林に許了と御約束致しましたが、偏第二年目に他父親が世を辭しなくなられ、如今は他母親も又是痰疾をしまして。すると鳳姐は不平等説完

【二三】 原文、算是罰我包攬閑事、我こんなつまらぬことをしました罰と算(して)。

【二四】 それは好(よき)や、よからざるや。

【二五】 炕、例の火坑のことで、なんどろ。賈母鳳姐の談、俗なれど皆戲なり。

【二六】 人の年齢、生れ時などを調べる慣用句。

【二七】 度其意思、老太太の考を推し、さうであると悟り。

【二八】 其通りに。

【二九】 原文、不好擬定、はつきりしたことを云ふも好(よか)らすと。

【三〇】 支那本土は十八省あり、其各省を云ふ。

【三一】 原文、在這裡、此の都で。

に、(四〇) 暖聲不_レ止、偏_レ不_レ巧ですこと、我は正_レと媒を作個ようと要うて居ましたのに、又已經人家に許了になりましたかと説うた。賈母は、(四一) 爾は誰に説_レ媒する積でしたかと笑道る。鳳姐、老祖宗管なさいますな、我心裡はちやんと、(四二) 他們兩個は却は一_レ對だと看准ておきました、如今已に人家に許了になりましたら、説しても也無益で御座いますから、説しあげぬ方が不_レ如御座いませう。然るに賈母も也鳳姐の意を知れ、已に人家に有_レ了したと云ふことを聽見て、也就其事は提はれなかつた。それから大家は又一會閑話了して方て散れてしまつた。一宿は話なく、次日は雪晴で、飯後賈母は又親しく惜春に、冷暖に管はらず、只く晝去様、年下に趕到て十分に能_レぬ時は便罷了、又第一要緊なことは、(四三) 昨日の琴兒と、丫頭が梅花を持つて居た晝は照_レ様に一筆も錯はぬ様に、快快添上おくれと囁まれ。惜春はそれを聽了、是は實に爲難_レことであるが、只得應了した。一時衆人は都な來て他晝を如何の看すると、惜春は只是出神した風して居た。すると李統は衆人に向ひ、他に自己に想去、(四四) させて、邪魔しない様に、僧們は且話兒など説ませうじやありませんか、昨日老太太は燈謎兒を作る叫にこのことでしたから、家に回つて、(四五) 綺兒、紋兒と睡も著で我が就く、(四六) 兩個ほど四書から編了ますと、他の兩個は每人で

【四〇】しきりと嘆息して、
 【四一】鳳姐に云ふ。
 【四二】暗に寶玉と寶琴の二人をさす。
 【四三】原文、昨日琴兒合_ニ丫頭梅花、すぐ前に雪中に紅梅を以て居て奇麗であつたこと出づ。
 【四四】妓處に原文、讓とあり、せしむの意。
 【四五】李綺、李紋。
 【四六】原文、兩個四書、なぞの題を四書の文句で二つ作つた。

也一個づつ編りましたと笑道た。衆人は之を聽いて、這は作該たら、先づ我々に説了て猜猜さして御覽なさいと笑道。李統は、(四七) 觀音未だ有らず世家傳ふる。四書の一句で打てて御覽なさい。すると湘雲は、すぐそれを接著て、就是は、(四八) 至善に止まるに在りでせうと説うた。寶釵、爾也世家傳るの意思を能く想一_レ想て再_レに猜てなほして御覽。李統も道ふ、再猜てと。黛玉、(四九) 哦是了、善と雖も徴なしでせう。衆人は這句は是_レ了と都笑道うた。李統は又、一池の青草ですが、何と名草でせうと道ふと。湘雲又忙く、這は一定蒲蘆也でせう、(五〇) 再_レ不_レ成。李統、爾の猜は這は難爲で、又紋兒のは、水は石の邊に向つて流れ出でて冷なりを、一の古人の名に打てるのです。すると探春は、他を看著笑ひながら、(五一) 山濤のことで可せうと問道た。李統、是で御座んすと道ひ。又(李統は)綺兒的是螢字を一個字に打てるのですと道ふと。衆人半日猜了て居て、這個意思是却_レ深い様で御座います、花草の花の字に可は不_レ知か。李綺、恰是了御座います。すると衆人は、螢と花と何な干係があります。黛玉、それは很妙的出來てます、螢は是草が化生したものでは可せんか。衆人もはじめて其意思がわかつたと見えて、都な妙ものですねと笑了説た。寶釵、這些は好く出來て居ます雖、(五二) 老太太的意には不_レ合_レう御座いますから、

【四七】世家は代代といふが如し觀音は代代がどうあるのだから、後が無いものか、といふ題なり、此謎を四書の詞一句に解く也。
 【四八】原文、在止於至善、大學中の言。
 【四九】おの音、俗音也、語に非ず。
 【五〇】再(さら)に不是(いけな)い(成)は成(あります)まい。
 【五一】晋の山濤。
 【五二】不_レ合とは、老太太の意、即ち考にはあはぬ程、むつかしい。

寧 淺近的物兒を作つて、大家雅俗でも共に賞める不^レ如^レが纔好御座んせう。すると衆人も也淺的俗物を作些^レた方が纔是御座んせうと都道た。湘雲は想了一想^レて居て、道ふやう、我は却真是個俗物な(二)枝の(一)番 點絳唇を編りましたから、爾們猜猜下さいと説著て、『溪壑分離し、紅塵に遊戯す、眞に何の趣あらん、名利猶ほ虚きも、事後終に繼ぎ難し』と念道たが、衆人都な解らず、半日想了^レてから、是は和尚的だらうと猜的も有れば、也是は道士的だらうと猜うたり、也是は偶戲人的と猜的もあつたが、最後に寶玉は、半日と笑つて居たが、都な不是、我が猜著みませう、必定是は耍的猴兒のことでせう。すると湘雲は、這は正是這個了ですと笑道た。衆人は、前頭は却好が、末後の一句は怎麼解しますかと道ふと、湘雲、那個の耍的猴兒は、(二)番を剃了把去てあるではありませんか。衆人は之を聽いて、他に偏つて也是刁鑽古怪な謎兒を編個たものですねと都笑起來居た。李執は也道ふ様には、昨兒姨媽は、琴兒妹妹は多世面を見的、道路も也多走ののですから、爾は謎兒を編るに、爾的詩を用著て(二)番(又好御座んせうから)幾個か編つて我們に猜一猜させたら何不得せうかと説うた。すると寶琴は點頭て含笑が、やがて自去尋思て居た。寶釵は反て先づ一個有^レ了て念道、

(二)毛 鏤檀銀梓一層層、豈良工の堆砌み成せしものに係るか。是れ (二)毛 半

【一五】 わかりやすいもの。
 【一六】 點絳唇、詞の體の一。
 【一七】 原文、不是剃了尾把去、猿芝居の猿に尾ありては邪魔なる故皆剃去しある也。事後終難繼の句はそこを云つたものと湘雲のいふ也。
 【一八】 該、又好、邦文句調にてはなくも差支なし、故に原文を省略したり。
 【一九】 此の詩は松かさを云ふ、鏤檀銀梓、一層層、松かさ

天風雨過ぐと雖も、何ぞ曾て梵鈴の聲を聞得ん。

一物を打る

衆人がそれを猜て居ると、寶玉も也一個有^レ了て念道た、

(二)五 天上人間兩渺茫、琅玕節過ぎて謹んで隄防せよ。鸞音鶴信須

く凝睇すべし、好秋獻を把て上蒼に答へん。

次に黛玉は也一個有^レ了て、是く念道た、即ち

(二)六 驂駢何ぞ紫繩に縛せらるるを勞せん、城を馳せ塹を逐うて猱獐を見

る。主人指示すれば風雷のごとく動く、鰲背の三山獨り名を立つ。

其次に探春は也一個有^レ了て、方て念はうと欲居る時、寶琴が走過來て、我小兒の時から不少地方の古蹟を所^レ走しましたから、我が如今其中十個處の地方的古蹟を揀^レ了まして懐古の詩十首作りました、勿論其詩は粗鄙では御座いますが、往事を追懐し、又暗に俗物十件を隠し詠んで御座いますから、姐姐們請か猜一猜御覽なさいと。衆人は之を聽いて、這は到て巧う御座んせう、はやく書き出來て、大家に看看なさいと都説た。端的は下回に分解せん。

のほりものめきて重なり合つた形容。
 【二五】 雨風に逢うても、五重寶塔の様なれども、而も風雨にも梵鈴の聲もなきは松かさを云ふ。
 【二六】 此の詩は、風箏のこと。風が空高くあがり、音をたてて泣いてゐる。
 【二七】 此の詩は走馬燈(まはりとうろう)驂駢は良馬のことつまり、ただ馬と云ふことを修辭したる也、まはり燈籠の中にある馬など、くるくるまはつて、山川都城など色色出て來て、人がする通りまはり、特に其中の鰲の背中に蓬萊山然たるものなど、仲仲うまく出來て居る。

第五十一回

薛小妹新に懐古の詩を編み、胡庸醫亂に 虎狼薬を用ふ

話説衆人は、寶琴が素習経過した各省内の古蹟を題として、十首の懐古の詩を作了、其内には十の物を隠して詠んであると云ふことを聞得、這は自然新巧ですと皆な説うて、争うて看時、只見寫道是は

赤壁の懐古

赤壁塵埋みて水流れず、徒に名姓を留めて空舟に載す。喧闐一炬悲風

冷に、無限の英魂内に在つて遊ぶ。

交趾の懐古

銅鑄金鏞紀綱を振ひ、聲は海外に傳はつて戎羌に播く。馬援は自ら是れ功勞大に、鐵笛子房を説くを煩はすなし。

鍾山の懐古

名利何ぞ曾て汝の身に伴はん、端なく詔を被りて凡塵を出づ。牽連大抵休絶し難し、怨むること莫かれ他人の嘲笑頻なるを。

淮陰の懐古

壯士須く惡犬に欺かるるを防ぐべし、三齊位定まる棺を蓋ふ時。言を寄す世俗輕鄙するを休めよ、一飯の恩死するも也知る。

廣陵の懐古

蟬噪鴉棲轉眼に過ぐ、隋堤の風景近ろ如何。只だ風流の號を占得せしに縁つて、紛紛たる口舌を惹き出して多し。

桃葉渡の懐古

衰草間花淺池に映じ、桃枝桃葉總て分離す。六朝の梁棟多くは許の如し、小照空しく懸る壁上の題。

青塚の懐古

黒水茫茫咽んで流れず、氷絃撥ひ盡す曲中の愁。漢家の制度誠に操づるに堪へたり、樗櫟は應に萬古の羞を慚づべし。

【一】 虎狼薬は劇薬。

【二】 有名な三國時代、吳の周瑜、曹操を破りし處。

【三】 漢の馬援、交趾を征伐して、銅柱を建て功を表したることを云ふ。詩に云ふ、馬援は銅柱を立て、其名は海外の云狄までも聞えていたした評判を揚げた、何も鐵笛などを云ふにも及ばぬ、これは、喇叭のことを云ふ。

【四】 鍾山招隱館の雷次宗の事なすいふか。

【五】 淮陰の韓信は所謂眞の壯士なれば、惡犬のやうなやつに馬鹿にされても、愧づることはない、やがて三齊の王となつて、世の人を驚かしたが、世俗の毀譽など左程氣にかけぬがよい、一食の恩もよく忘れずに覚えて居る。

【六】 廣陵は隋の煬帝の故事なり。

蟬鳴き鴉棲む林木の間をまたたく間に過ぎゆきつつ、隋堤柳條の風景は今如何なるものや、只だ隋堤十里の柳など風流の名を博してゐるため、世上より色色と云ひたてられてきてやかましいことじや、是は柳絮(やなぎのぼな)を云うたもの也。

【七】 晉の王獻之の愛妾を柳葉

桃枝といふ、王かつて二人の爲に渡頭に詩を吟す、それよりそこを桃葉渡といふ。

【八】 此は漢の王昭君のことを云うたもの。青塚は其塚を云ふ、胡地青塚のある地は、陰暗にして黒水愁へ勝に、馬上琵琶を弾じて其愁を晴らすは如何にも情にたへぬ次第で、漢廷で匈奴のために、遠く嫁しゆく身の上にては、止を得ぬことであるが、樗櫟のやうな無用の大木は、實に愧ぢ入る次第であらう、此の樗櫟は莊子に、繩墨に中らぬ、即ち大工の墨つばにかかり、役にたつ板にならぬと云ふことがある、故に、此の詩は、大工の墨斗のこと。

馬嵬の懷古

寂寞たる脂痕汗光積り、溫柔一旦東洋に付す。只だ風流の跡を遺得に因り、此の日の衣裳尙ほ香あり。

蒲東寺の懷古

小紅賤骨最も身輕し、私に掖し偷に携て強ひて撮成す。夫人に時に吊起せらると雖、已經彼を勾引し同行せん。

梅花觀の懷古

梅邊に在らず柳邊に在り、個の中誰か畫の嬋娟たるを舍かん。團圓憶ふこと莫からんや春香の到るを、一別西方又一年。

と有つたので、衆人之を看了、都なしきりに稱^ほ奇道^め妙^たが。寶釵は先づ、前の八首は都是史鑑^{しけん}上に據^よが有りますが、後の二首は却て考へつきませんから、我門大も懂得にくう御座んすから、又別に兩首お作になつた方が是ごんすまいかと

【九】 馬嵬は唐の楊貴妃の殺された地名。

【一〇】 蒲東寺は西廂記中にある寺の名、そこに崔鶯鶯と張生と、女中の小紅と種種のこゝとを演ずる也。小紅即ち赤燈籠は何かの骨で輕易に作つて色色と細工してつくりたて、時には崔夫人に紅娘がつりさげられた如く、のきばたに吊(つ)りさげられるが、そんな時には、彼即ち張生たちも一處に、つれづれいてさげらるる也、是は赤燈籠に西廂記などの畫のことを云うたもので、其赤燈籠には、西廂記などの畫が描いてあることを云うたものなり。

【二】 梅花觀は還魂記中の寺、そこで杜麗娘と柳夢梅とが首尾して、種種の曲折が起つたものなり。此のうちは畫は梅の様に鮮麗でなく柳の様な只だ風流のものであつても、畫が嬋娟とつくしいことは賞美しよう、此のうちはのまるとい様に團圓としてまると、よく扇いだならば、春風一團の和氣のでてこぬこともあるまい、併し秋になつて一度西方にゆいた様にすてられても明年の夏になると、又た世に出るものである、即ち團扇のことなり。

說道た。黛玉は忙く攔て、這は寶姐姐也忒と膠柱鼓瑟、矯揉造作了、無論這の兩首のこととは史鑑上に於ては考なく、又僧們も曾と這些外傳を看みませんで、底裡を知りませんが、難道も僧們が其の兩本の戲も見過没と云ふことは成ますまい、那の三歳の孩子も也知すること、何況僧們が知ぬとも云へますまい。すると探春、這説は正是了。李執、況且他は原と信個な地方に走到たのださうですから、這の兩件事は考はないにしまして、古往今來、訛りを以て誑を傳へて、好事者が竟に故意に這な古蹟を弄來て人を愚にしましたものでせう、比如ば那年か上京します時節に、單是に關夫子の^(二七) 坡だけでも、到て三四ヶ處見ましたが、關夫子一生的事業は皆是據有的にしても、如何して又一人でそんな許多的故がありませう。是は自然後來の^(二八) 人が、他の生前人と爲を敬愛み、只だ(怕らくは)那の愛敬上から、よい加減に穿鑿出來た也是有的、那の^(二九) 廣輿記上を看ましても、止關夫子の^(三〇) 坡が多くあるばかりではありません、古來から名望有些人の坡は仲仲少からずありまして、考無ぬ古蹟などは更に多御座います、して見ますと如今這の兩首の謎の詩は考は無いことにしまして、凡そ何か書のことを説ひ

【一】 またはなはだと訓す。
【二】 ことちにかはして瑟をならし、ためすぎたしわざなり、あんまり偏屈な御説です。
【三】 蒲東寺は西廂記、梅花觀は牡丹亭還魂記の中に在る、廟のこと、外傳は小説のこと西廂記と還魂記は戲文、即ち淨瑠璃本也。
【四】 寶琴。
【五】 關羽。
【六】 填の俗字。
【七】 一種の地理書。
【八】 芝居に西廂記、還魂記のことを歌ふこと。
【九】 戲を唱ひ、甚しきは

求的籤上などに至も、皆な註批まして、老少男女、俗語口頭など、人人皆な知り皆な説的てゐますこと、況且それなどは、竝て西廂記や、牡丹亭の詞曲や、又怕くわけのわからぬ邪書など看了でから説的のでありますまい、まあ這竟は妨はないで、其の詩は只管留著にしておかうでは御座いせんか。寶釵は説を聴いて己の説は方罷了たので、それから大家は一會其の詩を猜了てみるに皆な不是たが、冬の日の天短ので、覺はず又是(前頭で)吃晚饭之時になつたので、一齊晚饭を吃に前來た

因で有レ人王夫人に、襲人の哥哥の花自芳が進來まして、他の母親が病了で御座いまして、他の女兒に見想御座いますから、(三三)他求ニ恩典、襲人を家に接去走走下さいましと説しますと回うた。王夫人は之を聽了て便ち説はれるやう、人家も母兒の情は一場だから、(三四)豈有レ不許ニ他去的一面就レ鳳姐を叫び來て、(鳳姐に告訴)他に酌量して去辦理やうに命せられた。鳳姐は答應了て、己の房中に回至て、便レ周瑞の家的に命じて原故を襲人に告訴去、又周瑞の家に、更に兩個の小丫頭子を帶了襲人に跟いて去き、其外に四個の年紀有た跟車的に一輛の大車を要せて、僮們は帶著坐、又他に一輛の小車を要て丫頭們を給レ坐る様吩咐た。周瑞の家的は答應了と云うて纔に去かうとした。鳳姐は又、那

【三〇】 兩記の文句が引いて記載してある。
【三一】 經書などの正經書に對する言、善惡の意はない程の意。
【三二】 襲人のこと。
【三三】 御願で御座います。
【三四】 他襲人が家に去(ゆく)を許さぬことが有(でき)ませうか、できませぬ。
【三五】 原文、有年紀、若からぬ

の襲人は是個よく事も省つてゐますから、(三五)僮は他に、(幾件)の顔色の好衣服や、好衣裳を大包的包一包袱でそれを挈著、其包袱も也好的を要、それから手爐も也好物を挈て、臨走時は他に、先づ我の所に來瞧瞧やう、我的話うたと説うてくれと道ひつけた。周瑞の家的は答應て去つた。半日すると、果見兩頭の丫頭と周瑞の家的とに手爐と衣包とを挈著せ、襲人は穿戴了來了のを、鳳姐は看ると、襲人の頭上には到華麗な幾枝の金釵、珠釧をかけ、其身上は桃紅に百花と刻絲して銀鼠の裏のついた襖子、葱緑の盤金彩綉錦裙を穿著、外面から青緞に、灰鼠皮の褂を穿著て居るのを見て。鳳姐は、この三件の衣裳は都是太太が賞的ので、到是好的ですが、但只この褂子は太素了些、又如今ごろ穿著のには也と冷いでせうから、僮は一件大毛的を穿たら該でせう。すると襲人、太太は這の灰鼠的を給了て、還た一件銀鼠的を有ましたが、年下趕再た給と説てでしたが大毛的は還た没レ有得ので御座います。すると鳳姐、我は一件大毛的を有て居るが、(我は)風毛が出的不好のが嫌なので、正と改去ようかと要うて居たのでしたから、也罷、先づ僮に給穿去て、年下に太太が僮に作つて給時節まして等再作し罷、只だ僮が我に還てくれれば一樣當か

三四十の。
【三六】 原文、僮告訴他、叫他幾件顔色好衣服、此の兩の他は共に襲人を指し、襲人に云云……、襲人に云云と、鳳姐から、周瑞の家に云うたものなれども、邦文にはなき文格なれば一、他、他と譯載せず。
【三七】 行李、かばんの代に風呂敷包を用ふる也。
【三八】 銅などで造り、一寸たばこ盆風の提げる様に手のついた、手あぶり、換言すれば携帶火鉢也。
【三九】 ごと、上。
【四〇】 總、ふさ。

ら。之を聴いて衆人、三奶奶は慣會這な話を説になつて、成年家に大手大脚的太太の替には、背地裡で多少東西 賠墊了になつたか知れませんが、眞眞に説ひ出来ぬ程な賠ですのに、三那裡ぞそれを太
太から算去なつた様でもなく、偏に這會子なども又這な小器話を説うて笑兒を取來了のですもの。
すると鳳姐は、太太が那裡で又這些 到想 になりませう、究竟這ことは
又是正經な事でもありませんから、更に照管ないのも、也是大家的體面上
止むを得ぬことで、我自己が吃些虧などは説うて得れず、反て衆人を打扮
體統て、三寧可我は好名兒得個たら也罷としませうが、一個一個は像と捲
子を燒糊了的似的に、人は先づ我を笑話で、我は家を當しまるに、仕様が
わるく到て人を花子弄出來と説はれるからつまらぬものさ。衆人は之を聴
いて都な、誰が奶奶の似に這様に聖明、上の在では太太を 三體貼てあげ、
下の在では、又下人に疼顧下さる方がありませうと一面説と。一面只見鳳
姐は平兒に命じて、昨日の那件の石青刻絲の八團 天馬皮褂子を拏て來
させて襲人に與了、又裏面に兩件の半舊綿襖と皮褂子とを包著だ其包袱は只得一個の彈墨、花綾、水
紅、紬裡の夾包袱のみで見たので、鳳姐は又平兒に那一個の玉色の紬裏の哆囉呢の包袱を拏出來さ
せて、一件の雪褂を包上やう命ずると、平兒は走去て一件は半舊大紅の猩猩毡的と、又一件は大紅半

【三】 原文、奶奶、太太、上は鳳姐、下は王夫人のこと、太太は奶奶より尊敬の言。
【三】 賠贈しやる、太太の下さる代に一時出しやる。
【三】 原文、那裡又和太太算去、なんぞ又た太太より其事を勘定しもらはん。
【四】 むしろ、俗文慣用。
【三五】 體貼、先方の心を汲んで申分のない様にしてやる。
【三六】 天馬皮、不明。

舊の羽紗的を拏了出來た。すると襲人は、一件は當不_レ起ますと道うた。平兒、三爾は這の猩猩毡的を拏になつて、又 三這件は順_レ手に帶出來て、人にそれを刑大姑娘に送去給て下さいまし、昨兒那慶大雪に、人も都な是猩猩毡でなければ就是羽緞、羽紗的を穿著ゐらつしやるので、十來件の大紅の衣裳が大雪に映著て 三好不_二齊整_一に、就只 三他は那件な舊毡斗篷を穿著ゐらつしやるものですから、越發拱_レ肩縮_レ背たやうに顯的て 四〇好く不_レ可_二憐見_一で御座んすから、失禮ながら如今這件を給_レ他て下さい罷と笑道た。鳳姐、我的東西を他は私自に人に給うとしますが、つまり私一個では還た花ひ敷ぬから 四二再_二爾が添上_一、そんなことを提著てくれて更に好了だわ。すると衆人、這は都是奶奶が素日太太を孝敬になさいまして、又下人を疼愛て下さるのですよ、若是し奶奶が素日は小器的で、只だ東西を 四三爲_レ是、下人を顧りなさらぬなら、四四姑娘が那裡して敢か這様を云はれませう。鳳姐、所以で我的の心を知道て居ると云うた所が、也就是 四五他は還た三分位のところ罷了と説著ては、又襲人に囑咐て道ふやう、爾の媽媽が好ければ就罷が、不_レ中_レ用やうなら、只管うちに 四六住下、人を打發來て我に回たら、我が再別に打_二發人_一給_レ爾送 四七鋪蓋_一去

【三七】 羽紗的の方。
【三八】 はなばた齊整(りつげ)ならすや。
【三九】 邢岫烟。
【四〇】 ひどく憐見(かはいさう)ならずや。
【四一】 原文、再添上爾提著更好了、實際は、お前がいらぬ差出口をすると云ふのを、わざと反語したるもの也、なんとまあ、差出がましい人でせうといふ意なり。
【四二】 だいにかけ。
【四三】 平兒は女中なれども、鳳姐の氣に入りなる故、かく云ふなり。
【四四】 平兒は。
【四五】 花自芳即ち襲人の實家に逗留する。
【四六】 夜具。
【四七】 鋪蓋、去

から、他們的鋪蓋や梳頭的傢伙など借りて使はぬが可いでせうよと道うて、又周瑞の家的に吩咐て、
爾們は自然這裡的 規矩を知道て居ませうから、我が囑咐はぬでも心得て居ませうねと道うた。周
瑞の家的は、はい都く知道て居ます(と答應) 我們(這を去て)那裡に到りましたら、總て 他們的
人は迴避させ、若し又襲人が住下する様でしたら、必是另一兩間の房子を要らせませうからと説著
て、襲人に跟了て出て去き、小厮に吩咐て燈籠を預備させ、遂て車に坐り、
花自芳の家を往して來つた、不在に話下。

這裡に鳳姐は又怡紅院の嫖嫖兩個を喚了來て吩咐ける道、あの襲人は只
怕すぐ家に歸つて來ますまいが、爾們も素日から、能く那の 大丫頭們
を知道て居ませうが、那の兩個は能く好夕が知つて居るから、此の寶玉的
屋裡に派出來在 夜上をしてもらひますから、爾們は好生照管著て寶玉

に胡鬧由著ぬ様にしておくれ。すると兩個の嫖嫖は答應著て去了たが、一
時來て晴雯と麝月とが屋裡に派了在ましたから、我們四個人で(原是)輪流著に帶管上夜しませうと

回説た。鳳姐は聽いて點頭ながら、又、晚上たら 他を早く睡むやうに催、早上は又 他を早く
起すやうに催と説道た。老嫖嫖們は答應了、自園の方に回つて去つた。一時果して周瑞の家的は襲人
の母の信を帶了に鳳姐に回て、襲人の母は已挺床から襲人は回來ますまいと説うたので、鳳姐は又

【四七】 郎のしきたり、家法、召使
を手厚く取扱ふと云ふこと。
【四八】 男子。
【四九】 大丫頭、小丫頭も居る故、
大を加へてそれとなく、暗に
次の晴雯と麝月の二人を指し
云ふ。
【五〇】 襲人が居ないから、其代
に夜、留守番をする也。

王夫人に回明了て、一面には人を大觀園に往著て他的の鋪蓋や粧 奩を取つてこさせると。寶玉が
看著晴雯、麝月の二人に妥當打點させ、それを送り去て後、晴雯、麝月は皆な殘粧を卸罷、裙襖を脱
換過て、晴雯は熏籠上に圍坐て居た。麝月、爾は今兒は 小姐て粧ては別ませんよ、我勸爾は動
一動兒よ。晴雯、爾們が都な去つて盡了なすつてから、我は再から動きましても不遲御座んせう、
爾們が一日居らつしやるから、我はおかげで一日受用をしますから。麝月、好姐姐、我は床を鋪ます
から、爾的は我比身量が高些から、どうか那の穿衣鏡的套子を放下來、上
頭的划子を划上て下さいと説著て、便ぐ寶玉の床を鋪に去つてしまつた。
晴雯は、噁了人家が纔と坐つて煖和了居ると、爾は就ぐ來て聞しますと一
聲笑道。此の時寶玉は襲人の母が是死は活知れぬのを想へ、納悶いで坐
著て居たが、今忽ち晴雯が如レ此を説うたのを聽見て、便く自己で起身
出た、鏡の套を放下し、消息を划上てから、進て來て、爾們はよく煖和なさい罷、もう都な完了お
いたからと笑道た。晴雯、終究も煖和つて居ることは成ますまいが、我は又で想へ起來ました、湯婆
子は還だ拏つて來りませぬ呢。麝月、爾がそれを想著て下さつたのは難爲御座んしたが、他は素日其
湯婆子は要になりませぬ、俗們的の那の熏籠上は又煖和でして、那屋裡の炕冷とは比に得ませぬ、
それですから、今兒は用ませぬよ。寶玉、這個話、爾們兩個は都な那 上頭で睡了、我的這 外邊に

【五一】 原文、粧小姐、お嬢様の
やうな風する。
【五二】 私は忠告します。
【五三】 上頭、うち、次の外邊の
反。
【五四】 そとがば。

は人も没個から怪怖的て、一夜也睡れ不著。晴雯、我是は這裡で睡的ますから、麝月は他那外邊に往つて睡去なさいなどと説話之間と、天は已に三更になつたので、麝月は早已簾幔を放下し、燈を餘處に移り、香を炷きつけ、寶玉に伏侍して臥下み、二人は方て睡むに、晴雯は熏籠上に在り、麝月は便た煖閣の外邊に在た。三更已後に至て、寶玉は睡夢之中で、襲人を【五七】兩聲か叫了てみたが、人も答應しないので、自己と目が醒了て、方て襲人は不在家なことを想ひ起、自己で可笑くなつて也好笑起來と、晴雯も己に目を醒まし、麝月を叫喚で、こんなに我は都醒めてゐるのに、他は旁邊に守在て還た何も知道んで、【五八】真是で、挺死屍の様ですと道うた。麝月は身を翻して、哈氣と打個て笑ひながら、【五九】他は襲人さんを叫びで、我とは什麼も相干ないではありませんかと道ひながら、什麼な御用で御座いますかと問うた。寶玉、茶が吃み要が。すると麝月は忙ぐ起來たが、單だ紅紬小綿襖兒を穿著ゐた。寶玉、我的の襖兒を披了再去なさい、仔細ぬと冷著から。麝月は説を聽いて、手を回して便く寶玉が夜起きする時披著一件の貂類滿襟の煖襖を披上、下て盆内て手を洗つて、先づ溫水を一鍾澆ぎ、大嗽盂を挈了て來たので、寶玉は口を嗽了いた。然後纔て茶隔上向茶碗を取了、先づ溫水で【六〇】蕩了一蕩、煖壺中から半碗茶を澆了て寶玉に遞與吃了了それから、自己も也た嗽了一嗽で半碗吃了了。晴

- 【五七】 兩聲、兩は能く幾の代に用ひらる、二三回よぶ。
- 【五八】 死人のやうに、しやちこばる。
- 【五九】 はあはあと笑ふ聲。
- 【六〇】 寶玉は。
- 【六一】 茶碗に水をつぎ、ゆすり洗ふ、水の中に茶碗をつけて洗ふに非ず。

雯は、【六一】好妹妹、也一口兒と我にも賞呢と笑道た。麝月、爾は越發上臉兒のね。晴雯、好妹妹明兒の晚上は爾は別動で、我が爾一夜伏侍如何か。麝月は説を聽いて、只得口を嗽了【六二】伏侍他、半碗の茶を澆了て與他吃了了。麝月、爾們兩個は睡ます話兒て説著まし、我は出去走走て回來ますから。晴雯、外頭には鬼が有個て等三著爾一ます呢。寶玉、外頭には自然大月亮が有らつしやるよ、我は説説著るから、爾は只管去ておくれと一面説一面、便た兩聲嗽了すると、麝月は便く後房門を開了、毡簾を掲起て一看し、果然好い月の色であつた。すると晴雯は、【六三】他が出て去つたら、他を嗽して、頑耍うと、素日から人比りも氣壯で、寒冷らぬのが仗著なので、也別に衣を澤山披るでもなく、只だ小襖を穿著て、便て躡手躡脚と熏籠から下了、麝月の後を隨けて出て來かうとした。寶玉は、罷【六四】呀、凍著て是頑どころではないからと笑、【六五】勸道たが、晴雯は只だ手を擺つて、後を隨て去了、將ど房門を出でんとすると、忽然と一陣の微風が、肌を侵し骨まで透る様に覺えて、禁はず毛骨が森然として、怪道人で、熱身子は風に吹かれては不可と説ふが、この一冷は果然利害と、其心下に自思道一面正て麝月を嗽してやらうと要ゐた。只聽寶玉が内から高聲に、晴雯は出去了のかと説道。晴雯は忙く回身して進て來て、那

- 【六一】 妹又は己より目下の者に云ふ詞。
- 【六二】 はたらくことなく。
- 【六三】 晴雯に、口をすすぐやうにしてやる。
- 【六四】 晴雯と寶玉。
- 【六五】 原文、等他、他、此の二つの他は、麝月をさす。
- 【六六】 からかふ。
- 【六七】 語聲、支那音「ヤア」。
- 【六八】 忠告する。
- 【六九】 原文、擺手、およしなさいと云ふしるし、かまひませんと云ふこと。

的の自鳴鐘が噹噹の兩聲ら、其外間に值宿的老嫗は嗽了兩聲から、姑娘們睡罷、明兒再說的因說道と。寶玉は悄悄的と、僂們何も説話ます別よ、看又他們が説話惹て困りますからと説著、大家一會笑了それから睡了た。次日に至て起來と、晴雯は果して鼻が塞つて聲が重れ、身體が懶於轉動、有些た様子を見て。寶玉は、(四)快、聲張では要ません、太太が知道了になつたら、又爾も養息しに家に搬了去になりませうよ、それは(六)家裡は縦好うが、倒底冷些うから、爾は這裡の裡間屋裡に滄著で在た方が不_レ如、して我が(七)大夫を叫に人請、悄悄と後門から進つて來て瞧瞧もらつたら就了了から。晴雯、如_レ此説が、爾は到底も一聲兒と大奶奶に告訴にならぬといけますまい、然しませんと一時大夫が來了て、人間起來ましたら、怎麼とも説呢ことが出來ますまいから。寶玉は其説が、理であるので、便く一個の老嫗を喚び來て、爾は大奶奶に、晴雯は、ほんの白冷著了些だけで、是怎麼も大病では御座いませんと同_レ去て就説おくれ、丁度襲人が又不_レ在家から、他_レ也養病しに家に去つたら、這裡は更に沒有人になつて困るから、爾一個大夫を傳みして、後門から悄悄と進來て瞧瞧いたただかうじやないか、しかし其事は太太に回うては別罷了と吩咐道。老嫗は去了半日して回つて來て、大奶奶に知道了説たら、兩劑藥を吃んだら好了罷、それですぐ好らぬ時は、還

【八三】 動くにもうく。

【八四】 さあ。

【八五】 原文、不要聲張、晴雯が病氣だなど云うてはいけません。

【八六】 原文、家裡縦好、倒底冷些、晴雯はうちがよからうけれど、貧乏なうちだから、手當やなにか不足で、寒からう。

【八七】 醫者。

是家に出去たら是からう、丁度時氣が不好だから、別人に沾染了やうな事は小なことにしても、二爺の身子は要緊だから注意するやうにと説になりましたと説うた。晴雯は煖閣に睡在で只管と咳嗽をして居たが、這話を聽了氣的て、我は那裡も温病を害たのではありません、其で人に過了怕が生と云ふとなら、我は這裡を離了て、爾們が這一輩子頭疼腦熱など別やうに看ませうと説著ながら、便く真に起來らうと要た。寶玉は忙いで他を按へながら、まあ生氣ちや別、這は原是他的責任であつて、太太が知道になつて説_レ他になつては恐ぬから、白一句となにか説了た不_レ過だのに、爾は素習が生氣のに如今は(八)肝火が自然に又盛了くなつたのだなど正説てゐる時、大夫が來了になりましたと人回たので、寶玉は便く走過來て書架の後面に避けて在た。只見兩三個後門口の老婆子が一個の太醫を帶了して進來ので、這裡的丫頭どもは都な廻避了て居ると、三四個の老嫗は煖閣上の大紅の(九)綉幔を放下した。晴雯は其幔帳の中から單だ手を伸出去のを、那の太醫は先づ這の雙手上の兩根の(十)指甲が、二三寸の長さ足有て、(十一)金鳳花で通紅的に染めた痕跡あるのを見て、便忙く廻過頭來と、一個の老嫗が忙に(十二)一塊の手帕を拏つてそこを掩了た。那の太醫は方て脈を診了り、起身て外間に到きて、其老嫗們に、小姐的病症は是外感内滯で、是は近日時氣が不_レ好から、竟

【八八】 一生。

【八九】 肝は木に屬し能くもゆる故、怒のことにしたり、漢方家には肝は魄を藏する所と云へり。

【九〇】 婦人の室ぐら、縫など施しある也。

【九一】 支那人は長く爪をのばして労働者ならざるを表示す。

【九二】 鳳仙花と、かたばみ草とを合せて染むるなり。

に(此の) 小傷寒で算是が、幸虧に是小姐は素日飲食が有限ので、風寒も不^レ大、不^レ過^レ是の氣血が原と弱いので、偶然此の病に沾染了些で御座いましたのですから、兩劑藥吃^{つて}疎散疎散になりますれば、就^つ好^つ了^つ御座いませうと説^つ著^つて、便^つく又^つ婆子^つに隨^ついて出て去^つつた。丁度彼の時李^二純^一は已に人を遣^つつて後門上の人や、各處の丫環に知^つ曾^つ過^つて、廻^つ避^つさせたので、那の太醫は只だ其園の景致を見^みただけで、竝^つぞ一個の女子も、曾^み見^ず、一時其園の門を出^でて、園の門守をする小厮^二の班房^一内^に在^り坐^り了^つ、(五七)方子を開^き了^つてやると、老嫗^二嫗^一は、老爺且^と別^れ去^り下^りさ^ついまし、我^らの小爺^二が囉^ら唆^らで御座^いますが、恐^は怕^か還^た何^か話^話問^が有^りり^でせ^うから。すると那の太醫は、ええ方^二纒^一の方は是^は小姐^二ではありませ^んでした^か、是^は位^二爺^一不^レ成^つと、那の屋子は竟^は是^は綉^二房^一で、又^又幔^子を放^し下^りて^みて^みましたに、それに又^又如何^しして是^は位^二爺^一さまで御座^いますて。すると老嫗^二嫗^一は悄悄^とで笑^い道^ふやう、我的^二老爺^一、怪^道も小^二子^一が、今^は兒^二新^一な太醫^を一位^二請^了して來^てと纒^説て居^ました^が、爾^は真^に我^ら家^の事^を知^りあ^ります^まい^が、那^の屋^子は我^らの^二小^一哥^兒的^で、那^の病^人は是^は屋^裡の^二丫^一頭^で、到^是個^二大^一姐^で、(五八)那^裡小姐^二では御座^いませ^ん、若^し小姐^の綉^二房^一で、小姐^が病^了了^なら^ば爾^が那^麼あ^{んな}に容^易就^進去^もん^じや^あり^ませ^んと説^著ながら、其^の藥

【九三】寒さにあてられて起つた軽い病氣。
 【九四】大家の婦人は女中に至る迄、男子を見ることを得ず、前より屢々此の如き記事あり注意し見るべし。
 【九五】かつて見す。
 【九六】處方。
 【九七】位は一位の爺の略、わか且那樣と云ふことも成(あり)ますまい、晴雲を診察させて小爺が御用と云うたから、吃驚してかく云ひし也。
 【九八】なんぞ小姐ならんや。
 【九九】支那の家庭には藥方書、

方^を掣^つて進^つつて去^つつた。寶^玉はそれ^を看^る時^に、上^面に紫^蘇、桔^梗、防^風荆^芥等^の藥^が書^いて有^つつて、後^面に又^又枳^實、麻^黃等^が書^いてあ^つたので、寶^玉は、(一〇〇)該^レ死^該死[、]他^は女^孩兒^們を、也^た (一〇一)我^らの像^一樣^に治^療するの^かな、それ^は如何^しして使^得、憑^他は什^麼な^二内^一滯^{があつたにしろ、這の}枳^實や麻^黃が如何^しして禁^得、誰^がこ^{んな}大^夫を請^了來^のです、快^く他^を打^發去^罷、再^た一個^二立^一派^な熟^練した^的を請^んで來^{。すると}老^嫗嫗^{は、藥}の用^{かた}の好^不好^{など}は我^らは知^道ませ^んが、如^今再^た小^厮に王^太醫^を去^請に去^ります^{のは、}それ^は到^て容^易な^{こと}で御座^いますが、只^是這^個の^大夫^{は、}又^又 (一〇二)總^管房^に告^訴て請^的した^のではありませ^んから、這^の馬^錢は給^レ他^はな^りす^まい^と道^うた。寶^玉、他^多少^給る。婆^子、王^太醫^や張^太醫^が每^常も來^了つても也^並 (一〇三)曾^ぞ其^時に銀^錢を給^ました^{とは}ありませ^ん、不^レ過^の每^年の節^に (一〇四)一^毫に禮^{を送}します^{のが、}那^はが^一定^的例^で御座^{います}が、這^個人^は一^次新^來了^つで御座^います^{から、}一^兩の銀^子はあ^げね^ば須^得、あ^んま^り少^了つのは好^看な^う御座^います^{から。寶}玉^は之^を聽^了、便^く麝^月に銀^子を取^りに去^ると。麝^月、(一〇五)花^の大^姐姐^は那^裡に擱^在てお^らつ^つし^やる^か知^じませ^ん。すると寶玉^{は、}我^は常^も他^が那

即ち藥劑書が有つて、多くは自身で藥を買ひ調合して用ふる故、藥名、功能などよく知り居る也。
 【一〇〇】死すべしと訓し見よ、分明する也。
 【一〇一】原文、像我們一樣的治、此の醫者は、ばあやから若旦那と聽いて、男に用ふる藥をもりたる也。
 【一〇二】此の邸の用事を聞いて諸事をまかなふ御用べや。
 【一〇三】原文、沒曾給銀錢、曾て銀錢を給(あげ)たことなし。
 【一〇四】一毫、一度に、一處に、俗字也。
 【一〇五】花大姐姐、襲人のこと、襲人の姓は花にて、大姐姐、おねえさん。

の小さい螺甸の櫃子の裡から錢を挈つて來た様に思ふから、我と僮と找しに去かうと説著て、二人づれで襲人が東西を堆いてゐる房内に至つて其櫃を開くと、上の一隔は、都是て筆墨扇子香餅やら、各色の荷包、汗巾等の類的東西で、下の一隔には却て 幾串かの錢がはひつて有たので、於て是抽屜を開いて纔看見と一個の小篋籬内に幾塊の銀子と、倒也一把の 戲子が有つたので、麝月は便く其一塊の銀子を挈了、又其戲を提起て來て寶玉に、
 那是が (一〇八) 一兩兒的星兒で御座いますかと問うた。寶玉、僮が我に問くのは、それは趣いが、僮到成丁是纔來のこのことだと笑道れて、麝月も也た笑了、又人に問きに去かうと要た。寶玉、那の大的のを揀つて他に一塊給げたら就是了ないか、買賣を作るのではなし、這些ものを弄つて什麼に作るものです。すると麝月はそれを聽いて其戲子を放下て、銀子を一塊揀了て、(一〇九) 拈了一拈ながら、這一塊で只怕是一兩了はあつて、寧可多些好でせうから、那の窮小子に、僮們が戲子を認得ぬことは説はんで、到つて僮們が小氣似的に笑話れる様なことは別叫でせうからと笑道た。那の門口に站つて在た婆子は、那是は五兩的 (一一〇) 錠子でせうから、半個に爽了切りましても、這一塊で至ら少く見ましても還だ二兩は十分ありますから、這會子夾剪すと没て、(一一一) 姑娘這個は收了になり、

【一〇八】幾貫。

【一〇九】秤也、支那にては金銀共に場合に應じてばかり用ひし也。

【一一〇】秤の一兩の目、即ち星がつけある也、現今は線をつけあれども最近迄、只だ星點がつけありし也。

【一一一】手ではかる也。

【一二〇】金銀錢のまとまつた額を指し云ふ。

【一二一】麝月は女中なれども、ばあやども尊稱する也。

再一塊小些的を揀りなさいませ。すると麝月は早く其櫃子を開けて出て來て、誰が又そんなこと找して去られよう、多些なら僮孛子去な罷と笑道た。寶玉は、麝月に、僮は只快く王大夫を請了來たら就是了じやないかと道うた。婆子は其銀子を接つて、自ら去つて (一一三) 料理をつけた。一時茗烟は果して王太醫を請了來た。先づ脈を診てもらひ、後で病症を説くと、前の大夫の診察と相做ては居るが、只是方上には枳實や麻黃等の藥は無く、到に當歸、陳皮、白芍等の藥が書いてあり、分兩も先より也減了些居た。すると寶玉は喜んで道ふやう、
 這纔是は (一二三) 女孩兒們的藥だから、それで疎散にしても、也太過てはいけません、舊年我が病了したのは、却是 (一二四) 傷寒で、内裡に飲食が停滯して困つたが、他が瞧了て、麻黃、石膏、枳實等の虎狼藥には、我でも禁不得と還説た位です、我と僮們と一比てみれば、我は就ど那の (一二五) 野坵圈子裡に長的てる幾十年的なる大楊樹で、僮們は就ち秋天ころ (一二六) 芸兒が我に進れた那の纔開的の白海棠の様なものだらう、我が禁不起的藥を、僮們が如何して禁的起よう。すると麝月等は又笑道やう、野坵裡には只で楊樹ばかりでは成まい、難道で松柏などは沒有のでせうか、我は楊樹は那麼 (一二七) 大體で、樹の葉子は只だ一點子、一絲の風がなくても(他は也是)亂響やうなのは最嫌的なのに、僮は (一二八) 偏に他に比べになるのは也太下流了ますよ。

【一二三】今新しく頼んで來た醫者に、其の銀子をやりかへした。

【一二四】をんなに用ふる藥。

【一二五】寒にあたる、寒冒。

【一二六】攻は填の略字、支那には風水上處嫌はず、墳墓多し。

【一二七】買芸、植木の手入を請け負うたこと前に出づ。

【一二八】大木。

【一二九】そんな樹にかぎつて。

すると寶玉は、松柏には敢比られぬ譯さ、孔夫子さまでも（二九） 歳寒うして然る後に松柏の凋に後るることを知ると都説られた位ですもの、この（三〇） 兩件東西の高雅なのは可（三一） 知となのに、怕燥くもなく他樹を挈て混比るなどはと説著て只見と、老婆子は晴雯の薬を取了來たので、寶玉は命く煎藥的銀の（三二） 吊子を找了出來、其火盆に上げて煎るやうに命じた。晴雯は、正經他們に（三三） 茶房裡で煎去給なさいました、這屋裡で藥氣を弄的は、（三四） 如何使得からと因説た。寶玉、藥の氣は一切的花香、草香よりも都雅で、神仙がたでも薬を採り、薬を焼き、再者又高人逸士は薬を採り、薬を治ることは、これは（三五） 最も妙的な一件東西としてあり、我も正這屋裡には、各色が都な齊了て居るが、就只藥香丈が少いと想へて居た所であつたが、丁度如今却て好全了たと一面説ながら、一面では早く（三六） 煨上やう命じ、又麝月に囁咐けて東西を打點些、老婆嬢に遣去て襲人を看まはせ、（三七） 他に哭少やう勸め、一一も妥當から、方て前邊の賈母、王夫人の處に過て來て安を問飯を吃べて居た。正ど鳳姐が賈母、王夫人たちと商議して説ふには、天が短了、又冷くなつたから、以後は（三八） 大嫂子は姑娘們と園子の裡で吃飯し、だんだん、天和暖に等つ

【二九】原文、歳寒然後知松柏之凋、論語に在り。
 【三〇】松柏は兩木の名、故に兩件と云ふ。
 【三一】鍋。
 【三二】大家なる故、別に茶をわかつ處あり、そのこと。
 【三三】いかんぞ使得（やれ）ませう、やれませぬ。
 【三四】原文、最妙、第一によい。
 【三五】原文、各色都齊、各種の香がみなある。
 【三六】漢藥は調合する前に火にのせあぶる也。
 【三七】原文、勸他少哭、襲人の母病氣して死なんとして居る故になぐさめさせる也。
 【三八】賈珠の未亡人李紈。

てから、再た來回てどこでも跑けまはるも妨ませんから、と説ふのを王夫人は聽かれて、這は也是好主意です、（三九） 剛風、下等から、さうした方が到て便宜でせう、東西を吃べるに、冷氣に受るのは也不好、空気で走けて來て、一肚子を冷氣で、（四〇） 壓上些東西なるなどは也た不好、不（四一） 如園子裡後門の裡頭の五間の大房子に、横堅上夜女人們が居ますから、其他に兩個の厨子女人を那裡に在、他姊妹們に飯だけ弄つて給るやうにさせ、又鮮東西菜蔬など分例的は、總管房裡から支了去、錢が要るとか、東西が要るとか、又那些野雞、獐麇など各様の野味は他們に分些給たら就是了と説ふ所で値た。すると賈母は、我も也正どさう想著うて居たけれども、又厨房が多事些添個かと、怕して居たのだよと道はれた。鳳姐、竝て多事はなりますまい、たとへば一樣的分例は這裡が添せば、那裡が減了と云ふ工合ですから、就便は多是費些事（四二） かも知れませんが、しかし姑娘們的冷風朔氣は、別人は還可としても、第一林妹妹は如何しても禁得住し、就た寶兄弟も也禁不（四三） 住、何況て衆位の姑娘もみな同じことです。賈母はそれを聽かれて、正是這話了、上次か我が這話を説はうと要たけれども、我は爾們が大事太多なのを見てよして居たが、如今、這些事を添出來ては、爾們は固然敢て抱怨もないのであらうが、それにしても爾們（四四） 當家的人を顧みんで、我が只た這些な小孫子、小孩女兒などばかり疼がると想著れるかも免ぬが、爾が既這説てくれますなら更に好了と道はれた。因ど此の

【三九】たべたものをしめつけろ。
 【四〇】家事向のもの、鳳姐、李紈など。

時薛姨媽や李嬪たちは都な其座に在、邢夫人及尤氏婆媳は也都な請安に過來、還だ過去らずに居た所であつたが、賈母は便く王夫人等に向ひ説はれる道、今兒我が纔と這の話を説うて、素日此の事を説はなんだのは、一則鳳丫頭的一層臉逞了かと怕し、二則には衆人が不伏であらうと思つて居たのに、今兒は儂們都な這裡に在るからきくが、都是 妯娌 姑嫂たちを經過があらうが、他

の像に這様に想的到たことが有沒有かな。すると薛姨媽、李嬪、尤氏等は齊な笑ふ道、それは我們には眞個に少有、別人は不過是の禮上面子情兒だけなのに、實在他是は眞に小叔子小姑子に疼くしなざる、それかと云うて就是老太太跟前、也是眞に孝順なさいます。すると賈母は點頭ながら、我は他を疼かりますが、我は又た他が太伶俐了るのは、是好事ないと怕すると嘆息された。鳳姐、這話は老祖宗説差了、世人は太伶俐聰明了と、怕活不長と都説ますが、世人には都な説得、世人都信得りますが、獨り老祖宗には、さうは信じられませんが、老祖宗には、其事は説ふことは當ません、老祖宗は只 我よりも十倍も聰明伶俐で有らつしやるに、それなら怎麼如今でも這様に福壽雙に全的であらつしやるのでせう、只怕我は 明兒から還は老祖宗より一倍も勝つて我は一千二百歳も活後まして、老祖宗が歸了西一になりましてから、我も纔から死にませう呢と笑道た。賈母は笑

【一三】即ち不服。

【一四】兄弟の妻。

【一五】夫の姉妹。

【一六】原文、還有像他這様想的到的沒有 此の鳳姐の様に、小じうとに親切にしてやりましたか。

【一七】原文、明兒還勝老祖宗、御機嫌取の戲言を云ふ也。一倍もまして、伶俐聰明になりての意を略せる也。

つて、衆人が都な死了、單だ儂們兩個が老妖精の似的に活居た所が、什麼も意思は有るまいよと説的たので、衆人は都な笑了た。且く下回の分解を聴け。

第五十二回

俏平兒、情蝦鬚獨掩、勇晴雯、病みながら、雀金裘を補ふ

話說衆人各自に散つて後、寶釵姊妹等は賈母と、同に飯を食べて畢ふと、寶玉は晴雯のことが記掛著ので、便先く園子裡に回つて来て己の房中に到了と、藥の香が満室にぶんぶんとするが、一人も見ず、只見晴雯が獨り炕の上に臥て居て、臉面が焼得て飛紅、摸了一摸と、只だ手を燙覺なので、忙く又爐の上で手を烘煖つて温め、其かけて居る被を伸進去て摸了一摸と、身上も也是發燒して居るので、別人去了也ても罷が、麝月、秋紋などは也却に無情なやつで、各自去つて了つたのかねと説道た。晴雯は、さうじやありません、秋紋は是我が撞了他去て吃飯させましたので御座いますが、麝月さんは、是方纔平兒さんが來えて他を找れて出て去了ながら、兩個人何か鬼鬼祟祟的と、什麼だか説うて居られました、必是我が病了しながら出て去かぬことを説して居られたのでせうと説うた。寶玉、平兒は是那樣人じやない、況且他は竝だ爾の病して居ることは知らず、特に爾を瞧つたのは、想來一定何か麝月を找ねて説話に來たのに、偶然爾が病了して居たのを見て、隨口、特爾的病を瞧に來たと説うたのだらう、這は也是人情乖巧取和的常事で、

- 【一】 精巧な細工をした腕輪。
- 【二】 金絲織の外衣、あとに詳。
- 【三】 大觀園。
- 【四】 支那北地によくあるをんども。
- 【五】 原文、不知説什麼、なにを説しを知らぬが。

出て去かぬが不是にした所が、他とは何も干はないではないか、爾們兩個は素日又仲好ではあるし、斷じて這な無干の事の爲に和氣を傷くするやうなとは不肯。すると晴雯は、這話也是御座んすが、只是疑他は何で又、忽然我を瞧起來様なことをしましたらう。寶玉、まあ等ぢ、我が後門から出て去つて、那の窓根の下に到つて、他們で什麼を説些て居るか聽聽て、回つて來てから爾に告訴すからと説著て、果然後門から出て去つて、窓の下に至つて潛と聽いた。只聞麝月は悄に、爾はまた怎麼して就を得了たかと問道た。平兒、那の日手を洗ふ時不見了のですが、二奶奶が、不許二吵嚷といはれましたから、そのまま園の門を出て、即刻園子の裡の各處の媽媽們に傳給で小心査訪たので御座います、我們は只だあの邢姑娘に跟いてる人が、本來又窮の上、また小孩子家であつて、是迄見過ことがないので、掣了起來ことでは也是有的と只怕て居ましたら、再不料、是爾們這裡的宋媽媽が、這隻の鐺子を掣了去了、小丫頭の墜兒が偷み起來的らしう御座います、他が見ましたから、二奶奶に回しあげに來りましたと説是ましたから、我は趕

- 【六】 平兒(即ち他)を疑ひますことは。
- 【七】 原文、忽然瞧起我、自分を見舞に來たのでないに、特に見舞に來たなど云ひしこと。
- 【八】 原文、那日、四十九回の終に、一時腕輪をぬいでおいたのを、はめんとして失ひしこと出づ。
- 【九】 鳳姐がとめたことも、その處に出づ。
- 【一〇】 さわざたてるを許さず。
- 【一一】 再到料るべからざることは。
- 【一二】 あなたがたのこの、無くも邦文には差支なし。
- 【一三】 原文、被他看見、他は宋媽媽なり、ここは平兒が宋ばやのことを云ふ故、他と云ふ也、日支語格の相違する處也。
- 【一四】 鳳姐。

忙で其鐲子を接了、想了一想ふした。寶玉さまは是偏爾們的身上に留心用意て争勝要強くたさるに、那一年には良兒と云ふ有個が玉を偷んでごたごたし、そんなことが剛と冷了かと思ふと、這の二年間に還た有入か趣愿を提起來と、這會子は又一個な金の鐲子を偷的を跑出來了ました、街坊上で偷到去了て、偏是他這樣なら、偏是他的人に打嘴ませうから、我は到忙く宋媽に千萬て寶玉さまに告訴て下さるな、又這な事は沒有して、一個人にも説はない様、叮嚀もたのんでおきました、又第二件には老太太、太太が聽見になりましたら氣に生りませうし、三則には襲人さんと爾們も不三好看でせうから、所以で我は二奶奶に回ました、我が大奶奶の那裡へ往去的ました時誰知あの鐲子は褪了了口草根の底子に丟在て居ましたのに、雪が深いので看見没かつたのですが、今兒雪が化盡了と、黄澄澄と日頭に映著て、還だ那裡に在るではありませんか、で我は就ぐ揀了起來ので御座いますと、二奶奶也就信了られましたから、所以我が爾們に告訴に來りましたのです、以後は他を防著して、他を使喚て別處に到去別やうになさい、襲人さんが回來てから、爾們で商議著て、何とか法子を變個て打發出去にしましたら就完了。すると麝月は、我は這の小蹄子は也見過的東西が、怎麼で又這麼に眼皮子淺をするのでせうと道うた。平兒、究竟這

【二六】 原文、偷玉、寶玉の縁紐は金と玉と相契ふと云ふ、うはさあり、ここはそんなことを暗示する也、次の偷金鐲子のことを見よ。
 【二七】 玉はあの様になり、下と共に曖昧な云ひかた也。
 【二八】 鳳姐。
 【二九】 王夫人。
 【三〇】 口はなくとも邦文には通ず、すれ落ちて。
 【三一】 隆兒。

の鐲子は能多重く、蝦鬚鐲と叫つて、原是二奶奶的でしたのをいたたいたのです、到是這にはめである顆珠子は還あどうでも罷了す、ところがあの晴雯さんと那蹄子 是塊で爆炭ですから、他にそんなことを告訴でもしませうものなら、他是忍不任的して、一時氣了、隆兒を或打或罵、依舊嚷出來でせうから、所以單に爾だけに告訴ておきます、留心就了了と説著て、作辭而去了つた。寶玉はそれを聽いて、又喜あり又氣た。喜的のは平兒が能く自己を體貼こととで、氣的なのは隆兒が小竊したで、更に隆兒が那樣個に伶俐人して、這様な醜事を作出來したことを嘆息しながら、己の房中に回至て、平兒が云うた話を、一長一短、晴雯に告訴ながら、爾是個は一體要强的で、丁度如今はまた病著してるから、這な話を聽了、越發病的が添くなつたらいけなから、好くなつてから、更に爾に告訴うと他説て居たよと又説た。晴雯は之を聽いて、果然蛾眉倒豎、鳳眼圓睜て氣的、即時隆兒を叫びたてようとした。寶玉は勸めて、爾が這一喊出來は、平兒の待三爾我之心が辜負になるから、他這個情を領んで、過後で他を打發去就完了が不如と道うた。晴雯、雖如此説、只是這の氣は如何も忍得ません。寶玉、這位ことが什麼の氣的、只だじつと保養病して居たら就了了。晴雯は藥を服み、晩間になつて又二和藥ばかり服むと、夜間には汗が有たけれ雖、還だ十分效が見えず、仍是燒が發、頭疼し、鼻が塞り聲が重れてゐた。

【三二】 其製詳ならざれども、蝦のひげ見た様なものを合せた様にして腕輪をつくつたものか。
 【三三】 一塊の略、此の如き物品に附する俗慣用。
 【三四】 晴雯は堪忍しきれず。

次日王太醫が又來診視し、別に（三）湯劑を加減してやられたので、稍燒は減了些が、仍是頭疼がするので、寶玉は便く麝月に命じ（三）平安散を取つて來て他に嗅些せたら、痛く幾個も噴嚏して、便く通快了やうにならうといふので、麝月は果眞（三）金鑲雙扣金星印の玻璃的（一個）扁盒を取つて來て寶玉に遞與たので、寶玉は便く盒蓋を掲開て見ると、裡面に西洋瑛瑯製の（二）黄髮赤身の女子が有て、其兩肋に肉翅がはえ、其裡面に秘製の平安散が盛著些あつた。然るに晴雯は只顧其畫兒に看とれて居た。寶玉、快く嗅ぎ、氣が走了ら、就不好了から。聽説て晴雯は忙く指の甲で挑了些鼻の中に嗅ぎ入れて見ても怎樣なかつたので、便く又多多挑了些嗅入ると、忽ち鼻の中が一股酸辣と覺、腦門に透入て、接連に五六個の噴嚏を打了、眼淚鼻涕が登時に齊流て來たので、晴雯は忙く其盒子を收ひながら、了不得です、好辣（一）しますから、だれか快く紙を拏つて來て下さいと笑道た。早く一個の小丫頭が（二）一搭子ばかりの細紙を遞て過たので、晴雯は便く一張一張拏來て鼻子を醒んで居た。寶玉は、如何だと笑問た。晴雯は、果して通快しました覺で御座いますか、只是太陽の處が還だ疼む様で御座います。すると寶玉は、それじや率性盡り西洋藥で治一治た方が就好了からと説著て、便く麝月に、（三）二姐姐の處に往つて、姐姐は那裡常も那の西洋の頭疼に貼膏子藥

- 【一】 前藥。
- 【二】 雄黃末等を以て製したる嗅ぎ藥にてクシヤミを連發させ邪氣を拂ふといふ、外國舶來なり。
- 【三】 二つの金星印入り、金鑲金をぬつた也。
- 【四】 天の使。
- 【五】 支那にては紙は西洋の如く、大判を切つて使ふ、其切つた一貼ばかり。
- 【六】 李純など。

で、（三）依弗哪とか叫作ものを、一點兒ばかり找尋て、要去さして下さいましたと、我が説了たと就説なさいと命じた。麝月は答應して去つてから半日すると、果して半截拏了て來て、便く一塊の紅緞子の角兒を去找了、兩塊の指頭頂大的圖式に餃了、那の藥を烤和了、簪挺で攤上し、晴雯は自で（三）靴兒鏡を拏著、兩方の太陽上に貼在た。麝月は之を見て、病的してまるで（三）蓬頭鬼見た一様になつて居て、如今又這個を貼了ら、到俏皮了なりました、二奶奶は、明日は舅老爺の生日ですから太太は爾を去ると説うて居られましたさうですが、明兒は何麼衣裳を穿てゆきますか、今兒晚上好く打點齊備して、明兒早起（三）省的費事にしておきませう。すると寶玉は、什麼も順手就是什麼、一年中生日鬧して也鬧ぎ清は（三）ず罷と説著て、便く起身て房を出て、惜春の房中に往去て畫を看んと、剛ど院門まで到了と。忽ち寶琴的小丫頭の小螺と名者が、那邊から過て來たので、寶玉は忙く趕ひ上げて、那に去くと問道た。小螺は、我們的二位の姑娘が都な林の姑娘の房裡に在らつしやいますから、我は如今也那裡に往去所で御座いますと笑道た。寶玉はそれを聽くと早く轉歩て也瀟湘館を往して來つてみると、寶釵姊妹たち但でなく、且た邢岫烟も也那裡に在たので、其四人づれば團坐と熏籠の上に坐在てゐて家常など叙。紫鵑は倒て暖閣裡の臨窓に坐在て、しきりに針黹など作て居たが、他が來たのを一見て、又一個來えましたが、爾的坐處が沒了と都笑道のをうけて。寶玉は、好一副

- 【一】 絆創膏式のもの。
- 【二】 鏡に種類多し、此は手のついた鏡なり。
- 【三】 髪を毛ぼうぼうとして。
- 【四】 事を費すを省的（はぶく）

の 冬閑集艶の圖とでも云ひませうかな、可^レ惜には我が一步遅^レて来たことです、横堅這屋子は各屋子よりは煖か^レで、この椅子上坐著居れば、竝も冷くありませんと。便く黛玉が常も坐る灰鼠の椅搭を搭著、(一張の)椅子の上に坐^レながら、其煖閣の中に、(一の)玉石條盆の裡面に、攢^レ三聚^レ五、(一盆の)單瓣水仙が栽著、宣石を點著つて有るのを因見て、口を極めて好い花だと贊めながら、この屋子は越よ煖^レで、この花の香的は越濃^レい、昨日は未^レ見がと説著と。黛玉は、這是は儂家の大總管頼大嬪子が 薛二姑娘的に兩盆の臘梅と兩盆の水仙を送られたのを、他が我に一盆の水仙を(送^レされ)、蕉丫頭には一盆の臘梅を送^レつたのです、我は原と不^レ要積りでしたが、又他心辜負^レ了から其儘いた^レいてあります、儂が若^レ要なら、(我)儂に轉送如何ませうか。寶玉は、只是這個程では不^レ及が我屋裡には兩盆ばかりあります、琴妹妹が送^レ儂ものを、又人に轉送のは如何ものでせう、這個は斷じて使不得よ。すると黛玉は道^レふやう、我は一日も 藥杯子を(手から)離したことはありませんで、竟是藥養著して居^レまして、那裡で還^レた花香など擱^レ的住來薰ませう、越發身子も弱^レ了、況且這屋裡の 一股と藥の香は、反て這の花の香を攪壞^レませうから、不^レ如儂どこかに擡^レ了去、さすれば這の花も也到^レて清淨な様なものですから、雜味に他を來攪^レては、沒^レから。寶玉、我屋裡にも今兒は病人が有^レきて藥を吃^レんで居ることを、儂は怎麼して知^レ了。黛玉、這話は奇了をおつしやる、我は原是

- 【三五】 冬美人集團圖。
- 【三六】 寶琴。
- 【三七】 漢藥は煎藥ゆゑ藥碗のこと。
- 【三八】 香につくる慣用形容句。

無心的話しましたのです、誰が儂屋裡の事を知ませう、儂は不^レ早來古記に、這會子來て見て自驚自怪的と云ふことがあるのを聽説^レませんでしたか。すると寶玉は、儂們は明兒は一社を下^レて、又題目もそのま^レま水仙、臘梅を咏することにしませうじやありませんか。黛玉は之を聽いて、罷^レでせう罷^レでせう、我は再詩を作ることは不^レ敢ませう、一回作れば一回罰せられて、怪羞^レうも沒得かと説著、兩手で臉を握^レ起來。寶玉は、何苦來又什麼の作に我を奚落^レです、儂がそんなに臉を握^レ起來などしてもらつては、我は 還^レた怕燥^レくなるではありませんかと笑^レ道^レた。すると寶釵、下次に我が一社を邀^レまして、四個の 詩題、四個の詞題を每人四首の詩、四関の 詞頭を作ることにし、一個の詩題は太極の圖を咏^レじ、一先の韻に限り、五言律は、都^レり一先の韻を用盡^レ了、一個も剩^レすことは許^レせんことに致^レしませう。寶琴、這一説、姐姐は是真心社を起^レしな^レさるのではない様です、這是分明に人を難^レらせるのですよ、論^レうて起來うなら、也強扭^レ的出來、不^レ過^レ顛來倒去、漫^レに詩に 易經上の話を弄^レ些生填たりなどして、究竟何の趣味がありませう、我が八歳の時節、我父親と跟^レに西海の沿^レ子上に洋貨を買^レひに到^レりましたとき、誰知十五歲位の 眞眞國的な女孩子は那の臉面は那の西洋の畫兒上にある美人と一様で、黃頭髮を聯^レ垂^レた打^レ著、滿頭には珊瑚や琥珀や猫兒眼や 祖母祿這些の寶石を戴^レ著、身上には金絲織^レ的鎖子

- 【三九】 原文、我還不怕燥、我は恥ぢざらんや。
- 【四〇】 詞題、詞は宋以後に出來た韻文にして字數と平仄とは體によつて種あり。
- 【四一】 四首、関は一きりの意。
- 【四二】 只だ詞と云ふに同じ。
- 【四三】 上の太極は易の語にて、非常に議論あること也。
- 【四四】 想像上の西洋の一國。
- 【四五】 祖母祿は寶石とあれど瑤

甲のやうになつて居る洋錦襖袖を穿著、倭刀を帶著、也是金を鑲め、寶を嵌めた様子などは、實在畫兒上も也他な好看なものは、没でしたが、人かも説つて居ましたことでした、他は中國の詩文書に通じ、五經などが會講、兼ねて能く詩を作り、詞を填ると云ふことでした因、此、我父親が(一個の)通事官に央煩了、一張字を煩、他寫ひましたが、それは是他作的詩を就寫的でしたに、衆人之を見まして都なしきりと稱、奇道、異、すると寶玉は忙、好妹妹、爾擧出來て我瞧瞧て下さいなと笑道た。

寶琴は、我それは南京に收著ておいてゐますから、此時すぐ取つて來ることは那裡ませんよと笑道たので、寶玉は之を聽いて、這な世面を見るとが福得ぬのでせうかと大失所望した様子して居た。黛玉は笑ひながら寶琴を拉へて、爾は我を哄ては、別よ、我はちやんと爾の這の一來を知道ますよ、爾的這些東西は必ずしも家裡に在りますのでなくて、自然都是は帶了來なすつてゐるのです、這會子又帶つて來なかつたと扯謊なさるのでせう、他們は信用なさるか知りませんが、我はどうしても信用できませんと道うた。寶琴は、何とも語はず臉を紅め、頭を下げた様にして微笑して居るばかりであつた。其時寶釵は、偏に這個の、釵兒は這些な白説が慣説で、(爾を)就り伶俐的にしすぎます。すると黛玉は、若帶了來たなら、我に見識見識下さつたら也罷了ありませんかと笑道た。寶釵は、持

瑁眞珠などの如く動物質のものか、小説等に時に稀有の寶として見ゆ、海外のもの。
【四六】原文、填詞、古人の型なふみ、己の想ふ文字を以て詞をつくる。
【四七】通辯。
【四八】一枚字を書く。
【四九】林黛玉のあだな。

つて來た箱子や籠子の一大堆さへ、還た、没、理清、何が那裡頭に在るか知道ません位ですから、等過日に收拾清ひ、找し出來て大家で再に見ましたら就是ではありませんかと笑道て、又寶琴に向ひ、爾が若し記得えて居れば、念念で(我に)聽聽て下されば何不のに。寶琴は、答應記得居ます、是一首は五言律でして、外國的女子としては也難、爲他、御座いますよ。すると寶釵は、爾且別、念なさい、雲兒さんを叫了來て、也(他に)聽聽せてあげようじやありませんかと説著て、便、小螺を叫び來して、爾は我那裡に到去て、我這裡に一個の外國的美人が來了、好詩を作的ましたから、爾這詩瘋子さま請か瞧去て下さいまし、して再た我々の那、詩、詩、詩、也帶れて來て下さいましと就説なさいよと吩咐けられて、小螺は笑著ながら去了半日すると、只聽史湘雲は、那一個外國的美人が來ましたかと笑問、一頭説、果して香菱と共に來了ので、衆人は、未見、形から先聲が聞えますことよと笑道、寶琴等は忙ぎ坐を讓め、遂方纒的話を重ねて一遍叙了た。湘雲は、さあ快く念來聽聽て下さいと笑道た。寶琴は因て昨夜朱樓の夢、今宵水國の吟、島雲大海蒸し、嵐氣叢林に接す。月本今古なく、情緣淺深あり。漢南の春歴歴たり、焉ぞ心に關せざるを得ん。と念道た、衆人は之を聽いて、都な、成程難、爲他、です、ね、竟も我中國人よりも還強やうで御座い

【五〇】ちやんと理清(せいり)せずにある。
【五一】小女中の名。
【五二】香菱のこと、前に出づ。
【五三】一頭は一面と同じ、…しながら、…しつつか、一方では云ひつつ。

すねと一語して未了。只見麝月が走來て、太太のところから人が打發て、二爺は明日早く舅舅の那裡に去つて、太太は身上が不好て、親自で來になることが能ませんからと就説様にと告訴説ましたと説うた。寶玉は是と答應て忙く站起来ながら、寶釵、寶琴に、爾們も去りますかと因問た。寶釵、もう昨兒、禮物單は送了去ましたから、我們は去ませんと道うた。それから大家一回説などして方散るとき、寶玉は、諸姊妹を先に行り、自己は落後から行かうとして居た。黛玉は便又他を叫び住め、襲人さんは到底多早晚來りますかと問道た。寶玉、自然 殞が送了等纔來ませう。然るに黛玉は還た何か話説たいことが有さうでも、又 不三曾出口口に一回出子了神した様にして居て、爾去罷と便説道たが。寶玉も也心裡には許多か話たいことが有る様で、只是(口裡に)什麼と説うて要いか知らず、想了一想て居て、明日再た説ひませうと笑道一面、階磯を下りて低頭ながら正と歩邁て、復又忙く回身て、如今は夜が越發長了なつて來ましたが、爾は一夜に幾遍ばかり咳嗽をしたり、又幾遍ばかり目が醒めたりしますかと問道た。黛玉、昨兒の夜裡は好くて、只だ兩遍咳嗽しました丈ですが、却只て四更一更次まで睡りました、就再は睡れませんでした。すると寶玉は又笑道やう、正是と有句要緊の話を、這會子纔想起來ましたと一面説一面挨三進身て來て、悄悄的道ふやう、我は想しましたに寶姐姐が爾に送げられた 燕窩はと一語未了と、只見趙姨娘が走

【四】本葬をする迄に死骸を寺にあづけおくこと。
【五】曾(とん)と口から云ひ出せず。
【六】支那で非常に重んずる料理。

了進來て黛玉を瞧て、姑娘は這兩天は好しう御座いますかと問うた。黛玉は他是は探春の處から來て門前を過り順路の人情なことは知つて居たが、(黛玉は)忙陪笑しながら坐を讓めなどして、難爲も娘さま想著、怪冷的に親自走來下さつてと説ひながら、又忙く茶を酌させて、一面又 寶玉に眼色すると、寶玉は其意を會り、便く 走了出來た。すると正と吃三晚飯一時で値て、王夫人に見了と、王夫人は又他に早く去くやうに囑附けられたので、寶玉は便く回つて來て晴雯を看して藥を吃ませやり、此の夜寶玉は晴雯が煖閣を擲出來ないやうにさせ、自己は晴雯の外邊に在、又熏籠を煖閣に擡至、麝月は其熏籠の上に在させた。一宿は話なく、次日の天未明時に、晴雯は便く麝月を叫醒ながら、爾該三醒醒よ、只是に 睡不穀か、爾出去て人に茶水給三他預備して叫させて下さい、我は他を叫醒就是了から。すると麝月は忙く衣を披て起きて來て道ふやう、俗們、他を叫起來て好と衣服を穿て、熏籠をあららに擡過去き、再他們に進來て叫はうとしたのですが、病氣が過了たら怕ですから、爾は這屋裡に在ない様にして下さいと老嫗嫗們が已經説過くらすから、如今俗們が一處に擠在るのを他們が看見ましたら、又嘮叨しく云ひだし該よ。すると晴雯も也、我も也是這麼説呢と二人で纔て叫す時、寶玉は已て目を醒了、忙く起來て衣を披た。麝月は先づ小丫頭子們を呼進來て收拾妥了、纔秋紋、檀雲等が進來て、一同寶玉に伏侍、梳洗畢つた。

【七】原文、使三眼色與三寶玉、眼色を使ひ寶玉にしらせる。
【八】王夫人の處に來る也。
【九】目をさまさればいけませぬ。
【十】れむり足らざるか。

麝月は、天が又陰陰的、雪が有りさうに怕まりましたから、一套(六)毡子を穿毛なさいましと道うた。寶玉は點頭ながら、即時衣裳を換了た。小丫頭は便く小な茶盤に一碗の(福)建蓮を入れた紅棗湯を捧了來たのを、寶玉は兩口嗑了た。麝月は又一小碟に法製紫薑を捧過來た。寶玉は又一塊噙了た。それから又一回晴雯に囑咐、便て賈母の處を往て來つた。賈母は猶ほ未起來たが、寶玉が(六)出門のを知道て、便く房の門を開了させ、寶玉を進來せられた。寶玉は見ると賈母は面尙尙裡なつて、還だ起來て居られなかつた。又賈母は寶玉が身子に荔色の哆囉呢の天馬箭袖に、大紅猩猩毡盤彩繡石青粧緞沿邊的排穗褂子を穿著るのを見られて、賈母は雪が下つたのかと問道れた。寶玉は天は陰著居ますが、還だ下雪沒有と道うた。賈母は、鴛鴦に、昨兒の那の(二)件の(一)烏雲豹的整衣を持つて來て、他に給と命けられた。鴛鴦は答應了て走去て、果然一件を取了來たので、寶玉が之を看時、金翠輝煌、碧彩閃爍として寶琴が披てる鳧靨裘とは大分不似て居た。只聽賈母は笑するやう、這は雀金と叫作もので(這是)哦囉斯國で孔雀の毛を拈つて線織つたものです、前兒か那件野鴨子の(三)頭的織つたものは(四)爾小妹に給了ましたから、這件は爾に給ませう罷。之を聽いて寶玉は一個頭を磕了て、便くそれを披在身上。賈母は爾は先づ爾娘に瞧給て再去なさいと笑道れたので、寶玉は答應了て、便く出て來た。只見鴛鴦が(五)地下に站着揉

【六】 毛のかつば。
 【六二】 寶玉が自室を出で。
 【六三】 鴨の頭の毛。
 【六四】 五十回の終頃に出づ。
 【六五】 椅子の上などでなく、只だ床板の上に、那の日は髪をばさみし日也、寶玉を愛し居ると云はれしゆきがかかりよ也。

と眼睜目た、即ち那の日から鴛鴦が發誓決絶之後、(他は)總て寶玉とは說話をかはさなくなつたのであつた。又寶玉は正自も日夜未安におもて居たが、此時他が又己を迴避せんとするのを見て、便く上來て、(六)好姐姐、爾瞧瞧ておくれ、我が穿著る這個の衣裳は好不好ねと笑道たが、鴛鴦はその手を一擗つて、便賈母の房中に進去てしまつた。寶玉は只得王夫人の房中に來到て、王夫人に看つて、然後又(七)園中に回至り、晴雯、麝月等に看過、便て賈母の房中に回至て回説には、太太は之を看了て、可憐了的から我仔細穿てね、糟塌にしては別よと只説れました。賈母は、就う這一件で剩ですから、爾が糟塌にしましたら、也再到沒了、這會子特に、爾の給に這個に作てやらうとしても、也是沒有的事のですからねと説著、又他に、許多酒など吃んではいけません、早く回つて來よと吳吳も囑咐られた。寶玉は答應了幾個是して居た。老嫗嫗們はみな廳上に跟いて至て居たが、只見寶玉的奶兄弟の李貴、王榮、張若錦、趙品華、錢啓、周瑞の六個人は、召使の茗烟、伴鶴、鋤藥、掃紅の四個の小子に、衣包を背著たり、坐褥を抱著たりして、一匹の(八)雕鞍彩轡の白馬を攜著て、早已多時伺候居た所であつた。老嫗嫗が又たしきりにその六個人些に話か吩咐了と、六個人は又忙と答應了幾個是て、便く捧鞭墜了。寶玉は慢慢的其馬に上了、李貴と王榮が嚼環を攜著、錢啓、周瑞の二人は前に在て引導し、張若錦と趙品華は、寶玉の身後に緊貼と兩邊か

【六】 鴛鴦に云ふ、我國文國語になき云ひかた也。
 【六七】 大觀園、普通園、又は園中は大觀園のこと也。
 【六八】 彫刻を施したる鞍、種種の色にて飾りたる轡。

ら寄り添うていつた。寶玉は馬上ながら、周哥、錢哥、偕們角門から走罷、さうすると老爺的書房の門口で下來て、到了省得よいからと笑道た。周瑞は身を側てた様にして、老爺は不_レ在家で、書房は、天天も鎖著て居ますから、爺はそこで下來にならんで可以罷ますと笑道た。寶玉、鎖著居ても又下來的ねば要よ。すると錢啓、李貴等は、爺の説は得是です、そんな托懶をして馬から下來ずに、倘或と頼大爺や林二爺に遇見ましたら好説ませんとですけれども、他に兩句勸なすつていただかねばならず、あらゆる不_レ是ことは、我々が爺に不_レ教_レ禮をさせ説たと都な我_レ們身上に、派在ましなと都笑道た。周瑞、錢啓等は便一直角門を引出て來ながら、正説話居る時、頂頭に果して頼大が進て來るのに見したので、寶玉は忙く馬を攏住、馬から下來と意欲ると、頼大が忙く上つて來て其腿を抱き住めたので、寶玉は便く、鏡上に（在て）站起来ながら、他的手を携つて幾句話と説了て居ると、接著又一个の小厮が掃帚や簸箕など挈つてるもの二三十個人を帶著て進つて來た。寶玉がそこに居るのを見了、都な墻に順いて手を垂げて立ち住ると、獨り那の首だつた小厮は踉兒打て請了個安_レたけれども其名姓を識らぬので、寶玉は只だ微笑して點頭點了ばかりであつたが、寶玉の騎つた馬が過り去した

【六九】 原文、省得到了、到り通ることをはぶく。
 【七〇】 老爺より略しさがつた云ひかた。
 【七一】 原文、説我不教爺禮了、錢啓、李貴等が寶玉に、馬から下さず、親に禮を失はせる様なことをさせた云ひなさい。
 【七二】 なすりつける。
 【七三】 原文、在鏡上站起来、尊貴の人に對して立つは、支那の禮、頼大は父づきの用人頭で老人なる故、寶玉も尊敬する也。

ので、那の人も方其人人を連れて去つた。於是角門の外に出ると、又そこに李貴等六個人的小厮や、竝た幾個の馬夫が、早に十來の匹馬を預備下して専候居たので、今一その角門を出ると、李貴等も都な各馬に上了、前引旁圍的一陣烟去了、不_レ在_レ話下。
 却説這裡に晴雯はしきりと藥を吃了も、仍病が退くならないので、急的に亂大夫を罵る説、只だ人的錢を騙ることが會で、一劑も好藥を人に吃ませないと。すると麝月は他を勸めて、爾は太性急了すぎますわ。俗語にも、病の來るのは墻の倒るる如に急で、病の去るのは絲を抽く如に遅いと説ではありませんか、殊に又是老君的仙丹でもありませんから、那か這樣な靈藥が有る筈がありません、爾は只だ幾天か靜養して居ましたら、自然に就好了ませう、爾が越急越ほど著手ませうよ。晴雯は又、小丫頭子們は那裡に鑽_レ沙去かしらぬが、我的病を嗽つて居ながら、都な大膽にもどこかに走了しまつて、明兒でも我が好了ら、一個一個纔爾們的皮を掲つてやるからさう思うて居な、と罵るので、唬的象兒と云ふ小丫頭子は忙く進て來て、姑娘什麼で作ますかと問うた。晴雯、別人は都な死で絶つて、爾ばかりが剩了のでは成まいにと説著て居た。只見墜兒が也踏了進て來たので。晴雯、爾瞧瞧なさいこの小蹄子は不_レ問_レ他、還たすぐは來ないで、這裡で又月錢を放とか、又菓子を散になるとかすると、爾は頭裡に跑在てさ、爾もつと前些に往、我は是老虎で、爾を吃了と云ふじやなし、と道はれて。墜兒は只得晴雯の方に、前湊た。晴雯は冷

【七四】 晴雯は女中なれども、下女中は尊敬してかく云ふ也。
 【七五】 晴雯の前による。

不防に一把と身を欠めて他的手を抓住へ、枕の邊から一丈青を取り出して、口内に罵ながら、這の爪子は什麼が作る、縫針は拵てず、線は拵へず、それかと云へば、只だ儂嘴吃を會にし、眼皮子は又淺く、手爪子は軽く、打嘴現世的やつだから、截爛てやつた方がよいと道ひながら他の手上を截爛した。墜兒は疼的に亂哭亂喊た。麝月は忙しく墜兒を拉き開け、晴雯を按めて睡下せながら、爾は纔汗を出した所に、又死を作るのですか、爾が好くなつ等、又要打多少打不得、それに這會子又什麼を聞きますのですと笑道れて、晴雯は便く人を命て宋嫫嫫を呼びに進來て説ふ道には、寶二爺が纔我に吩咐了になり、爾等に告訴てくれ、墜兒は很懶もので、寶二爺が當面で使他を御云ひつけになつても、彼は反て撥嘴兒て、己は動かうとはせず、襲人さんが他を使うても、背後では他を罵る位だから、今兒は務必とも他を打發出去、明兒寶二爺が親自太太に回しあげるから就是了とのことで御座いましたと。すると宋嫫嫫は之を聽いて、心下は便の鐺子の事が發れたのだと知つて、如レ此でせうが、花姑娘が回來られてから、知道了、再ら他を打發になつたらどうでせうと笑道たが、晴雯は、寶二爺も今兒千叮嚀、萬囑咐的なたたのです、什麼、花姑娘でも草姑娘でも、我們にもまた自然道理が有つてのことですか

【六】 一種の簪子。
 【七】 墜兒の此の手は、今不意に墜兒の手をつかまへし也。
 【七】 多少(いくら)でも打ちたければ、打得(うて)ぬことはありますまい。
 【七】 己が用を云ひつけられても動かす、反て人をつかひたてる。
 【八〇】 太太に申上げ。
 【八一】 原文、花姑娘、草姑娘、花は襲人の姓、草は惡口の詞、花と云ふに對して草と云ひたり。誰がなんと云うても也。

ら、爾只我的话を依いて、他の家的人に他来領了出去なさいよ。すると麝月は、這は也罷でせうよ、早也是去、晚也是去のなら、今帶了去方が早清静一日でせう。宋嫫嫫は之を聽いて、只得出て去つて他母親を喚了來、他的東西などを打點させると。又來て晴雯等に見うて、姑娘們怎麼了の御座いますか、(二) 爾姪女が不好ませんなら、爾們ちと他を教導下さつても宜さうなものでせうに、攆ひ出し去るのは怎麼もので御座います、到底か我々の臉兒を留著給て下さいましな。すると晴雯は、爾這話は、只寶玉様の來の等に問へ他なさい、我們は無干から。之を聽いて、那の(三) 媳婦は冷笑した様な風で、どうして膽子にも我が直に他に問去などはできませんが、他は那一件事も姑娘們的調停を聽にならぬことはありません、總依了下さつても、姑娘們が依下さらぬ様では、也(四) 未ニ必中用か、比如ば方纔この説話などは、是は背地裡のことで御座いますから、姑娘が他の名字を呼になるのは、姑娘には就使得まいが、それが我們に在ては、就ぐ野人に成るやうな譯で御座いますから。晴雯は説を聽いて、益發急紅了臉て、我が他の名字を叫うて、撒野を我説たから、我を攆ひ出去やう、爾老太太跟前告我去なさいと説道たので。麝月は、(五) 嫂子女は何か話が再説なら、只管此の人と出去に帶了下さい、這個地方で、

【八二】 墜兒のこと、同じ邸に奉公し居る故、叔母、姪女などの親しき間柄の語を用ふ。
 【八三】 媳婦、墜兒の母、嫂とも云うてある。
 【八四】 いまだ必しも、用(やく)に中(あた)ぬかもしれません、だめになるかも知れぬ。
 【八五】 原文、就成野人了、貴人寶玉に對しては、名を云うてさへ失禮の様に考へてますのに仲仲御目にかかつて御話などは仲仲以て出来ません。
 【八六】 墜兒の母のこと。

豈有二爾叫喊講理（七）、爾見誰（八）、我門で講過理（九）かたがありますか、就是（一〇） 頼の奶奶（一一）、林の大娘がたでも、我門には三分擔待、便是此の爺の名字を叫しますことは、小兒の時から直と如今に叫いたもので、それは都是老太太が吩咐過になつたことは、爾們也く知道て居られることではありませんか、それと云ふも、よくきめておかぬと養活になるまい恐怕と、巴不得なら他的の小名兒を各處にも貼著させ、養活を是好しようが爲めに、萬人に勝手にさう叫去せ、水を挑む的や、糞を挑的でも叫得も仕方はないのですのに、何況我門ならどんなものでせうか、昨日も林の大娘が爺と一聲叫了ましたら、老太太は還た（一二） 說他（一三）のこととして御座いました、此是が一件、二則には我門這些人は、常に老太太や太太的に回話去るに、其難道も其前では、爺と稱すわけにまゐりませんから、其名字を回話ば不叫やうなことになるります、那一日と其實玉と云ふことを二百遍も念ふやうなことがある位です、婢子に偏つて又這個を挑しく云ひ來しなざるが、婢子が閑了の時一日こちらに過て、老太太や太太の跟前で、我門が其面兒當著他の（名）を叫ぶのを聴聽でしたら、今我が云ふことの虚でないことが就知道了よ、婢子は原老太太や太太の跟前で體面な差使を當些たことなく、（一四） 成年家只だ（一五）

【七】 原文、頼奶奶、頼大の妻。
 【八】 原文、林大娘、林之孝の妻。
 【九】 說他、寶玉を爺と云はぬ方がよいと、苦情を云はれた。
 【一〇】 原文、稱爺、外面上にせよ支那は禮義のやましい國也、故に老太太、太太の前にては、寶玉を爺とはいへぬ也。
 【一一】 原文、可不叫著名字回話、其名字、即ち寶玉と回話（まを）し叫著（いは）ざるべけんや。
 【一二】 一年中。
 【一三】 最も外になる、只だ郎と外とのしきりの門。
 【一四】 成年家只だ
 【一五】

門（一六） 外頭で混して居る位だから、我門の裡頭的規矩を知りなさんのは怪不得ですが、もう這裡には是婢子が久站しなさつては爲になりませんし、再一會子、我門が説話んでも不用ことですが、ここに什麼をして居るかなど就有人來て問了ましたら、什麼と分證的話を有る、だから且他を帶了て去つて、して爾は林の大娘に回して、（他に來てもらつて）二爺に找うて、家裡上に千的人が、爾也跑來我門也跑來、我門認人問姓と云ふとは還た認不清呢ものですからと叫説なさいと説著て、便く小兒頭に子に擦地的布を挈了來て地を擦きはじめさせた。すると那の媳婦は之を聴了、言ひ對く可も無ず、亦そこに久く立つて居ることならず、賭氣ながら墜兒を帶了て就走かうとした。宋嬢嬢は、怪道も爾這婢子は規矩を知らんから困りますね、爾の女兒は這裡に一場て居て、去を臨時姑娘によく磕個頭でも給おけば、別的に謝禮を沒有でも罷御座んせう、しかし謝禮をなさつても、他門がそんなことを希罕で居られる譯ではありません、不通過磕個頭て、己の心を盡すことを示せばよいに、怎麼で走と説へばそのまま就く走つてしまふのです、ちとひどいではないかと忙道た。墜兒は之を聴了、只得身を翻して進り來て他兩個に磕了兩個頭、それから又秋紋等を探ねてみても、他門が（一七） 睬他ぬので、那の媳婦は（一八） 聲嘆氣ながら、口にくそ敢言ぬが抱恨たらたら去つた。然るに晴雯は方纔又風を閃了のに、氣に著る様なことなどが出來て、また（反て）更に不好なつた覺で、しきりと翻騰て掌燈に至つて剛く安

【一六】 只だ外の一文字に同じ。
 【一七】 原文、不睬他、彼を睬（かま）はぬ。
 【一八】

静了些頃、只見寶玉が回つて来て、門に進ると就と聲、蹠脚居た。麝月は不審がつて、原故と問ぬると。寶玉は、今兒は老太太がひどく喜喜歡歡で、我に一件の褂子を給つたに、誰知不防後襟子の上を一塊焼了しまつて、幸而天晚了だつたから、老太太や太太が知らずに都理論れなかつたと、一面説一面それを脱下來のを、麝月が取つて瞧る時、果然指頂大な焼眼があつたので。這は必定是香爐的火が迸上了ものでせう、(這は)什麼でも値ことですからと説ひ、趕著悄悄と人に拏ち出去させ、能幹の織匠人に織上させたら就了せうと説著で、便く包袱に包了、(一個の)老嫗嫗に交與せて出去、天亮趕に就有れば纔好から、千萬老太太や太太に知らぬ様にしなさい、と説けた。婆子は答應て去了から半日すると。仍舊其褂子を拏ち回つて来て、織補匠人ばかりではございませぬ、能幹な裁縫や繡匠や、竝女工を作的に問了ても、這は什麼と云ふものを認得ぬので、都なそれを敢攪けてくれませんと説うた。

麝月、這は怎麼様の呢、しかし明兒穿にならなければ也罷了。すると寶玉、明兒は是ど正日子で、老太太や太太は還た這個を穿て去く様に説了れましたのに、偏また頭一日に就に燒了しまつて、豈不掃興。晴雯は半日之を聽了居たが、忍不任翻身。さあ拏來我瞧瞧罷、那福氣穿が沒なら、就罷了、這會子はほんとに又著急しまひますわ。寶玉、這話は到說的是と説著で、便く取つて

【九六】 初日に。
 【九七】 豈に興を掃はざらんや。
 【九八】 じつとして居られず、身を翻(かへ)してやつて来て。
 【九九】 那福氣(しあはせ)に穿(き)ること出来ぬ、きること出来んで、つまりませぬね。那は語呂上の助字、その、あの。

晴雯に遞與た。又燈を移過來細くそれを瞧了一瞧。晴雯、這は孔雀の羽に金線を入れて織りましたので、如今僭們が孔雀の羽毛と金線とで界線である像似的に界密了みませうが、湿的過去ませうか只怕かしら。すると麝月、孔雀線は現成的ませうが、但し這屋裡では偏の除了に還だ誰か界線會かと笑道た。晴雯、説不不得、我拏命にやつて見ませう。すると寶玉は、這如何使得、纔と好了些て、如何のそんな活を作的ませうと忙道た。晴雯、偏はさう蝸蝸螻螻不用、我自と知道がありますと、一面説一面坐起來、頭髮を挽了一挽、衣裳を披上了と、只だ頭重く身軽くやうに覺え、滿眼が金星亂迸で、實實しても撐不任住ので、修覆を作まいかと待要うたが、それでは寶玉が著急だらうと恐し、少不不得恨命と牙を咬み握著で、便く麝月に帮著して線を紉るやうに命み、晴雯は先づ其一根を拏つて比一比て見て、這は很り像でないやうですが、若補上ても、也很顯りますまいと笑道と。寶玉、這就で很好、那裡で又た

【一〇〇】 金線。
 【一〇一】 火が出る。
 【一〇二】 露西亞。
 【一〇三】 竹を以て框(わく)の様に造り、それにて、きれ地を引き張り仕事を仕やすくする。箴子。

囉斯國の裁縫を找去ものじやないしと。それから晴雯は先づ裡子打開にし、茶鍾口大小の竹弓を背面に釘牢在て再た其破口の四邊を金刀で刮的て鬆鬆の散にし、然後針で兩條の線を紉つて、界線之法の如に經緯の線を分り出けて、先づ地子を界出、然後その本衣之紋の依りに、來回織補て、兩針をうまく織補ひ、さうしては又能く看看、兩針を織補うては又端詳端詳するに、頭暈して眼が黒み、氣

喘神虚して奈がないので三針五針補するか不_レ上_レか、便_レ枕_上て歌_一會_だ。寶玉は旁_に在_て、滾水は吃不_レ吃_レかなど問いて世話し、一時又、歌_一歌_一で再_た補_ふやうに命_じ、又_一二_件の_一己_の灰鼠皮_の斗篷_を拏_{つて}來_て他_に披_在二_背上_一一時して又_他に拐_枕を拏_個て來_てそれ_に靠_著せて命_た。晴雯は急_的て、二_四小_祖宗_はどうか只_管睡_み下_{さい}まし罷、こんな_に半_夜までも 熬_上るな_さつては、明_兒眼睛_が摺_揉ましたら、怎_麼處_ますとしきりと央_告道_だ。寶玉は他_が著_急の_を見_て、只_得胡_亂睡_下んでみた_が、仍_瞞み著_けず_に一時と只_聽自_鳴鐘_が四_下に敲_るころ、剛_剛補_完へて、又_小牙_刷て、慢_的と 二_{〇六}毳_毛を剔_去來_ながら、麝_月は、這_で就_很好_た、能_く心_を留_てみないと、再_に看_不出_來やうだと道_うた。寶玉は忙_くそれ_を要_て瞧_瞞な_がら、眞_眞に一_樣了_だなと笑_説た。晴雯は幾_陣も嗽_了しながら、好_容易_と補_了て、補_は補_てみまし_たが、到_底 像_ません_が、我_には再_能き_ません_と一_聲説_了かと思_ふと、即_く又_噉啣_と一_聲て、便_身は 二_{〇八}不_由自_主倒_れ下_了た。且_く下_回に分_解す_を聽_け。

【一〇四】若旦那、おぼあ様には老祖宗と云ふ。
 【一〇五】原文、熬上半夜、夜通しする。
 【一〇六】他と平均せぬ、たくれ毛。
 【一〇七】原文、不像、原品と似ぬ。
 【一〇八】自主(おもふやう)に由(なら)ず。

第五十三回

寧國府除夕に宗祠を祭り、榮國府元宵に夜宴を開く

話寶玉は晴雯が雀金裘を補完の_に、已_に力_盡き神_が危_へるやうに使_得たの_を見_て、忙_ぎ小_丫頭_に 二_一他_を搥_替やうに命_來、それ_{から}彼_此歌_下むと、一_頓飯_時没_、天_已大_亮了_たが、且_門より出_ず 只_快ぎ大_夫を傳_に叫_つた。一時王_太醫_が來_診了_脈て、疑_惑しながら、昨_兒は已_にだ_いぶ好_了些_居たの_に、今_日は如_何し_て反_て 二_三虚_浮 微_縮起_來ましたのでせう、敢_是吃_多了_飲食_か、然_でな_ければ神_思を勞_了たのでせうが、外_感は却_到清_了が、這_は汗_が出_て後_調養_が失_かつたので、非_二同_小可_一ましと一_面説_一面_出て去_て、藥_方を開_了進_て來_のを寶_玉は看_る時_、已_に疎_散驅_邪の藥_は減_去て、倒_て茯_苓、地_黃、當_歸等_益神_養血_之劑_を添_了てあつたので、寶_玉は一_面忙_ぐそれ_を命_人煎_じ去_なが_ら、這_怎麼_處で、倘_し或_は 二_四好_歹が有_個ば、都_見な_我の罪_孽だ_と一_面嘆_説た。晴雯は睡_在枕_上ながら、 二_五好_大爺 _倆は倆_のな_さる幹_が御_{あり}去_じや_あり_ません_か、 二_六那_裡も就_に癆_病を_得る譯_はあ_りま_{せん}。そ_こで寶_玉も

【一】原文、替他搥著、他晴雯のために、たたいてやる。
 【二】虚とは血虚と云うて瀉脈の證なり、瀉とは細くして遅く沈む脈、浮とは、道三翁の脈の歌に、浮の脈は水に浮べる木の如し、おせばかくれてうすくなるなりとあり。
 【三】同微脈の歌に、有かとしておせばたまた弱くして無きが如くにほそくかすかぞ。縮は瀉に似たり。
 【四】晴雯が病氣で死ぬる様なこと。
 【五】國文になき使用法也、よき若旦那。
 【六】原文、那裡就得癆病、何

無奈只得去了、下半年に至つて、身上が好くないと説うて、就く回つて來た。然るに晴雯の此症は雖重が、幸虧に他は素習是個力使はしても、ひどく心を使はないのと、再一つ者素習の飲食が清淡したもので饑飽など無傷で、養生をしたものであつた。這は上下を論せず、賈宅中の秘法であつたが、只若し又略でも傷風咳嗽などする様なことがある時は、總て主に静臥して養生させ、次則服藥させることにしてあつた。故晴雯は前日一病した時に、兩三日静臥し、又謹慎して服藥調治を加へて居た。一體如今ちと勞碌了些たものであつたが、その様に幾日も倍養を加へたため、此の頃は漸漸的好くなつた。

近日は園中の姊妹たちも、皆な各其房中で吃飯し、炊爨飲食も亦便利になつたので、寶玉も自ら能く變法かやらと要湯要羹て其身を調停したことなどは必しも細説せぬ。

やがて襲人は母の殯を送て業已に回つて來て、麝月から、平兒が説うた宋媽や隆兒の一事や、竝た晴雯が隆兒を擡逐出去、也曾寶玉に回過た等語を一一告訴了一遍も、襲人は別説は云はなかつたが、只だ、太性急了些ありませんかと説うた。

只李執は時氣して感冒にかかり、邢夫人はまた正ど火眼を害はれて、迎春、岫烟たちは皆な過去て朝夕侍藥し、李嬌嬌の弟は、李嬌、李紋、李綺などと接に幾日も己の家に去任て留守だし、寶玉は又襲人が常死んだ母のことばかり思うて含悲、それから晴雯は猶未だ大愈らぬので、詩社の日でも人も詩を作興る所ではなく、便で幾社も空了かつた。

當下は已是に臘月で臘年日近、王夫人と鳳姐は種種と年事を治辦いて忙しく、丁度王子騰は九省都檢點の官に陞了し、賈雨村は大司馬、協理軍機の役に補授して朝政に參贊るやうになつたことなど今はふいて題はず。

且説く賈珍は年末であるので宗祠を開了、人を看てその打掃し、供器を收拾し、又神主を請したり、上房を打掃して眞影像を懸け供遺する備にした。此の時、榮寧二府の内上下の人人は、皆な忙忙碌碌、この日寧府中の尤氏は、朝正起來賈蓉の妻と共に、賈母の這邊的針や線などの禮物を打點て送くと、正ど丫頭が一茶盤に押歳の銀子を捧了進て來て回説、典兒が(奶奶に) 回しあげてくれと申しました、前兒の那の一包の碎金子が共是で一百五十三兩六錢七分、裡頭成色は不等で御座いますが共總傾了

もこんなに、私の様に、つまり心配して、御病氣なさる必要はありません。
【七】 大觀園内の賈邸の諸媛、寶釵、黛玉等。
【八】 原文、在房中吃飯、寒中だから一一家の食堂に食事に行かず、各自分の室で飲食することに賈母の許を受けしこと前に出づ。
【九】 湯、羹は俱に吸物、馳走のこと。諸姊妹たちが、料理をして呉れるので、其馳走になる。

【一〇】 年末より年始にかけ、支那の年中行事の一節を示す也。
【一一】 宗祠中に祭りある像。
【一二】 眞影像。
【一三】 賈珍の妻。
【一四】 年末に、孫子供にやる御歳暮。
【一五】 原文、回説典兒回奶奶、今典兒と云ふ女中が、下云ふ金子を持て來て、奶奶即ち鳳姐に回(まを)しあげて、回説(いひ)ました、と上の丫頭が云ひし也。
【一六】 下の銀子の金質成分、十八金、十四金と云ふが如きこと。

で二百二十個の 鏝子で御座います、と説著て遞了上去了。尤氏等が看了一看と、只見は 梅花式的ものも有れば、海棠式的もあり、筆錠如意的、八寶聯春の各種の恰好をして居た。それを尤氏は 人に其銀子鏝を收起這個、又快快でうちに交進来やう命すると、丫環は答應て拏て去了た。一時 賈珍は吃飯に進つて来たので、賈蓉の妻は早くそこを廻避了た。すると賈珍は妻の尤氏に、俗們的の春季の恩賞は領了ましたか不會かと問た。尤氏、今兒答兒を關に打發去了。賈珍、俗們家で、この幾兩の銀子が不平等使わけではないが、多少にしても是皇恩によるのだから、早く關了来て、那邊太太に看過に給け、祖宗に供辦て、上は皇恩を領き、下は祖宗的の福を托りませうよ、今俗們では一萬の銀子を祖宗に供るのはなんでもないが、到底這個の體面の上には 又是恩賜の福を沾くるには如かぬです。俗們這樣な一兩家の外は、那些世襲窮官兒のうちでは、這個な銀子でも仗著れば、什麼こととして上供をし年を過せようか、真正に皇恩浩蕩に想的の程實に周到次第さ。尤氏、正是に這話で御座いますと、二人正に説著て居ると。只見、哥兒が来りになりましたと人回きたので、賈珍は便く他を叫び進来た。只見賈蓉は一個の小黄布の口袋を捧著来た。賈珍は、怎麼して這んなに一日がかりしたのかと問た。賈蓉は陪笑しながら回説、今兒は 禮部で關とれませず、又 光祿寺

- 【一七】 貨幣にならぬ、小粒金。
- 【一八】 梅花式的、海棠式的、筆錠如意的、八寶聯春の、小粒銀が以上の恰好に鑄造しある也。
- 【一九】 命人、叫他、此の人と他とは同一人を二つに書きわけたる也。
- 【二〇】 宮内省に似たり。
- 【二一】 外務接待掛。

的官上に分在とのことで御座いましたから、因又光祿寺に到了まして、纔と領了下來ました、ところが光祿寺の官兒們は、都な多日見にかかりませんで、御機嫌はどうかと(都な著實に)想念て居まして、問二父親好こと説しました。すると賈珍は、他們が那裡でさう我のことを想うてくれるのだらう、這又は又年下に到了たので、我的から何か東西でも是想でなければ、就是我的から戲酒でもと想てるのだらうと一面説一面那の黄布口袋の上に、(就是)皇恩永く錫ふと云ふ四字印と、那邊に又禮部祠祭司的印記がすわり、それから又一行の小字では寧國公賈演、榮國公賈法に、恩賜したまひし永遠春祭賞、共に二分の賞賜、(三)淨折銀若干兩、某年月日龍禁尉候補侍衛賈當堂で領收致し訖、(四)值年 寺丞某人と道であつて、其下面に一個の 硃筆の花押があるのを 賈蓉は、賈珍は、飯を吃過、盪嗽して、やがて鞞や帽を換へ、賈蓉に其銀子を捧著て跟了て過來、賈母、王夫人の所に回過、それから又這邊の賈赦邢夫人の方に回過て、方て家に回つて去、其銀子を取り出し、入れてあつた布袋は宗祠の火爐の内焚了しまひ、それから又賈蓉に、爾は順便の時に去つて 爾璉二孀子に、正月裏請客的日子は、擬了ましたか沒有、問いて御覽、若し擬了たら、書房裡に明白と單子に開了来て、能く記憶ておいて、(俗們で)再た請する時、他と重犯らないやうにしたいものだ、舊年は不保留神して、幾家も一處に重了あうたので、人家は俗

- 【三】 純銀。
- 【四】 其時の掛り官。
- 【五】 寺は光祿寺の略、丞は屬官。
- 【六】 朱書きの。
- 【七】 鳳姐は賈璉の妻、賈璉は兄弟順、第二なる故、璉二と云ふ。

們が不_レ留心して居たことは説はんで、到て我等 兩宅で費事がかかるから商議定_レ了虚情を送た像一般だと云うたから。すると賈蓉は忙_レく答應て過去たが、一時請_レ人吃_二年酒_一的日期單子を挈_レ了て來了ので、賈珍は之を看了、それを頼昇に交與して去つて其人を請_レすることなどを看し、決して這の上頭の日子を他と重複せぬ様に、其廳上に在て小厮們を看_レして圍屏を擡き出し、又几案や金銀の供器を擦_レ拭させて居た。只見小厮が 稟帖や竝た一篇の賬目を手裡挈_レ著個やつて來て同説、黒山村の烏庄頭が來_レました。すると賈珍は、這個老砍頭が今兒纔來となと説_レ著れて、賈蓉は其稟貼と賬目とを接過來、忙_レく展開て捧_レ著のを、賈珍は背_レ著手をしながら、賈蓉が手内て居る 紅帖上寫_レ著ある文句を看ると、

門下の庄頭 烏進孝、爺、奶奶の萬福金安、併た公子、小姐の金安を叩請 申候、新春大喜大福、榮喜平安、加官進祿萬事如意。

とあつたので、賈珍は、庄家の人は意思を有些と笑_レ道た。賈蓉も也忙_レ笑ながら、其文法は別看、只だ其吉利話づくしの所を取_レ個ておやりなさい罷と説一面、忙_レく其單子を展開て看_レる時、只見上面に、大鹿三十隻、麋子五十隻、麂子五十隻、暹猪二十隻、陽羊二十個、龍猪二十個、野猪

- 【一七】 寧國邸、榮國邸。
- 【一八】 一種の報告書。
- 【一九】 品名目錄。
- 【二〇】 喪の外は、支那にては白紙を用ひず、紅か物によつて黃紙に書く。
- 【二一】 烏進孝といふ名に洒落ある也、ちやんと物をもつてこぬが烏進孝也。
- 【二二】 文盲人の賀文、むやみと目出度い文句をならべたもの併し一體に年始には、此の如きことを、きまり文句的に云ふ也。
- 【二三】 大鹿、只だ鹿と云ふに同じ、大は我國の「御」字の意あり、必しも大小の意を有せず。
- 【二四】 麋子、麂子、此の二つ

二十個、家臘猪二十個、野羊二十個、青羊二十個、家湯羊二十個、風乾羊二十個、鱈魚二十尾、各色雜魚二百尾、活きた雞、鴨、鶩各二百隻、風た雞、鴨、鶩各二百隻、野雞、兎子各二百對づつ、熊の掌二十對、鹿の筋二十筋、海參五十筋、鹿の舌五十條、牛の舌五十條、蝗乾二十筋、榛、杏、桃、松の仁、各二口袋、大對蝦五十對、乾蝦二百筋、上等選用の銀霜炭一千筋、同じく中等的の二千筋、玉田胭脂米二石、柴炭三萬筋、碧糯五十斛、白糯五十斛、粉粒五十斛、雜穀各五十斛、下用常米一千石各色、乾菓一車、外に賣糧食、牲口各項の代銀、共折銀二千五百兩、右外門下の庄頭、哥兒、姐兒に頑意の活きた鹿四隻、活た黒兔四對、白兔四對、活きた錦雞兩對、洋鴨兩對を孝敬 仕_レ候 以上とあつた。そこで賈珍は便_レく他を帶進來せると、一時只見烏進孝は院内に磕頭して請安をした。賈珍は人に命じて他を拉_レき起させ、備は還た硬朗で結構だなど道_レうた。進孝は、爺的福に托_レりまして、還_レだかく走的動_レますと回道た。賈珍、備の兒子も也大了つたらうから、ちと他走走たら也罷了。すると烏進孝は、不_レ瞞_レ爺説、小的們は走慣_レ了居ますから、來_レません様では也悶_レ的慌_レで御座いまして、他們は天子様の脚下的世面を來見見のは都願意可_レ不是ませうが、他們到底年が輕_レう御

- の子は名詞狀助字にて、扇子の子、様子の子が扇、様と同じ様な意、俗文としてば子なれば語調上都合惡し。
- 【二五】 羊を熱湯中に入れて殺し其毛をそり落したも。
- 【二六】 臘月即ち十二月に乾し作つた猪肉。
- 【二七】 上等赤米。
- 【二八】 普通雜用炭。
- 【二九】 馬。
- 【三〇】 内門下は邸内に居る者、邸外に居る者故、外と云ふなり。
- 【三一】 且那樣に瞞(あざむ)かぬところを説(まを)します。

座いますから、路上閃失が有りましては、怕致しますが、更に幾年か過ましたら、放心が就可了。
 賈珍、備は幾日走了たかい。烏進孝、爺に同的話、今年は雪が大う御座いまして、外頭は都是も四五尺の深さの雪がふりました、前日から忽然に一暖二化しましたので、路上は竟て很々走的難くなりまして、幾日が耽擱了、一ヶ月零兩天かかりましたが、日子限が有ては、爺が心焦と怕まして、可レ不起著來了二で御座います。賈珍、我説呢、怎麼又今兒纔來のだ、我は纔那の單子上を看了、今年備這老貨は、又來 打二播臺に來了のかな。すると烏進孝は兩歩前進了回ふ道、爺に同し説ますが、今年の來成は實在も好ませんでして、三月頃から雨が下起め接連連八月に直到ましても、竟ぞ五日と一連て晴過ましたことは沒見、九月に裡ましてから一場碗大な電子が、方ど一千三百里地の近に打了まして、人から屋子、並牲口や糧食までも、上千上萬と云ふ程打傷了所以の纔で這樣な次第で御座います、小的竝て(敢て)説は説しませぬ。賈珍は之を聽いて眉を皺めながら、我は(備は)至少とも五千兩位の銀子は也有來るだらうと算了て居たに、這丈では什麼することも發作ぬわけだ、備も知てる通り、如今では備們一共で只だ八九個 庄子丈に剩了て居るに、今年は到兩個から 早潦だと報了て來たのに、備が又打二播臺するし、眞真是に年が過なくなるがどうしてくれる。すると烏進孝が道ふには、爺的私の這の地方は、還だ好算で御座います、我の兄弟は我那裡

- 【四二】 またしても。
- 【四三】 打播臺はぶわり引の願。
- 【四四】 村。
- 【四五】 ひでりと大水、饑饉。

から只だ 八百多里のところで御座いますが、誰知ませう竟は又大差了で御座います、他は現に那府裡の八ヶ處の地を管著致しまして、爺這邊より幾倍も多著御座いますが、今年も也只這些東西から來ましたのは、不レ過の二三千銀子多で、也是饑荒打で御座いませう。賈珍、正是呢、我這邊は都可已で、什麼も別項大事はなく、不レ過一年の費用だけのことだから、上り高が多ければ、我が受用些、少ければ、我が受些委屈から、就と省些し、再者毎年の例として人に送り人を請することなどは、我がちと臉の皮を厚些たら、するぶん省些可以から、也就完了わけさ、比不レ得て 那府裡では這の幾年と云ふもの、許多花錢的事添了で、一定不レ可免も、是は要花的だ、却又て銀子や産業は不レ添ばかりであるに、這の二年と云ふものは倒て許多と賠了から、備們の方から要はぬと誰に找に去かう。すると烏進孝が笑道、那の府裡は如今添了事で、有去有來が劇しいので、嬢娘と萬歲爺とで豈不レ賞ませう。賈珍は之を聽いて笑ひながら賈蓉等に向ひ、備們他這話聽たらうが、可レ笑不レ可レ笑。すると賈蓉等は笑道やう、備們山拗海沿子上的人では、那裡這の邊の道理は知道るまい、嬢娘が難道して萬歲爺の庫から我們に給了やうなことが成ませう、他心裡が總く這う云ふ心が有りなれば、他也 作主になされぬでも、それは 豈有に不賞之理が、即

- 【四六】 支那の一里は我國の六丁也。
- 【四七】 榮國府を指す。
- 【四八】 ぜいたくするの意。
- 【四九】 榮國府。
- 【五〇】 金銀の去(で)ること、來(は)ひること、がけしい、入費多端。
- 【五一】 元春のこと。
- 【五二】 勝手にする。
- 【五三】 豈に賞(くた)されぬこと

【四】 按時到節に、不過の彩緞、古董頑意兒を賞些が、總賞で一百兩の金子程のもので、それが纒ひ一千兩銀子程に値ても、一年的什麼の穀にならう、この二年來と云ふもの、那の一年は多と幾千兩の銀子が賸出來ただけなのに、頭一年に省親で、花園子を蓋りたてるなど、爾もよく算算て御覽、那の注多少共花了位は就く知道だらう、再兩年に再一回親を省たら、只怕就淨窮了する位のことだと笑道た。賈珍、所以が他們庄家人の老實な所で、分明と物の裡頭的事を知らず、黃柏木で磬の槌子を作つた様なもので、外頭は體面でも裡頭は苦だ。すると賈蓉は賈珍に向ひ、果眞に那府裡は窮了て居られることは、前兒か我は鳳姑娘と鴛鴦とが悄悄の商議して、老太太的東西を偷み出さ、銀子を當らうとして居るのを聴きましたと笑道た。賈珍、那是は爾鳳姑娘の鬼さ、就窮したと云うても、まだ那裡如此に到るまいよ、他は必定去路が多、實在に恨だ賸得、那の一項的錢を省いたら要かが知らぬので、先づ這個法子を設出來、人に如レ此に窮到ゐると知道はせようとしたのだ、併し我心裡は却つて算盤ふに、どうも還だ如此な田地までは至かぬ様に思ふと説著て、便く人に烏進孝を帶了出去、好生他を待なすやう命せられた。

- 【四】 有らん、下さいますとも。
- 【五】 元宵の時とか、五月の節とかには。
- 【五】 初年。
- 【五】 元春のさとかへりは十八回に出づ。
- 【五】 賭博に錢をばるのを注と云ふ、思ひ切つて、はりこむことになる。
- 【五】 磬、樂器の名、元は石にて作りしが、後には銅にて造りしものあり、槌にてうちならすもの。黃柏子はにがきもの故、苦の字に、くるしきとにがきと兩意あるにかけたの洒落なり。
- 【五】 當銀子、當は物を抵當に銀をかること。
- 【六】 去路、出費。

不在話下

【六】 這裡に賈珍は吩咐、方纔の各物のうちから供祖的に留出と各様の物を取了些、賈蓉に命じて榮國府裡に送り過去、然後自己は家中に入用的留て下き其餘者等第を派出來、一分一分と月臺の底下に堆在せ、人に命じ族中の子姪を喚び來せて他們にそれを散けて與た。接著榮國府から、許多供祖之物(にするもの)及、賈珍の物とを送つて來た。そこで賈珍は看著て供器を收拾と完備へ、鞋を靴著、猗猗大裘を披著、人に命じて廳の柱下の石礎上の太陽中に大狼皮の褥子を舖了個、そこに坐下けて各子姪們が各其年物を來領のを見て居た。其時賈芹が亦物を領に來たのを見て、賈珍は他を呼び過て來て、爾は何處に也來了、誰が爾に來いと叫びましたと説道た。賈芹はじつと手を垂れて、大爺が這裡で我們に東西を叫領になると聽見ましたから、我は人去叫に等ませんでしたけれども就來りましたので御座いますと回説た。賈珍、我這の東西は、是原それ那些やうな閑著無事、無進益の、小叔叔小兄弟們に給もものだ、那の二年程爾が閑著居た時、我は爾的に給過ことがあるが、爾は如今は那府裡に管事で、家廟裡の和尚や道士們を管り、又毎月爾的の分例の外に、這些の和尚や道士の分例銀子は、都な爾の手裡から過つて居るさうだのに、爾は今還

- 【六】 原文、留出供祖的、御供物に留出(せん)と、將各様(いろいろの物)をと俗文的重複の變な書きかた也。
- 【六】 縁(えん)
- 【六】 日が照らす。
- 【六】 原文、垂手、恭敬の貌。
- 【六】 無收入。
- 【六】 原文、小叔叔、小兄弟們、子弟。
- 【六】 榮國府。
- 【六】 原文、從爾手裡過、賈芹

た這個をもらひに來了のは、太と也食了る、爾自己瞧瞧て御覽、爾が穿的は、手内使錢事を辨うてゐた時とは像個にはならんでないか、先前には、無進益の様なことを説うて居たが、如今は又怎麼したのです、先とは到で不像了やうではないか。賈芹、で御座いますが、我家裡は原人口が多く、又費用がたますもので御座いますから。すると賈珍は冷笑しながら、爾は還だ支吾我云ふのか、爾が家廟裡で幹的事を、我が知道らぬと打諒て居るかしらんが、爾は到了那裡、自然是爺で、人敢も没違了獨爾、爾手裏又錢が有きて、我門から離著又遠いので、爾は爲王稱霸、夜夜匪類を招集て賭錢したり、又老婆や小子まで養てるさうだが、這會子そんな這個形像を、花的ながら、還でも爾はこんな東西を敢領に來るが、それは東西を領不成から、一頓と、馱水棍でも領て去つたら纔罷、年が過した等、我が爾連二叔に説うて、爾を換回て來。すると賈芹は臉を紅して敢とも答言ずに居た。忽見北府の、水王爺さまから、字聯荷包を送了來ましたと人回て來たので、賈珍は忙賈蓉に出去て款待して、我が不在家で御座いますからと説うておきなさいと命すると、賈蓉は答應去了。這裡賈珍は例の東西などの看著領完て、便己が房に回り尤氏と飯を吃畢した。一宿は話なく、次日に至

の手から渡される、芹が棒先を切る事が自然わかる也。
 【六九】原文、可像個手内使錢辦事、自分の手から錢を出して物を買ふ、他より収入なく自腹で物を買ふ時とは像個(に)る(可(へ)け)んや、今は他より収入があるから立派な風をして居る。
 【七〇】金錢を使ふ。
 【七一】水くみ棒、天秤棒也、こらしめてやらうよ。
 【七二】北邸。
 【七三】水親王様。
 【七四】字聯は門門に掛くる聯、年末新にする也。

と、更に往の日よりも忙しきことなどは都不必説。

それより臘月廿九日に到了各色もみな齊備たので、兩府中とも都なけ換了、又新に、桃符板を油りかへたので、煥然と様子が一新した。寧國府は大門、儀門、大廳、煖閣、内廳、それから内三門の内儀門、塞門から、直に正堂まで一路と正門を大開き、階下の兩邊には、(五)硃紅の燭が大高く照し、兩邊に金龍の様に點的た。其次日は賈母由め封詰を有する者は、品級に按ひ朝服を穿、八人大轎に坐、衆人を帶領、宮に進つて朝賀を申し、禮を行ひ飲宴が畢で回つて來て、便寧國府の煖閣の前で轎から下りる時に、諸子弟で、まだ隨て入朝せぬ者は、皆なこの寧府の門前に排班で伺候し、然後みんな宗祠に引入した。

門神、對聯、掛牌をか

【七五】榮國、寧國の兩邸。
 【七六】門の兩方に置きたる矢大、臣見た様なもの、神荼鬱壘。
 【七七】元は魔除のため、桃の木でつくつてかけてあるもの。
 【七八】儀式などの時のみ開くる門。
 【七九】一種の、俗文體、無くも意味に差支なし。
 【八〇】貴婦人の爵位ある者。
 【八一】賈邸、榮寧兩邸とも云ふ。
 【八二】普通中門兩脇門とあるが五しきりになつて居る也。
 【八三】孔繼宗、孔子の末なり、此衍聖公の書の額などあるは誇り也。

且說薛寶琴は是ど初次て、賈府の宗祠に進つたので、細細神を留めて打諒と、原來寧府の西邊に、另一個の院宇が有つて、黒油漆の柵の欄内に、五間の大門の上面には、衍聖公、孔繼宗書すと旁書した「賈氏宗祠」の四大字を寫著た一匾が懸著て、其兩邊には、亦是衍聖公の所書で「肝腦地に塗る、兆姓保育の恩に頼る、功名天を貫、百代蒸嘗の盛なるを仰ぐ」と寫道た一副の長聯が有て、院中に進入ると、

白石を敷いた甬路、其兩邊には皆是すらりと蒼松や翠柏が植ゑられて、月臺上には青緑の古銅の鼎彝等器が設著あり、抱厦の前上面には、先皇の御筆で、「星輝輔弼」と寫道た、(一の)九龍が蟠いて居る金字の匾が懸り、其兩邊の一副の對聯は亦是御筆で

勳業有光日月を照し、功名無間兒孫に及ぶ

と寫道是、其五間の正殿の前には俱是矢張御筆で、(一の) 鬧龍 填

青の匾に、「慎終追遠」と云ふ四字を寫道て、旁邊の一副の對聯には、

已後兒孫福德を承け、今に至るまで黎庶榮寧を念ふ

と寫道、裡邊の香爐は輝煌き、錦帳綉幙の内に 神主が列著てあつたが、

却て真切看らなかつた。只見賈府諸人は 昭穆に分れて排班に立定たが、

賈敬が祭を主どり、賈赦がそれに陪祭、賈珍が爵を獻り、賈璉、賈琮は

帛を獻り、寶玉は香を、賈葛、賈菱は 拜毯を展、焚池を守し、それか

ら青衣が樂を奏し、三たび爵を獻り、それから興つて拜が畢むと、樂も

止み、みな退出し、衆人は賈母に圍隨著正堂上 影前に至ると、錦の幔が高く掛り、彩屏が張

護、前に香爐が輝煌そなへられ、上面の正居中に、寧國、榮國公二祖の遺像が掛けあるに、皆是

蟒袍を披、玉帶を腰めて居られるが、其兩邊には還た幾軸の列祖の遺像が掛つて有つた。賈荇、賈芷

【八四】 幾匹の龍が珠とり争ふ。

【八五】 青地。

【八六】 位牌様のもの。

【八七】 廟の次第順序を云ふ、左に在るが昭で、右に在るが穆と云ふ。

【八八】 跪き禮する時、膝の下に敷くものを出してやる。

【八九】 榮寧國府祖先の畫像。

【九〇】 龍のついた袍。

等は内儀門の方から挨次と立ち、正堂廊下の檻外の賈敬、賈赦直到つづき、檻内は各女眷で、衆家人、小厮は皆儀門の外に在、(九一) 菜が至る毎に、儀門の所に傳つて至き、そこで賈荇、賈芷等が之を接とり、次序に按ひ階下の賈敬の手中に傳つて至くと、賈蓉は

獨は女眷と隨に檻内に在、賈敬が 菜を捧つて至と、賈蓉が傳至つて他の

妻子に傳與し、賈蓉の妻子は又鳳姐、尤氏諸人に傳與、それから直に

供桌前に傳與き、方て王夫人に傳至と、王夫人は賈母に傳與られる、

すると賈母は方てそれを桌上に捧放られる、丁度邢夫人が供桌の西に、

東向に立て居て、賈母と同じに放へし、直茶飯 湯點、酒茶を傳完して、

賈蓉は方て退出して階を下、復た階位の首に歸入つた。當時 文旁の名が

従た者は、賈赦が首と爲り、下は則ち 玉偏に従ふ者で、賈珍が首とな

り、再到 草頭に従ふ者は賈蓉が首と爲て居、左は昭、右は穆、男は東、

女は西と 各位置を取り、賈母が香を拵いて下拜せらるるを俟つて、衆人

も方て一齊に跪下き、其五間の正堂、三間の抱厦、内外の廊簷、階上階下

兩丹墀内に、花團錦簇のと、隙の空地もなく、鴉雀無聞ゐた。只聽と鏗鏘叮噹と金鈴玉佩、微微搖

曳之聲、竝た跪靴履颯沓之響が起、一時禮が畢み、賈敬、賈赦等は便忙退出して、榮府に至つて、

【九一】 一種、一つ、俗文體、な

【九二】 長は嫡の意、嫡家、嫡孫。

【九三】 子は助字、只だ妻の一字に同じ。

【九四】 湯は吸物、點は點心。

【九五】 文の偏、即ち(賈)敬(賈)赦など。

【九六】 原文、從玉、玉偏、珍、璉など。

【九七】 即ち草かむり、蓉など。

【九八】 鐘などの音の、かすかに永くひくこと。

專等賈母に禮を行はうとした。其時尤氏の上房内には、早已に襲地紅毡を鋪き満め、當地に象鼻
 三足鯁沿流金球瑯の大火盆を放著、正面の炕の上には新しき紅毡を鋪け、外別に黒狐の皮的袱子を上
 面に搭在た、大紅の彩繡した雲龍捧壽的靠背や引枕を設著、大白狐の皮の
 坐褥に賈母に請上去坐了、其兩邊に又皮褥を鋪き、賈母と一輩的兩三個の
 (一〇〇) 妯娌に坐了もらひ、又這邊の横頭插牌の後の小炕の上にも皮褥を鋪
 了て邢夫人等に坐了もらひ、地下の四面相對な (一〇一) 十二張の雕漆の椅上、
 都是(一色)灰鼠椅搭小褥をかけ、一張の椅子の下には一個の大銅の脚爐を
 つけて、寶琴等妹妹に坐了てもらひ、それから尤氏は茶盤で親自に茶を賈
 母に捧與、賈蓉の妻は又衆老祖母に捧與、然後尤氏は又邢夫人等に捧與、
 蓉の妻は衆姊妹に捧與、鳳姐や李執等は只だ地下で伺候働き、茶が吃畢
 と、邢夫人等は忙く先起來て賈母に伏侍すると、賈母は茶を吃了で老妯娌
 と兩三句閑話などして居られたが、便て轎を看する様命せられると鳳姐
 は忙ぎ上去て (一〇二) 攙起來とした。尤氏は、已經に老太太の晚飯を預備下し
 て御座います、毎年も私共の體面を (一〇三) 賞些不肯から、今度は私共の晚飯を用了過去ましな、果然
 も我々は (一〇四) 鳳丫頭及にはして下さいまし。すると鳳姐は賈母を攙著しながら、老祖宗快走させよう、

【九七】一寸鼎めいた三つ足つき
 七寶燒、鯁沿、ふちがまるく
 なつて居ること、流金とは七
 寶燒には金を使ひ鍍金しあ
 り。

【一〇〇】兄弟の妻。

【一〇一】十二面、十二個の。

【一〇二】貴婦人は必ず人の手又は
 肩によりかかり扶けらるる者
 としまり居る也。

【一〇三】尤氏の請待を受けて馳走
 の席に臨み、尤氏の體面、か
 ほをたてやる。

【一〇四】原文、不及鳳丫頭不成、
 鳳姐にも及ばぬ様になさるこ
 とは成(あります)まい。

別理他で、僭們は家に去りまして吃去ませうと笑道た。賈母は、僭這裡は祖宗の供著するので什麼
 似的忙しいのに、那裡で我の鬪まで擱的住、況且毎年我は吃にならんで、今年ばかりでないのだか
 ら、僭們が也送つて去的のなら、不_レ如還た送つて去れ、我が吃べ了ぬ時は、留著おいて明兒再た吃べ
 たら、(一〇五) 豈不_二多吃些_一と説的ので、衆人咲了た。それから又他に、好生妥當人を派つて夜裡火の看を
 させて、(一〇六) 是大意得いけませんと吩咐れた。すると尤氏は答應了て、一直
 に送出來て煖閣の前に至て轎に上了しようと、尤氏等はそこの屏風の後面
 に閃過た頃、小厮們は纔と轎夫を領れて上來て轎に請せて大門の方に出く
 ので、尤氏は亦邢夫人等に隨いて榮府に回至た。這裡から其轎は大門を出
 た。只見這の一條の街上の東邊には合面と寧國府の儀仗の執事や樂器が設
 立、西邊には榮國府的儀仗の執事や樂器が設立、そこを來往する人は皆な屏
 退不_二從_レ此過_一、一時榮府に來至と、也是大門正門は到底と直開てあつたが、
 如今は煖閣の前で轎を下さず、大廳の前を過了、轉灣て西に向ひ、賈母の這邊廳の上に至ると轎から
 下られ、衆人は圍隨して賈母の正室の中まで來至みると、亦是錦綉繡屏、煥然一新で、當地の
 火盆には一縷の松柏香や百合草を焚著てあつた。賈母はずつと歸つて坐了られると、老嫗們は老太
 太門に回來禮を行た。賈母も忙く又(一〇七) 起身ると、只見兩個の老妯娌が已進來了ので、大家は其手

【一〇五】あに多く吃べざらんや、
 澤山たべられる。

【一〇六】原文、不是大意得、要心
 せればなりません、能く注意
 して。

【一〇七】たつて答禮せらるる。
 婦人を扶けて、つれる也、禮
 也、只だ御挨拶のみに非ず。

を拉著て笑了一回、讓了一回、茶を吃去後、賈母は其人を送つて内儀門の前まで至つて便く回來て正坐に歸了て居られると、賈敬、賈赦等が諸子姪を領て御機嫌伺に進て來た。賈母は、去年一年家は備們、難爲であつた、何も鹿爪らしく禮を行はんでもよいではないかと、一面説著たが、やがて一面男一起、女の一起と俱に禮を行過了、その左右兩旁に交椅を設下、然後又長幼に按つて、挨拶を行ひ畢ると、又た押歳の錢や荷包金鏢を散りになり、合歡宴を擺上來に、男は東、女は西の席に歸坐と、やがて屠蘇酒、二〇合歡湯、吉祥菓、如意糕などが畢と、賈母は起身て内間に進り更衣れるので、衆人は方て各散出した。

- 【一九】上の人より下の人に、御苦勞であつたと禮を云ふこと。
- 【二〇】新年の馳走故、目出度い名をつけたり。
- 【二一】紙で馬の形をつくり焼く。
- 【二二】賈元春、帝妃。

那の晩は各處の佛堂や、竈王の前に香を焚げ上供をし、又王夫人の正旁の院内に、天地の紙馬香供し、大歡園の正門の上には、也大明角燈を、高照く兩溜挑著、其他各處に皆な路燈を有、上下の人等、皆な花團錦簇と打扮的、一夜ぢうう人聲嘈雜、笑語喧闐、爆竹は起火て、絡繹も絶えなかつた。

次日の五鼓に至ると、賈母等は品に按つて大粧され、全副の執事を擺れて宮に朝賀に進になり、又兼て元春の千秋を祝うて飲宴が畢と、回來に寧府に至つて、列祖を祭過になり、方家に回つて禮

を受けることが畢と、便て衣裳を換へて歇息れ、所々有賀節の親友にも一榮會はれず、只だ薛姨媽と李嬌の二人だけと説話など、取便、或者寶玉、寶琴、寶釵、黛玉などと圍棋を趕、骨牌作戲など抹て居られた。

王夫人と鳳姐とは天天忙著年酒に人を請び、那邊の廳上も院内も皆な戲酒出、親友の來的が絡繹も絶えず、忙七八日も一連て纔と完了かと思ふと、早く又元宵が近づいて來たので、寧國、榮國の二一府でも皆な張燈結彩た。そこで、十一日には賈赦が賈母を請

- 【二三】便(かつて)のことをする自由にうちつけはなす。
- 【二四】正月十一日。
- 【二五】一座のちんこ芝居、子供役者なり。
- 【二六】原文、賈敬不茹酒、仙術を修業する故、酒や肉を食せぬ。

し、次日には賈珍が又賈母を請したので、皆などちらにも去つて隨便に半日を領了た。王夫人と鳳姐は連日不能勝記に人から請去れて酒に吃つて居たが、十五日の夕になると、賈母は大花廳上で幾席酒を命擺、一班の小戲を定け、滿各色の佳燈を掛け連ね、榮、寧二府の各子姪孫男媳等を帶領て家宴をされたが、賈敬は素から酒を茹まぬことは分つて居るので、也請に去かず、後日十七日に其先祖祀が已完と、他は便く仍城を出て仙術修養の爲に去了しまはれる筈なので、この幾日家内に在られても、亦是靜室に默處して、一概で無聽無聞で居られた。不在話下、

且説賈赦は賈母の賜を略領了て、也便く告辭して去つた。賈母は他が此に在ては、彼此に不便な

ことを知られて、己も也他の去了に隨せられた。賈赦は家中に到つてから、衆門客と燈を賞し酒を吃み、自然笙歌聒耳、錦繡盈眸、其取便快樂んで、另這邊とは不同て大騒して居た。這邊には賈母は花廳の上に、共に十來の席を擺了、毎(一)席の旁邊に一几を設き、几の上に爐や瓶など三事の品を設いて御賜の百合宮香を焚著、又其長さ八寸來、寛四寸、高さ二三寸ばかりで、それに宣石を點著ひ、青苔が佈滿はえた小盆景が有り、俱是も新鮮の花弁がついて居、又小洋漆の茶盤内に(二七)舊密の茶杯や十錦小茶杯を放著、其裡面に上等の香茗を泡著、一色皆是紫檀の透雕に大紅透綉の花弁や、竝た草字で詞詩を書いた(二八)瓔珞が嵌著であつた。原來這の瓔珞を繡した的は也是個慧娘と名喚姑蘇的女子で、他は(亦是)書香官門の家すぢで、(他は)原と書畫に精しかつたもので、不(過)の偶然一兩件の針線を繡要を作た丈で、竝して世賣之物にしたものでなく、凡そ這屏上に繡した花弁などは皆な唐宋元代各家の折枝花弁に倣的たものなので、其格式配色など皆從つて雅であつて、本來、一味濃艶きのみを専らとする匠工の比ぶ可でなく、其一枝の花の側には、皆古人が此花に題した舊句の、或は詩でも歌不(一)、黒絨で草字を繡出來、且の字跡の(二九)勾

【二七】古鏡。
【二八】瓔珞は、ここにては寺などにある華蔓のやうなものなり、作者の字の使ひ様宜しからぬ也、瓔珞華蔓幢幡などつづくよりかかる用ひ様をしたるならん。瓔珞はもと觀音像に見ゆる首飾又寺の具の天蓋といふものにつきて下りれるものなどはなり、但しこれにては此處に似合はず紫檀透彫の下に屏の字ありとも見るべし、細長き標札のやうなすかしぼりのものの中に花卉や詩句を刺繡したるが嵌著されあるにて、要するに一種の意匠ある飾り也。

【二九】勾踢は書法のまがるところや、はれるところ等なり、輕は筆づがひ輕きところ、重は力の入りたるところ。
【三〇】此(そ)の技(わざ)を以て利を獲ぬ。
【三一】慧繡、是の如く多きは其富貴をあらはせる也。
【三二】一種の。文魔二字貶意ある也。
【三三】原文、便說這繡字、下の只說一繡字と重複する故、譯文は省く。
【三四】唐突、斯程に立派な縫仕事に、只だ繡と云ふ丈では不敬だからと。
【三五】扇はひら也、開き門の戸を門扇といふ、十六枚の紫檀透彫の細長き標札様のものに其中に各扇慧紋のある非常の精麗立派なもの也。

踢、轉折、輕重、連斷が、筆寫とちつとも異はず、亦で市繡の字跡が倔強に可恨様なところはなく、他は此を(三〇)伎獲利の、所以で天下の人が知つて居ても、手に得れることが甚少、凡そ世宦富貴の家でも、此物がない方が多い位で、當今(三一)慧繡と稱爲てもてはやされたが、竟に世俗利を射る者が有き、近日は其針跡を倣て、愚人が利を獲る様になつた。ところが偏く這の慧娘は命天し、十八歳で便死了、如今では再一件的は得られぬやうになり、それを所有てる家でも、一兩件不(過)而已で、皆寶玩ものの若一般に惜にして居た。更に那(三二)一千の翰林文魔先生們が、深く慧繡の佳いのを惜みて、這樣な針跡を(三三)只だ一繡字と説ふだけでは、其妙を盡すことが能きず、反つて(三四)唐突了の似だからと、便で大家で商議了して、繡字ことを隱去て、(三五)二個の紋字に換了た所以、如今では都な其繡を慧紋と稱爲にした。で若し今(一)一件(二)眞の慧紋之物があれば、其價は無限なもので、此の賈府で榮も、只に兩三件が有るだけで、上年其内の兩件を已に上に進了してしまひ、目下は只だ這の一副の瓔珞の共に十六(三六)扇あるのが剩つて居り、賈母が如(珍)如(寶)に愛之がられ、客に請す各色陳設の内には入れずに、自己の這邊に留

て、高興擺酒の時しきりと賞玩して居られた。それから又各色の舊蜜の瓶中には、都な 歲寒
 三友や、(三七) 玉堂富貴等の鮮花を點綴著、上面の兩席は (三六) 李嬌、薛姨媽の二人で、賈母には東邊に透
 雕夔龍の護屏、矮足短榻、靠背、引枕、皮褥など俱と全うた一席を設けてあつて、其榻の上の一頭に
 又(二個)極めて輕巧な洋漆描金の 小几を設けて、其几の上には茶碗、
 嗽盃、手巾之類と、又一個眼鏡の盒子が放著であつた。賈母は其榻の上に
 歪に在つたまま、衆人と一回説笑などされては、又自ら眼鏡を取って戲臺
 の上を一回照られて、薛姨媽に向ひ笑ひながら、我老了、骨頭は疼むの
 だから、こんな放肆をして、我歪著て相陪様などは恕してください罷と
 道はれ。又琥珀に、其榻の上に坐在て、美人拳をして吾の腿を搥いてく
 れる様命つけられ、其榻の下には席面も擺さず、只だ一張の高几を有て、そ
 れに例の瓔珞、花瓶、香爐等物を設著、其外別に一精緻な小高桌を設て、
 それには酒杯や、匙、箸などを設著て、自己の這一席を榻の傍に設け、寶琴、湘雲、黛玉、寶玉の四
 人がそこに陪坐してそこに居、一箇や一葉が出て來る毎に、先づ賈母に捧出て看にかけ 喜ば
 嗜やうにその小桌上に留在、賈母の方が 撤めば仍た他の四人の席上にそれを放在たものであつた。
 それは他の四人は賈母に跟著して坐るものと算たもので、故下面は邢夫人、王夫人の位、再下は便

- 【二六】 松竹梅。
- 【二七】 牡丹。
- 【二八】 李純の偽母。
- 【二九】 原文、小几、几上、小机、机上。
- 【三〇】 一種の按摩式のうち方か或は軽く小さく軟らかなる棹様のものありて、それにて打たするならん。
- 【三一】 原文、仍撤了、賈母の御すみになつた残りの馳走は。

是尤氏、李執、鳳姐、賈蓉の妻など、西邊の一路は寶釵、李紋、李綺、迎春、探春、惜春等姊妹、兩
 邊の大梁上一對の (三二) 聯三聚五の玻璃、芙蓉彩穗燈を掛著、其一席(前)
 毎に、一柄の漆幹の 倒垂の荷の葉を懸て、葉上には獨信が有つて (三三)
 彩燭を挿著やうになり、又(這の荷の葉は乃是) 璣瑯的活計で、扭轉
 やうに可以、如今皆な其荷葉を外に扭轉向けて、燈影を逼住て外の向を照
 したので、戲は分外真切と看える様になつた。それから又一齊に窓隔や門
 戸を摘下て、全彩穗燈や各種の宮燈を掛け、廊簷の内外、及び兩邊の遊
 廊や罩棚には、各色の 羊角燈、玻璃、玳瑁、料絲の燈に、繡をし、畫
 をかき、(三六) 或は堆し或は摺ぬき、或は絹、或は紙などの諸燈を掛滿ね、廊
 上の幾席は、便是賈珍、賈璉、賈環、賈琮、賈蓉、賈芹、賈芸、賈菱、賈
 蒿等で、そのほか賈母が也族中の衆人を請に差去れても、年近は熱鬧を
 懶になつたり、家内が無人で、便來れぬものがあつたり、疾病の淹纏に、
 來たくても來られぬのがあつたり、或は 一等富める者を妬み、己の貧
 しきを愧づるものも有り、甚しいのになつては(二九) 鳳姐の人と爲りを憎畏
 賭氣來ぬ的も有、或は羞し手羞脚で、不慣見人に敢來ないものも有つて、族中は多あつても、女客で

- 【三二】 三燈、乃至五燈を一つに
よせて一燈の様にしたものと
對。
- 【三三】 芙蓉(はす)とは其形を云
ひしものならん、彩穗とは燈
の底下のところから、南京珠の
總(ふさ)を飾につけたものな
り。
- 【三四】 葉が上から、おつかぶせ
た様に、さがつてる也。
- 【三五】 彩色した蠟燭。
- 【三六】 鐵板にエナメルを塗つて
奇麗に色をつけたものなり。
- 【三七】 羊の角を薄く削りて作つ
た燈。
- 【三八】 原文、或堆或摺、浮かし
高くし、或はくり抜いた様に
中凹にして細工してある。
- 【三九】 一種。

来た者は、賈茵の母婁氏が、賈茵を帶了て来た位で、男子の方は只だ賈芸、賈芹、賈葛、賈菱の四人が、現在鳳姐の手下で事を辨に來了て居た。當下集まつた人は全ではなかつたが、家庭間の小宴中數と來は、也熱鬧な算是であつた。當下又林之孝の家的が六個の媳婦を帶了、(四〇) 毎張桌上に一條の紅毡を搭著、毡の上には、選淨な大の一般た (四一) 新出の局的様な銅錢を、大紅の彩繩で (四二) 好く串し、兩個人で一張づつ、共で三臺に擡がせ、林之孝的家的は指示し、那の兩張は薛姨媽、李嬌の跟前に擺至せ、一張は賈母の榻下に送至た。賈母は當地に放在罷と道はれた。然るに這の媳婦們は素から都く府の規矩を知つて居るのであつたので、そこにも其桌子を放下、一竝其錢を打ち開け、彩繩を抽去て、其桌の上に堆み在た。正ど其時 (四三) 西樓の樓會を唱て、這の齣の終ころで、子叔夜は賭氣て去了、那の文豹は便く發科ながら儂が賭氣て去了つたが、恰好今日は正月十五日、榮國府老祖宗の家宴だからさあ待て我が這の馬に騎り趕進去て菓子を討些て吃べるが是要緊のと説畢、賈母等を引的都笑了。すると薛姨媽等は、おやまあ好個に (四四) 鬼頭様な孩子です、ね、なんとまあ可憐見のと都説と。鳳姐、這の孩子是また纔と九歳了で御座ますよ。すると賈母は、他は仲巧く (四五) 説得

- 【四〇】 張ば臺なり、一臺毎の。
- 【四一】 新に造幣局から出た、鑄たての。
- 【四二】 原文、串好、奇麗な串繩(ぬきなは)でさし。
- 【四三】 西樓記といふ劇也、樓會は其中の一段。
- 【四四】 原文、鬼頭孩子、子供で居ながら、立派な藝をする故、ほめて云ふ也。
- 【四五】 原文、難爲他説得巧、文豹が馬に騎て、追ひかけるところに、菓子を買ひに急でゆくと、巧くちやりのに、仕草を入れ換へ人を笑はせたことを云ふ、他は文豹になつた子供役者。難爲、えらい。

難爲、さあ一個賞字じやと説了るや否や、(早く)三四個の媳婦は、已經に手下小籤籬を預備下て居たので、其賞と叫はれたのを聽見て、便く走上去て、桌の上的 (四六) 散錢堆内を、每人一籤籬づつ撮了、戲臺に走て出て、老祖宗や、(四七) 姨太太や、(四八) 親家太太が、菓子を買つて吃的る様に、文豹に賞れるのですと説著て、臺の上から、(只聽)豁啣啣と滿臺錢の響させて便撒した。ところが賈珍、賈璉は已に小厮們に大籤籬的に錢を入れて擡了來て、暗暗的にちやんと那裡に預備して在たのであつたが、賈母が一賞たのを聽見た、端的は下回到に分解するであらう。

- 【四六】 原文、散錢堆内、普通なら錢さしに、さしてあるのだが、前に云ひし如く、ばら錢にしてある也。
- 【四七】 薛蟠の母。
- 【四八】 李執。

第五十四回

史太君陳腐の舊套を破り、王熙鳳 戲彩の斑衣に倣ふ

話說賈珍、賈璉は暗暗に錢を預備下して居たが、賈母が、賞をやれと説はれたのを聽見て、他們も忙しく小厮們に命じて滿臺錢響させて快いで錢を撒かせたので、賈母も大悦びで居られた。それから二人は起身と、小厮們は忙しく（一把の）烏銀の新しい煖壺を遞過て來と、賈璉は手内捧在、賈珍の隨了、先づ李嬌の席上に至つて、身を躬めて杯を取下來、身を回すと、賈璉は忙して一杯を斟了、然後便薛姨媽の席上に至つて、也一杯斟了と、李嬌、薛姨媽二人は忙に起身て、二位爺請か坐著下さい罷、何も必多禮にと笑道、於是邢、王二夫人の除は滿席其席を離了て、俱に手を垂れ旁立てかしこまつて居た。賈珍等は賈母の榻の前に至ると、榻が矮いので、二人は膝を屈げて跪了き、賈珍は前から杯を捧げ、賈璉は後から壺から捧ぎした。酒を捧げたのは二人止であつたが、那の賈環弟兄も却也一溜と排班按序に他の二人に隨著て進來て、他の二人が跪下たのを見て、他們も也一溜と跪下たので、寶玉も也忙しく跪了た。史湘雲は悄悄的と他を推いて、爾は這會子什麼で幫に跪きますの、這樣にとを有より、爾は一巡と酒でも斟いで去なさつた方が豈好ではありませんか。すると寶玉、再一會子

【一】戲彩の斑衣、老萊子、年七十二にして父母猶ほ存す、萊子、身に五色の斑爛の衣を服し、嬰兒の戲を親の前に爲し、親の喜ばんことを欲す。

しまし等、再斟去りませうと説著て、他の二人が斟完起來のを等つて、方起來て邢夫人、王夫人に酒を斟過了げた。賈珍は、妹妹們怎麼様かねと笑道と。賈母等は都、爾們はあちらに去罷、その方が他們到て便宜些からと説了て、賈珍等は方て退出して去つた。當下天未だ二鼓にもならず、是ど八義中觀燈の八齣の戲演的で、（正在と）鬧熱之間であつたが、今寶玉が其席を下來て外に往去うとするのを見て、賈母は、爾は那裡に往きます、外頭は爆竹が利害く、天上から火が吊下て來て衣服を焼きますから能く仔細なさいよと因説れた。すると寶玉は、私は遠くには往去しません、只出來就來ますからと道うた。賈母は、人か好生跟著てゆく様命せられ、於是寶玉が出來と、麝月、秋紋、並に幾個の小丫頭が隨著て有た。賈母は、襲人は怎麼して見えないのか、他は如今は也う拏大ぶつて、單だ小女孩子們だけ支使出來のかなと因問れたので、王夫人は忙しく起身て笑ひながら、他の媽が前日沒了、熱孝なので、便で前頭來ませんので御座いますと回道た。賈母は之を聽了て點頭ながら、又笑道れるやう、主子を跟てる間は、却て這の孝とか不孝とか、講不し起るものです、若是他が還た我の方に跟たら、難道這會子也、不在此這裡は成られん、こんなことは皆な我們在太寬了からだが、人を使ふに、不查這些居ては、竟に例と成了て、取締がつかぬから。

【一】 八義記の觀燈の段。
 【二】 原文、因爲熱孝、熱孝（喪中）であるため。
 【三】 原文、講不起這孝與不孝、賈母の眞意は、主人について居られぬ、云ふべき筈はない。
 【四】 襲人が這裡（ここ）にあぬ様なことは、親の病氣などしても無暗と。
 【五】 這んなことを、やかましく云はずににおいては。

丁度其時鳳姐(忙)過て來て笑ひながら、今兒晚上で他の孝は沒ますが、此の燈火、花炮などは最是も耽險的ですから、那の園子裡は須得他が看著てくれねばなりません、這裡で戲が唱と、園子裡の人は誰も彼も偷來と瞞瞞に來ぬものはありませんから、彼は還た細心で各處でも照看照看ねばなりません、況且這が一散ましたら、寶兄弟が回去て睡覺は、都是齊全としてやらねばならず、それから他が再こちらに來れば、衆人が又心を経けませんでせうし、それから散了から回去た時は、鋪蓋は也是冷的、茶水も也齊備として居ず、各樣都不便宜でせうから、我が我が呼で用來らず、只だ能く屋子を看、散了と又齊備しましたので、我們這裡では又不二耽心、又他的禮を全げさせ可以ので、三處とも有益わけでは御座いますまいか、老祖宗が、他に要呼で御座いますなら、我は他を叫來就了と回道た。賈母は這話を聽了て、爾の這話は很是で、我的想よりも周到だから、快他を呼ぬがよい但只、他の媽は幾時また死しましたか、我は怎麼して知道なかつたのだらう。すると鳳姐は、前に襲人が親自で老太太に回あげた様でしたが、怎麼して就了了になりましたかと笑道た。賈母は想了一想られて、笑道やう、ああ想へ起來と、我的記性平常了だと。衆人は都な、老太太が那裡で還た這些な事まで記得になつて居られませうと笑説た。賈母は又嘆じて、我想著みると、他は小兒ときから我一場伏侍了、それから又雲兒一場伏侍了、最後に寶玉の魔王

- 【七】 原文、沒孝、忌中がすむ、支那にて親の喪は非常に矢釜しき也。
- 【八】 一度の極く輕易な義なり。
- 【九】 原文、魔了他、かれ襲人は、その魔(わんぱく)をこらへて。

の處に給了個たら、(二〇)虧他も這幾年と云ふもの他魔了してくれた、他は又俗們家の根生土長の奴才でもなく、俗們で大恩典 (二二)ものでもないで、他の媽が沒つたとき、我は幾兩か銀子を要給發送と想著て居て、也就忘れてしまつたと道はれた。鳳姐、前兒か太太が已他に四十兩の銀子を賞了ましたから、也就了了。賈母は説を聽かれて、點頭ながら、這は還たそれで罷了が、正好也也鴛鴦的娘が前兒沒了さうだが、我は他の老子娘は都な南邊に在るから、他に家去て (二三)孝を守らせぬが、如今 (二四)他兩個を一處に作伴兒去おかうと想ふ、それから又人に (二五)菓子や菜饌や點心などを持たせて、他の兩個人に與吃去と道はれた。琥珀は、還た這會子ちよいと等つて居ましたら、他は (二六)早就そこを去了ませうと説著て、大家又酒を飲み戲を看て居た。且説寶玉は、一逕園中に来至と、(二七)衆婆子は、他が回房たのを見て、便跟いて去かず、只だ其園の門裡の (二八)茶房裡で火をいて、(二九)管茶房的人と、偷空兒一酒を飲み牌を闘て居た。寶玉は院中に來至てみると、燈花は燦爛とついで居ても、ひっそりして却つて人聲もしない。すると麝月は、他們

- 【一〇】 かれ襲人によつて。
- 【一一】 原文、沒受過、うけぬ、普通奴才の様に、幼少から恩を受けて育つた者でない。
- 【一二】 原文、守孝、孝は喪也、喪に服する。
- 【一三】 襲人、鴛鴦。
- 【一四】 日本に云ふ菓子にあらす果物を砂糖漬にしたもの。
- 【一五】 原文、他早就去了、鴛鴦は襲人のとこにまゐりませう。
- 【一六】 琥珀は一度かく笑道ながら、下に又説著と書いてあるは、殊に本記者の癖なり。
- 【一七】 此の前に賈母の命により寶玉について來たばあや也。
- 【一八】 茶をわかす處。
- 【一九】 茶のことを受持つ人。
- 【二〇】 すきをみて、かくれて。

睡了は成まいから、僂們悄悄と進つて去つて嘘^{おどして}他們一^{ひと}跳し。於是大家が躡^ひ足潛^あ踪^しして、^(三)鏡壁のところに進んで一看と、只見襲人が一人と對面^{むかひあつ}て地炕^{かう}の上に歪^{よこ}在^なて居、那一頭では兩三個の老嫗^{はあや}が打盹^{ひねむり}をして居るので、寶玉は他の兩個を都^{みな}な睡著^{ねむつて}了と當^{おも}うて、纔^{まさ}に進つて去かうとした。忽ち聽いて居ると鴛鴦^{えんあう}が嘆^{たん}了一声、可知も天下^{よのなか}の事は難^{むづか}定^まです、ね、論理^{ろんり}ですと、僂們は單身^{ひとり}這裡^{こゝ}に在^なて、父母^{ちちはおは}は外頭^{かへり}で、毎年^{まいねん}（他們は）定準^{きまりなく}沒個^{あつちから}、東去^{あづま}西來^{にし}ですから、僂は再^{また}た、其終^{そのしゆめ}的に送^{おひな}せまいと想^{おも}はしましたに、偏生^{ちやうど}今年^{ことし}、這裡^{こゝ}で就死^{おなく}になつて、僂は出^で去^かつて終^{しゆめ}を送^{おと}りましたと説道^{いふ}。襲人は、正是^{それ}は我也もこんな^{ちちは}に父母^{ちちはおは}を看^{かん}著^しに回^{かへり}首^{かみ}ます様^{やう}なことが能^{でき}敷^まして、太太^{おさま}から又四十兩^{りやう}の銀子^{おし}を賞^{いた}了^たとは想^{おも}ひ不^ま到^{せん}でした、這^{これ}こそ我一場^{わたしたち}を養^{やし}算^{さん}するので、我は敢^{わたし}妄^な想^なはおもひません。寶玉は之^{それ}を聽^き了^た忙^まく身^みを轉^かして來^きて悄悄^{しやげつ}と襲^あ月^{げつ}に向^{むか}ひ、誰^ど知^ら他^たが來^きて居るが、這^{いま}我^わが一^{ひと}進^いて去^かつたら、他^たが又賭氣^{たか}で走^いつてしまふだらうから、僂們^{わたしたち}は回^{かへ}去^かつた方^{ほう}が不^よ如^{から}罷^ら、^(四)他の兩個^{ふたりに}靜靜^{しんじん}的^{ていじやう}と一會^{いちゑ}話^わ兒^なさせてやらう、襲人は正^{ただ}一個^{ひと}で悶悶^{もんもん}して居る所に、他^たが幸^{さい}而^に來^きの好^よたと説^い著^て、仍^{なほ}た悄悄^{しやげつ}と出^でて來^きて、寶玉^{ほうぎよく}は便^{たやす}く山^{やま}の背後^{うしろ}に走^ゆ過^き站^{たつ}著^て衣^{きもの}を擦^すつた。襲^あ月^{げつ}、秋紋^{しゅうもん}はそこ^{こゝ}に站^た住^どて臉^{かほ}を背^せ過^か來^きながら、蹲^{かか}下^んで小衣^{したぎ}を解^{おと}きなさいましな、仔細^{しじゆ}になりませんと肚子^{おなか}が風^{かぜ}吹^ふ了^たからと口^{くち}内^{ない}笑^わ道^う

- 【三】 鏡壁、前章に見えたり。
- 【三】 原文、送終的、をばりを送る、親の葬をする。
- 【三】 原文、死在這裡、襲人の母が病死する時、襲人が、うちに還つたことは前に出づ。
- 【四】 原文、讓他兩個靜靜的說一會話を説(ばな)さ讓(しめ)よ。
- 【五】 男が小便すると思ふから顔^{かほ}をそむくる也。

たので、後面^{うしろ}に居^ゐた兩個^{ふたりに}の小^こ丫^や頭^なは寶玉^{ほうぎよく}が小解^{せうげん}するのだと知^しつて忙^まく先^まづ出^で去^かて茶房^{ちやばう}内^{ない}を預^{たくし}備^び了^た。這裡^{こゝ}から寶玉^{ほうぎよく}は剛^{たつ}て身^みを轉^か過^か來^きと、只見^{ただ}兩個^{ふたりに}の媳婦^{かみな}兒^なは迎^{むか}面^{めん}に走^はて來^きて、是誰^{どなた}でゐらつしやいますかと問^とうた。秋紋^{しゅうもん}、寶玉^{ほうぎよく}が這裡^{こゝ}においでですと、僂們^{わたしたち}あんまり大^{おほ}呼^い小^こ叫^いばかり居^ゐてはいけません、仔細^{しじゆ}なさい他^たに嘘^{おど}了^たから、すると那^{その}の媳婦^{かみな}們^{たち}は、ほんとに我^{わたしたち}們^{ども}は知^し道^じませんければ、此^この大^{おほ}節^{ふし}下^ひに、來^き惹^よ禍^{わざ}了^たをするところでした、^(七)姑娘^{こゝろ}們^{ども}は連^ま日^{にち}さぞ辛^{あつ}苦^か了^たでせうにと説^い著^て、便^た已^にに跟^そ前^{まへ}に到^きたので、襲^あ月^{げつ}等^らは、其^{その}手^て裡^にに拏^も著^て居^ゐますのは是^な什麼^{なん}ですかと問^とうた。其^{その}媳婦^{かみな}們^{ども}は、是^{これ}は老^{おほ}太^お太^おが、^(八)金^{きん}、花^{はな}の二^{ふた}位^り姑^こ娘^{にやう}に賞^あつた吃^{くち}的^{てき}東西^{どうぶ}で御^ご座^ざいますと道^いうた。すると秋紋^{しゅうもん}、外^あ頭^とでは八^{はち}義^ぎを唱^なめて居^ゐてまだ、^(九)混元^{こんげん}盒^{げん}を唱^なないに、那^{その}裡^{こゝ}から又^{また}た金^{きん}花^{はな}娘^{にやう}が跑^はて來^きられたと笑^わ道^うた。寶玉^{ほうぎよく}、人^{ひと}に其^{その}盒^{げん}子^こを掲^あけ命^{めい}て、我^{わたし}に瞧^みておくれ。すると、^(一〇)兩個^{ふたりに}の媳婦^{かみな}は蹲^{しゃ}下^ん身^み子^こ、其^{その}盒^{げん}子^こを看^み了^たと都^{みな}是^{これ}席^{せき}上^{じやう}に所^た有^{じやう}的^{てき}上^{じやう}等^{とう}の、^(一一)菓^{くわ}品^{ひん}や菜^{さい}饌^{じゆん}であつたので、點^ち頭^づながら邁^ま歩^ほと就^い走^はしまつた。襲^あ月^{げつ}、秋紋^{しゅうもん}は胡^こ亂^{らん}に盒^は蓋^{ふた}を擲^お了^たあとから跟^い上^あて來^き。寶玉^{ほうぎよく}は、這^{こゝ}の兩^{ふた}個^に女^に人^には到^たか和^あ氣^き會^え話^わ、他^た們^{ども}は天^{てん}天^{てん}了^たて居^ゐて、到^かて僂們^{わたしたち}は連^ま日^{にち}辛^{あつ}苦^か了^たでせうと説^いふ所^{ところ}などは、那^{あれ}は却^かて

- 【六】 來て己の身に禍(とが)を受ける様^{やう}なことをする。
- 【七】 襲^あ月^{げつ}、襲^あ人^{にん}等は^ら下^{した}の召^{めい}使^しは、かく尊敬^{そんけい}して云^いふ也。
- 【八】 金は鴛鴦^{えんあう}、花^{はな}は襲^あ人^{にん}の姓^{せい}。
- 【九】 原文、外^あ頭^と唱^なめて居^ゐる、外^あ頭^とこのそと、即^{すなは}ち今^{いま}八^{はち}義^ぎの戲^げを唱^なめて(うたう)てやつて居^ゐる。
- 【一〇】 混元^{こんげん}盒^{げん}の一段^{いちだん}。其中^{そのちゆう}に金^{きん}花^{はな}娘^{にやう}といふがある也、洒^{しや}落^{らく}なり。
- 【一一】 秋紋^{しゅうもん}、襲^あ月^{げつ}に非^ひず、他^たの婦^に人^{にん}。
- 【一二】 砂糖^{さとう}漬^じの菓^{くわ}物^{ぶつ}。

矜功自伐つもりでさう云うたのではない麼な。すると麝月は、這は好的と云へば也很好御座いませうが、那た禮を知らんと云へば、太り禮を知らなさすぎますわ。寶玉、爾們は是明白人だから、他們は粗笨可憐の人と【三】耽待て就是了と一面説て、一面園中に來ると、那の幾個の婆子は酒を吃んだり牌を鬪たりして居ながら、不仕と出て來て打探て居たが、寶玉が來了のを見て、也都な跟上了、花亭の後廊上まで來ると、只見那に兩個の小丫頭が居て、一個は小沐盆を捧著、一個は手巾を搭著、又瀕子や小壺を拿著て那裡に久等て居たので、秋紋は忙先く其盆内に手を伸れて試了試、爾は【四】越大越粗心了、那裡で這な氷水みた様なものを弄的來ました。するとその小丫頭は、姑娘さん瞧瞧さいまし這個な天阿ですか、我は水冷ては怕と思ひまして、巴巴的是滾水を瀉的來りましたが、還たこんな冷冷水呢たと。正と説著居ると、可巧見一個の老婆子が（一手に）茶杯と（一壺の）滾水を提著走て來たので、那の小丫頭は、好奶奶、我に瀉上些給さいなと便説と、那の婆子は、【五】哥哥兒、這是は老太太の茶に泡してあげるのですから、（爾に勸ます）走て取去で罷、那裡も會う脚が走大了やうなこともありますまい。すると秋紋が、憑爾是誰にしても、爾給ませんなら、我は老太太の茶杯子でも瀉了て手を洗つてやりませう。之を聽いて那の婆子が回頭と是は秋紋であつたので、忙に其壺を提ち起來就瀉いでやつた。秋紋は、道敷

【三】 大目にみてやる。

【四】 越大（とし）りながら越（いよいよ）粗心（きがつかぬ）

【五】 すぐ前の、沐盆と手巾などを持て來た小丫頭也。

【六】 是は寶玉を指し云ふ小丫頭は寶玉に給仕し居る故也。

了です、爾は這慶大年紀して也で見識が沒有ね、是は老太太の御用の水で、人も要不著ぬ位のこととは【七】誰不知のを、就敢要了のですからね。婆子は、我眼が花了まして、這姑娘と認出來沒でしたから。すると寶玉は、手を洗了と、那の小丫頭はその小壺から瀕子に瀉了て他手内と、寶玉は快く瀕了た。秋紋、麝月も也その熱水で洗了一洗、瀕了てから、寶玉に跟進て來つた。寶玉は煖酒を一壺要させ、李嬌、薛姨媽から斟ぎ起めると、其二人は也と笑して坐を讓めなとして居た 賈母は【八】他は小ですから、他に斟去なさつて、大家到ひ這杯を一つ 乾過つて下さいと説著て、便く自己は乾了たので、邢、王の二夫人も也忙く乾了、又薛姨媽、李嬌の二人に讓著られるので、薛、李の二人も也忙く乾了た。賈母は又寶玉に、爾の姐姐妹妹たちにも一齊な斟上でおあげ、【九】爾斟では許ません、して都ひ他乾おもらひなさい。寶玉は聽説て、答應著て按次に斟了黛玉の前に至ると、他に偏つてそれを飲まず、其杯を拏起來寶玉の唇の邊に放て在と、寶玉は一氣に飲み乾した。黛玉は、多謝と禮を笑道た。寶玉は又、他替に一杯斟で上た。すると鳳姐は、寶玉冷酒を嗑んでは別よ、手が顫へて明兒は字が寫けませす、弓が拉けません様になりますから仔細なさい。寶玉、決して冷酒は嗑みませんから御心配なさいませすな。鳳姐、そんなことは沒有ことは知道て居ますけども、白爾に囑咐でおきますので

【七】 誰か知らざらん。

【八】 原文、他小、讓他斟去、寶玉は子供だから、御遠慮なく寶玉につがせて召し上つて下さい。

【九】 飲みます。

【一〇】 原文、不許亂斟、一人はついで、一人はつがね様な平均をしてはいかぬ。

すよ。於是寶玉は裡面は斟完で只だ賈蓉の妻君だけに除たが、丫環が斟了あげたので、然後出で廊上に至つて、又賈珍等に斟了一巡、一會坐了、方て進來て仍た舊坐に歸つた。一時すると湯が上後、又元宵が獻上た。すると賈母は便く小孩子们も可憐見だから戲は暫く歇ませ、他們にも滾湯や滾菜を吃些、再た唱らせなさいと、各色の菓子を他們に掣些與て吃去させて一時戲を歇了る様命せられたので、便く婆子が門下に常走的、兩個の女先兒を帶つて進つて來て、兩張の杌子を那一邊に放了て、他に坐命せ、絃子や琵琶を遞過去た。賈母が李嬪、薛姨媽に、何書を聽好せませうと便問と。他の二人は什麼不拘都好御座いませうと回説た。賈母は又、近來什麼な新しい書が添的きたかと便問られたので。那の兩個の女先兒は、殘唐五代の故事を書きました、一段の新書が有ますと回説た。賈母は、是は何と名ふかと問かれた。女先兒は、鳳求鸞と叫做ますと道うた。賈母、這個名字は到好いやうだが、什麼でまたそんな名を起的たか、爾先づ大概の原故を説説、若し好ければ再と説しておくれ。那の女先兒は道ふ様、この書上は乃是殘唐の時の事で御座いまして、本是金陵の人氏で王忠と名喚一位の郷紳が有つて、曾て兩朝

【四二】元宵の晩に出る菓子。
 【四三】役者がみな子供なる故、かく云ふ。
 【四四】二人女先兒は浪花節語りの如きもの。
 【四五】原文、命他、其子供役者に。
 【四六】原文、聽何書好、聽は歌をきくこと。
 【四七】唐の次代の五代とは後梁後唐、後晉、後漢、後周、その五代の前に唐は亡ぶる故、五代の唐の接續の間を指し、支那式に文飾して殘唐と云ひたり。

の宰輔とも作過たが、如今は老を告げて家に回つて居、膝下に只だ王熙鳳と名喚一位の公子が有ましたと道ふと、衆人は之を聽了くすくと笑將起來た。賈母はまた、這是は我們的鳳丫頭と重了ではないかと笑道れた。媳婦們は忙く上去て、他を推りながら、混説をおいひなさい、這是は二奶奶の名字じやありませんかと道うた。賈母は笑ひながら、爾道し、爾道しと道はれたので。女先兒は忙く站起来さま、我們該死了、是奶奶の尊諱と云ふことを知じませぬものでしたから。鳳姐、怕三什麼、爾は只管説罷、重名重姓的多あることです。それから又女先兒は、這一年王老爺は趕考のため王公子を上京打發了られると、丁度那の日に大雨に遇見し、庄上に走到て其雨を避けますと、誰知ませう這庄上の郷紳の李と云ふ人は、此の王老爺と世交でしたもの所以、這の公子を書房に留下住もてなされた。然るに這の李郷紳には膝下に兒がなくて、只だ雛鸞と名喚作一位の姑娘が有つて、琴棋書畫みな通ぬものはありません……。すると賈母は、怪道で鳳求鸞と云ふやうなことを叫作ます、ああ不用説、我は已猜看了、自然是の王熙鳳が這の雛鸞小姐を妻に爲たいと云ふことだらうと忙道た。女先兒は、原來老祖宗は這の一回書のことを聽過になつたので御座いませうと笑道た。衆人は都な、老太太はま

【四八】鳳姐の名は熙鳳、ここは無論、鳳姐と寶玉のことをあてて云ひたるにはあらざる也。
 【四九】原文、推他、手でおし。
 【五〇】鳳姐。
 【五一】死すべし。
 【五二】同名同姓。
 【五三】ことや、こや、書畫。此等は婦人高等教育の條件。
 【五四】いはんでもよい。

だそんなことは什麼も聽過になりません、聽過に没んでも、(猜になれば)也ぐ猜著になりますからと道うた。賈母は笑道れる様、這些な書は都是一個の套子文句で、是些才子佳人と左不過、最趣兒ないものだ、人家の女兒などを那樣に壞ふ様などを説つておいて、還て是佳人など説ひ、影兒も形も也沒有なことを編的、口を開けば都是も書香門第、父親は是尙書でなければ、就是宰相、生れた一個の小姐は必ず珍寶の如に愛がられ、この小姐は必是文に通じ禮を知り、曉らざる所なく、竟是個絶代の佳人が、只だ一個清俊の男子を一見するや否、是親、是友の管なく、(五)終身の大事を想ひ起來ては、父母も也忘れ、鬼も鬼と成はず、賊も賊と成はぬ様なことをするものが、那一點が是佳人と云へやう、就是に滿腹の文章を披瀝して這些事を作り出し來も、どうしても也佳人とは算れ不得ではないか、比如ば男子滿腹の文章があつたにしても、其作中の人物が賊と作るやうなことでは、難道も那の王法上からは他を是才子と看ようとしても、(五)賊情入とせねば一案も了不成、可知ば那の編書的是自己で自己の嘴を塞了様なものじやないか。再者世宦書香大家の小姐で、知禮讀書、其夫人も知書識禮である様なことを説うてあるのだから、自ら

【五】 以下小説戲文に對する批評は、確に肯綮にあたり居れり、殊に是迄の支那小説は、水滸傳、金瓶梅等四五を除く外は千篇一律の濼なきに非ず。

【五】 原文、終身大事、結婚。

【五】 原文、鬼不成鬼、賊不成賊、鬼や賊などは畏るべく賤しむべきなのに、畏れもしなければ賤しみせず、恬然としてそれらと交る。

【五】 原文、不入賊情一案了不成、賊情があると云ふ方に入れてさばければ其審判はつかぬ、どうしても作者の悪いことは免るること出來ぬ。

【五】 己の老衰を以て職を辭し。

老して家に還つたとすれば、自然這樣な大家の人口も少からず、奶母や丫環の小姐に伏侍る人も不^レ少あるだらうに、それじや怎麼で這些な書上に凡そ這樣の事があると、只だ小姐と緊跟る一個の丫環丈ほか居ないのだらう、爾們白く想想て御覽、那些は何麼なるのだらう、是前に言つたことは後語のことに答はんではないかと笑道れた。衆人は之を聽いて、都に笑説やう、老太太の這一説で、是謊が都批出來たと。賈母は又笑道れる様、這にはちやんと原故が有個よ、這樣書を編る的には、(六)一等人家の富貴を妬むものや、(六)求不遂心ものが居て、所以でそんな書を編つて人家を汚穢るものだが、其他に再た一等(他自己)這些書を看んで其に魔了られ、他も也一個の佳人を夢想し所以、這些な書を編了出來て楽しんで取るので、何嘗他が那の世宦讀書家の道理を知りませう、他那の書上にある那些な世宦書香大家は説ふまでもなく、就ち如今眼下眞的、我們這の中等の人家に比説も、也那樣的事はないのだから、是那些大家にもそんなことのないことは説ふまでも別ことだらう、可知ば下把を掉了させる様な話を面白く説たものさ、所以我々は從這些な書を説させなかつたから、丫頭も也這些な話を懂らなかつたものさ、だがこの幾年我は老了、他們姊妹們が遠くに住て相手がなないものだから、我は偶然悶了と、幾句は説んで聽聽てもらふが、他們一來くると、就忙ぐそれは歇了叫たものだね。すると李嬌、薛姨媽の二人は都な、這は正是もよい

【六】 小姐の身近についてる、他に幾人もついでる餘裕なし貧人と餘り遠からぬ暮し方、小説の缺點を云ふ。

【六】 一種の。

【六】 求めて心に遂げず。

大家の規矩で御座いますよ。我々の家でさへも這些な雑話は孩子們には聽見かせませぬ様にして居ますと笑説て居ると。丁度鳳姐が走上來て酒を斟いであげながら、罷了、酒が冷了ますよ、老祖宗一口嗑つて喉子を潤潤なさいまして、謊を辨ておやりなさい罷、這一回が就ち辨説記と叫做もので(西)本朝本地本年本月日本時に出生ましたが、かく老祖宗が一たび口張になつたが最後、兩家の話は、花が兩朶に開いて、各一枝を表すと云ふ様なことの、是眞か是説かと云ふことなどは不表、さあ更に(五)觀燈看戲人を整として、老祖宗且二位親戚に一杯酒を吃に譲り、兩齣の戲を聴になつてから、更に昨朝の話を如何にと辨起なさいまして一面説一面笑つた。其話が未だ會説完ぬに、衆人は俱已に笑ひ倒けさうになり、其兩個の女先兒も也不住に笑個ながら、(六)奶奶はほんとに好鋼口から、若し奶奶が私共の様に一度説書を要るやうでしたら、眞に我々吃飯的地方兒が都了了と都道た。薛姨媽、爾少興頭些になさいまし罷、外頭に人が有て、往常とは比不得ますから。すると鳳姐は外頭には只だ珍大哥一位でせう、我々は還た哥哥妹妹の様に、小兒の時から一處に淘氣了這麼にに大きくなり、這の幾年こちらに(六)親り作了ので、我如今では多少の規矩は立了りまして、是の小兒の時から兄妹の様にしたことはなく、今日は(五)伯

【六三】この御談は、と浪花節様に戯れいへる也。
 【六四】この朝廷、此の地の意、下句と合せて、たつた今の意となる。
 【六五】原文、整觀燈看戲的人、鳳姐の此の言葉つきは浪花節の眞似をしたる也。
 【六六】鳳姐をさす。
 【六七】はなばだ柄口な。
 【六八】原文、作了親、嫁入して。
 【六九】上下の區別。

叔の間柄と云ふことを論として居ます。那の二十四孝上の老萊の斑衣戲彩と云ふことがありますが、他們は戲彩來、老祖宗を笑一笑引的ことは能ませんではありませんか、我は這裡好容易老祖宗の笑了一笑を引的て多に一點か東西を吃ていたたいて、大家喜歡で居るのですから、我は謝禮を受る該だと纔是て居ますに、(七)難道反て我を笑話なさいますの不成か。賈母、可(七)是に這兩日我は竟ぞ痛痛的笑一場やうな目にあはなかつたが、(到是)他の虧で纔這一路、笑的られて我心裡は好些痛快了から、(我は)更に一鍾酒吃みませうと云うて吃著ながら、又寶玉に、爾姐姐に一杯也敬なさいと命れた。鳳姐は、他敬なさらんで宜う御座んす、我が老祖宗の壽を討しませうと説著ながら、賈母の半杯剩つて居た酒を拏起て吃了、酒杯を丫環に遞與て、別に溫水に浸つてあつた杯を換了一個上來た。於是各席上を都な撤去て、別に溫水に浸つてあつた杯に換て(七)新に酒を斟了上來る待にして、然後又た坐に歸いた。例の女先兒は、老祖宗が這個書のことを聽下さいませんなら、一套曲子彈聽聽罷と回説た。賈母は、好、爾們兩個で一套將軍令を(七)對でやつてみよと便説道ので、其二人は(説を聽いて)忙く和絃按調撥弄起來た。賈母は、天有二幾更だらうと因問た。すると衆婆子は三更了で御座いますと忙回た。賈母は、

【七〇】原文、難道不成、どうして出來ませう、多く反語になる、我を笑話なざるわけはありますまい。
 【七一】這兩日とは、此の數日、近頃との意。痛痛的笑一場は、痛痛的に笑ふと一場と讀み、十分に笑ふこと。
 【七二】原文、新酒、古酒新酒に非ず、別にあらたに酒を出す也。
 【七三】曲の名。
 【七四】二人で一處にやる。

怪道で寒さが浸浸的起來たと道はれると、早く環が添換の衣裳を拏了て送來て穿了した。王夫人は
やがて起身て來て陪笑しながら、老太太不レ如か煖閣裡炕の上に挪進た方が、倒也罷了、這の二位親
戚は、是外人では御座いませんから、我們が陪著してゐますから就了と説道た。賈母は聽レ説て、
既這樣説、大家(都て)挪進去不レ如か豈不レ煖和一からと笑道れた。王夫人、裡面は坐になります處が
不下かも知れません。すると賈母は、なに我に道理が有ります、如今は這些な一人每桌子は用らぬか
ら、只兩三張を一つに併起來、大家一處に坐在たら、擠著て又親密で又煖
和だらうからと。すると衆人は都な這纔は趣からうと説著て便く起身た。
衆媳婦們は殘席を撤去てしまひ、裡面にすつと炕に順て三張の大桌を併べ、
別に又菓饌を添換了好く擺了た。賈母は、這却は拘レ禮んで、我的分派聽、
爾們就坐たら纔好からうと説著て、薛姨媽、李嬌の二位は正面に上坐、自己是西に向いて坐了、寶琴、
黛玉、湘雲の三人には緊依と左右に坐下させ、さて寶玉に向ひ、爾は爾太太に挨著てお居と説れたの
で、於レ是邢夫人、王夫人の中に寶玉を夾著み、寶釵等姊妹は西の邊に挨次、下去便是、婁氏が賈茵
を帶著、それから尤氏、李執は賈蘭を夾著み、下面、横頭便是賈蓉の妻君が居ると云ふ工合に坐下
た。賈母は、珍哥兒爾は爾兄弟を帶著てあちらに去罷、我は也就睡了からと便説たので、賈珍等は忙
答應了、又都進來ると、賈母は、快去罷、纔と坐好了、又起來ねば要ぬから、進來て用ないで、爾快

【七五】 原文、不是外人、身うちのかたですから。
【七六】 妻の姓。
【七七】 頭は語呂上の助字、只だ横と同じ。

く去つて歇著罷、明日は還た大事が有りますからと道はれた。賈珍は忙答應了して、蓉兒を留下て斟
酒させますから纔是と笑説た。賈母は、正是に他を忘了居たねと笑道た。そこで賈珍は一個是と
答應了轉レ身賈璉等を帶領て、二人は自是歡喜で出て來つ、人に命じて賈琮等各各自を家に送り回去、
便く賈璉と邀了去追レ歡買笑て居た、不レ在二話下。

這裡に賈母は又、我は正ど這些人たちは都な樂を取て居るに、竟も一對
雙全的が居ないかと想著て居たが、就、蓉兒なら、這可レ全と云ふことを
忘了て居た、蓉兒、爾は爾媳婦と一處に坐在て、到也團圓了をせねばいけ
ませんよと笑道れると、丁度媳婦兒か、開戲ませうかと同説つた。すると賈
母は、(七五) 我們娘兒は正ど高興説的、又今から吵起來たいから、那些孩子
們を叫了來て、這の臺の上で兩齣唱せて、(八〇) 他們に瞧瞧て給と笑道れたの
で、其媳婦們は説を聽て答應了出て來、忙の一面では人を大觀園に著去
やくしども、人を傳せさせ、一面では二門から小厮を傳び伺候ると、小厮は忙く戲
房に至て、班中の所レ有、(八二) 大人は一概帶出去、只だ小孩子們はそこに留いてきた。一時梨香院の教習は
(八三) 文官等十二個人を帶了遊廊の角門から出て來ると、婆子們は箱を擡て來ることが及ぬので、賈母
が愛レ聽て居られる様に估量著、(八四) 三五齣かの戲的の彩衣を包了來、幾個かの軟包に抱著、婆子們は文

【七六】 賈蓉のこと。
【七九】 原文、娘兒們、娘は母、兒們は子、賈母、王、邢夫人、寶玉、賈蓉、鳳姐等を含み云ふ。
【八〇】 上の娘兒們に。
【八一】 幼年者中での年長者、おとなに非ず。
【八二】 文官、役者名、前に出づ。
【八三】 幾幕かの。

官等を帶了、賈母に見過に進去て、皆な垂手て站著た。賈母は、八義の大齣は、鬧めて我の頭が疼む位だから、俗們は清雅些が好い、爾瞧瞧 薛姨太太、李親家太太は都是うち内に戲をかかへて有られる人家で、多少好戲を聽過てよく知つて居られるし、又 這些姑娘たちは、都な俗們家の姑娘よりも好い戲を見過、好曲子を聽過て居られませうが、如今這の 小戲子は又是も那有名な頑戲的班子で、小孩子ではあつても、却て大班よりも還強ます、好夕俗們は褒貶了ぬ別に、少を得ず新様兒を弄個、芳官に尋夢を一齣唱はせるに、笙や笛は一概用す、只だ簫だけに用隨著ませうと笑道れた。すると文官は、這は也 使得、我們的戲は、自然姨太太や、親家太太や姑娘們的眼に入ることが能ませんなら、どうか不過の我們が一個口齒を發脱てやる所を聽下されるか、再た一個喉喘の好い所を聽わけ下さい罷了と笑道た。

- 【八四】 薛姨媽、李嬌。
- 【八五】 寶琴、李綺等。
- 【八六】 子供芝居。
- 【八七】 役者の名。
- 【八八】 役者の名。
- 【八九】 顔などくまどつて、舞臺づらなつからず。

賈母、正是は這話と笑道れ、李嬌や薛姨媽は喜的で、好個に伶透孩子だ、爾は也老太太の跟著我們に打趣ますのかと都笑道れた。賈母も又、我們は這原是ほんの隨便的頑意兒にして、世間に出去て買賣にさせないものですから、(竟に)大にわがまま不台時になりますわけだと説著れて、又 葵官に 不用抹臉で、惠明が書を下げの一齣を唱て、這の兩齣の野異を他們に聽個ておくれ。(若し)一點力兒を省でしてくれては、我が可不依からと道れた。文官等は聽了答應と云うて出來て、忙去く扮演て臺

に上て、先是は尋夢で、次是は下書の齣であつたが、衆人鴉雀無聞して居る。そこで薛姨媽が笑ひながら、實在戲と云ふ戲は幾百班と也看過ましたが、從簫管だけで隨他と云ふやうなものを見たことが没と道はれると。賈母が道はれるには、それは也有ます、只是方纔の西樓楚江の情の一支の像なものは、多く 小生が隨つて簫を吹きますが、併し這な大套的にはそれは實在に少いですけども、這も也 主人の講究不講究に在ること、這個をするのは出奇で算ことですよと。湘雲を指して、我が他這麼大的の時節、他の爺爺が一班の小戲を有へて在られたが、偏に一個彈琴的が湊來て、西廂記の聽琴、玉簪記の琴挑、續琵琶記の胡笳十八拍の如なもの、竟と 眞的に成了るやうだつたが、這個は更た如何でせうと問かれた。すると衆人は這は更に難得了御座いますと都道た。賈母は、文官等に吩咐(他們に一套の)燈月圓を吹彈せる様、媳婦に命個られると、媳婦は領命て去つた。當下賈蓉夫妻二人で捧酒斟二一巡ると、鳳姐は因ど賈母が十分高興なのを見て、趨著女先兒が這裡に在るから、他們に鼓を擊かせ、俗們は梅を傳つて來て、一個 春喜上眉稍の令を行ましたら如何で御座いますと笑道た。賈母、這是は好令、正ど 對二時景一だからと、忙く人に一面の 黑漆銅釘花腔令鼓を取つて來てそれを女先兒に與し、又其席上に紅梅を一枝取つて來させ。

- 【九〇】 小は子供、生は立て役。
- 【九一】 原文、成了眞的、身其地に臨んでそこに居るやうに感ぜらるる、うまく唱ふと云ふこと。
- 【九二】 下に云ふ遊戯、追追分明する也。
- 【九三】 時節に對する。
- 【九四】 黒塗りで胴にはちよつと模様などのある小鼓、拍子をと打つ也。

賈母は、若し誰でも紅梅を手裡で居る時、其令鼓が鳴り住んだら、酒を一杯飲み、也一個什麼か説なれば要纒好と笑道れた。鳳姐、依我説て、誰が老祖宗の像に、【五】什麼が要からと云うて、すぐ什麼が有るものではありません、併し我々は這なことは會ませんでも、豈は意思が没ではありません、で依我説では、【六】雅俗も共に賞まして、誰か輸了たものは誰でも好きな笑話兒を説個せました方が不_レ如と思ひますか如何で御座いませう。すると衆人は之を聽了、都な他は素日笑話が善説で、最是他の肚子裡には無限的も新鮮趣談が湧いて來るやうであるので、今如此説を見て、但に在席的諸人が喜歡ばかりでなく、【七】地下に伏侍 小人等も喜歡ばぬものなかつた。那の小丫頭子們は都な忙_レ出_レて去つて姉や妹を找し喚、二奶奶が又笑話兒を説になるから快く來と告訴たので、衆丫頭們は一屋子擠了になる程やつて來た。於是 戲が完樂罷て、賈母は 【八】湯點菓菜を文官等に與吃やう命せられ、便_レ例の鼓を響つやう命せられると、那の女先兒們は皆是慣的なので或緊なつたり或慢なつたり、或如_三殘漏之滴、或如_三迸豆之急、或如_三怒馬之馳、或如_三掣電之疾、其鼓聲が慢く轉ると、梅も亦慢くまはり、鼓聲が急に轉ると、梅も亦急にまはつて、恰恰と賈母の手中に至て、鼓聲が忽と住つたので、

【五】 原文、要什麼有什麼呢、どんなものが出て來ても、いつでもそれに應ずる才能がある。
 【六】 することが上品でも下品でも、共にそれを用ふる。
 【七】 召使は座敷に居ない者とし、座敷以外の室内を地下と云ふなり。
 【八】 召使に老人あり小兒あり。
 【九】 原文、戲完樂罷、芝居が完(なはり)樂(が)くやみ。
 【一〇】 湯は吸物、點は點心、下の菓菜と種種の馳走などを云ふ。

大家が哈哈と一笑だし、賈蓉が忙上來て一杯斟了あげ、衆人は都な、自然老太太が先づ喜了になり、我門も托頼些喜ますと笑道ふと。賈母は、この酒は也罷了ことだが、只是這の笑話は有_三些難_レ説なと笑道れた。すると衆人は都な説ふ様、老太太は鳳丫頭よりも還好で、還た多御出來で御座いますから、一個我門を也笑一笑て賞ました。賈母、竝も什麼新鮮笑話ことはないが、少不得老臉皮厚的して一個説罷と、因て説道、一家に一個の兒子が養了、それに十個の媳婦を娶つたが、【一】那の第十個目の媳婦が殊に聰明伶俐で、心巧嘴乖ものだから、公や婆も最その媳婦を疼り、成日家那の九個の媳婦の不孝順なことを説うて居た。すると這の九個の媳婦は委屈り、便な商議して説ふやう、偕們九個は孝順して居ても、只是那の小蹄子の像に嘴が巧くないもの所以、公婆が老了てだまされ、只だ他を好いとばかり説うて居られるが、這の委屈は誰に訴去て晴らませう。その時大媳婦は主意を有べて、偕們皆な明兒閻王廟に到し香を焼いて、閻王爺に、什麼で那の小蹄子單(一張の)巧嘴に給て、我門には都是に築的に 【二】脱_三生人_一させなされたか問一間に説去ませうと便道したので、衆人は之を聽いて都な歡喜して、這主意は不_レ錯と、第二日便都な閻王廟裡に燒了香に到來て、その九個人は都なその供桌の底下に睡著了で、九個の魂は專と其閻王の駕到を等つたが、左等不_レ來、右等不_レ來、正等的著急居ると、只見 【三】孫行者が 筋斗雲に駕著て來て、其九個の魂を看見、便て其金箍棒を擧して

【一】 此の世に生れ出るとき。
 【二】 西遊記にある孫悟空。
 【三】 卷き雲。

打ちかからうとしたので、九個の魂は唬的して忙と跪下て央求するので、孫行者は、一體又どうした原故だと問かれた、九個の魂は細細的に其わけを告訴すと、孫行者は、脚を一蹶で、嗟嘆了一声で、這個な原故だつたか、幸虧に我に遇見たからよかつたが、就ど閻王の來了のを等著て居ても、他はそんなことは知らないからだめだつたらうよと道はれたので、九個の魂は之を聽いて、大聖發三個慈悲で御座います、我們は就好了からと求説だ。孫行者は笑道やう、這却は難もないことだ、那日、(一〇五) 爾們妯娌們十個が脱生時、可巧我は這裡の閻王の處に到來て、泡尿を撒了在地下たら、爾們那裡、小嬌兒が便を吃了でしまつたのだが、爾們も如今からあんなに似例嘴乖になる積なら、是尿ならいくらでも有るから、再た泡撒ようから、爾們吃だら就了と道うたと。説が畢ると、大家が都笑起來た。鳳姐が、幸而に都な笨嘴笨腮的でああ好的、然うでなかつたら也就猴兒の尿でも吃了のでせうにと笑道た。尤氏、婁氏は李執に向つて、俗們這裡で誰是が猴兒の尿的を吃過たのでせう、(一〇六) 没事人兒な粧するに別と道ふと。薛姨媽は、こんな笑話兒は好歹と云ふより、對景に要んで就く發笑ければよいのですと道はれた。そこで、快く又鼓を撃ち起來た。小丫頭們は只だ鳳姐的笑話を聽きたいと要うて、便く悄悄と、(一〇七) 咳嗽を

【一〇四】孫行者を尊び云ふ。
 【一〇五】相嫁たち。
 【一〇六】十人の内で一番若いから小字を加へてあり、弟よめ。
 【一〇七】原文、別粧没事人兒、おしやべりする人は猿の小便を飲んだのかも知れませんが、そんな事はないと云ふ様な風にするに及びません、暗に鳳姐を猴兒尿を吃みたるものとせる也。
 【一〇八】原文、以咳嗽爲記、こちらで小丫頭們がせきをやるから、それを記に、梅の枝を鳳姐のとこに留めて、鳳姐にはなしさせる。

記にするからと女先兒と説明た。須臾して梅が兩遍程傳つて剛ど鳳姐の手裡に到了と、小丫頭們が故意に咳嗽したので、女先兒が便く鼓を住了た。衆人が齊な喚つて、這(一〇九)にがしてはいけません、可掬二住他了、さあ快く酒を吃了なさつて、好的を一個説下さい、どうか太逗腸子の疼くなる程人を笑的の様にして下さいと道うた。すると鳳姐はやがて酒を吃過でから、想了一想てやがて笑道やう、もう一家子は正月の半ば過ぎなので、合家子よつて元宵の燈を賞し酒など飲んで、眞眞に非常に熱鬧で、祖婆婆、太婆婆、婆婆、媳婦、孫子媳婦、重孫子媳婦、親孫子姪、孫子重孫子、灰孫子などが滴滴搭搭的、又孫子、孫女兒、姪孫女兒、外孫女兒、姨表孫女兒、姑表孫女兒、愛啣眞熱鬧ですと、いふと、衆人が他説著を聽いて、已經笑了て、あの口達者が那一個を(一一〇)編派か知りませんね、といふと、尤氏は、(爾が)我を招すと、我は、可掬二爾的嘴一よと笑道。鳳姐はやがて起身り、人家が費力になつて説ふのを、爾們が混れ我なざるなら、もう説しませんからと笑道た。賈母は、爾説おくれ爾説おくれ、底下怎麼樣なりますと笑道れたので。鳳姐は又想了一想て、底下からみんな團團の一屋子作了、一夜酒など吃了楽しんで散りましたと笑道たので、衆人は他が正言厲色の説をしてしつて便再到別話も無ず、都な(一一三)怔怔と他の往下の説を還等て居たが、只の冰冷無味ので、史湘雲は半日

【一〇九】他、鳳姐をつかまへなさい。
 【一一〇】上の様に澤山の人を擧げて云うてあるから、それから、其中どんなものを話につくり出すかわからぬ。
 【一一一】我を話につかふとあなたに口をきいてやる、併し實際はじやうだんに云ふ也。
 【一一二】怔怔、どうなることかと思つて。

他を看了居ると、鳳姐はやがて再た笑道だす説個、正月の半的を過ぎて、一個人が一個房子大的の爆竹を扛著、城外頭に往つて放去すので、上萬の人が引了てそれを眺にゆくと、一個性急の人がそれを等不得思つて、偷著と香火でそれに點著了たので、嘖味と一聲聽ら、衆人は鬨然と一笑つて都な散了ていつた。するとこの爆竹を扛の人が、怎麼でまだ放しも没のに、みんな就散了のだらうと思議がつたと。湘雲はさし出て、難道して其扛著的本人は没聽見不成のでせうと道ふ。鳳姐は、二四この本人は聾子ですからと道うたので、衆人は説を聽いて、一回想へて居たが、やがて覺はず一齊に失聲と都な大笑起來た。又二五先前の那一個はまだ没説完的であることに想著て、他に、頭裡の那一個はそれから怎麼様ましたか、二七説完に該ので御座いませうねと問うた。鳳姐は桌子を一拍とたたいて、好囉唆な、到了第二日は、是十六日で、年也過了、節也過了、人は忙著く東西などを收けるために、還だ二八鬧不清居るので、そのもの、那裡その底下の事など知道もですかと説道たので、衆人は説を聽いて復又大笑し起來た。すると鳳姐は、二九外頭は已經に四更ですから、(我の依では)老祖宗も也了了てせうから、俗們も也聾子が爆竹を放らした如に散了ませうと笑道たので尤氏等は手帕子

- 【二三】萬にも上(のぼ)る人。
- 【二四】考へ落ちなり、房子大の爆竹を扛ぐといふところより工めるなり、湘雲は釣られたるなり。
- 【二五】すぐ前に祖婆婆、太婆婆など云ひし話。
- 【二六】云ひをばらぬ。
- 【二七】しまひ迄話す。
- 【二八】さわきがをばらぬ。
- 【二九】原文、外頭已經四更了、家の内はこんなに、さわいで居るが、外は夜明け前でさむい。

を嘴に握著、三〇前後都合ながら他を指して、這個東西は、眞に貧嘴が會數からと、しきりと笑的て居た。賈母は、眞眞にこの鳳丫頭は越發嘴貧了りましたねと一面説一面、他が爆竹を提起來が、俗們も烟火でも放了て、酒でも解解ませうよと吩咐道られた。賈蓉は之を聽いて、忙く出て小厮們を帶著來て、院内に屏架を安下、齊と烟火を設吊た。この烟火は皆な各處から進貢した物で、甚く大きくはないが、却極く精緻で、夾著に各色の火炮があつて各色の故事が俱全うて居た。然るに林黛玉は稟氣虚弱、響礮之聲に禁へきれぬので、そこで賈母が他を三一摟在懷裡ると、薛姨媽は便た湘雲を摟著てやられた。すると湘雲は笑ひながら、我は怖くありませんと道ふ。寶釵等は、他さんは専も自己で三三大爆竹を放らすことが愛で居らつしやる位ですもの、還だ這個ことは怖くはありますまいよ。それから王夫人は寶玉を摟在懷中一た。鳳姐は、我は誰も疼的てくれる人は没いのですかと笑道と、尤氏は、我が有呢から、(我が)爾を摟著あげますから害怕んで、(爾は)這會子三三嬌兒撒了、爆竹の放るのを聽見三四蜜蜂兒の尿的の似的なものでも吃て、今兒は又輕狂起來了と笑道と、鳳姐は皆な散つてから俗們的園子裡で放去ませう、我のはあの小厮們が放的よ

- 【三〇】前後都合、からだな前後にゆり笑ふ。
- 【三一】ふところ摟在(いだ)く。
- 【三三】原文、愛自己放大爆竹、屁をひることが好き、おどけ云ふ也。
- 【三四】原文、撒嬌兒了聽見放爆竹……輕狂起來了、ちと陽氣におあそびなさいといふこと。
- 【三五】蜜蜂兒尿的は甘き糖をいふ。極極の小兒のやうにあつかひ云へるなり。

りも還ど好いはずですが、説話てる間に外面で一色一色づつ烟火が放り、又放るうちに許多的【三五】満天星とか、九龍雲に入るとか、平地一聲雷とか、飛天十響の類などが有り、零碎の小爆竹が方罷で、然後又小戲子に【三六】蓮花落を一回と打了て、満臺に錢を撒了て樂を取、それから又湯が上るころ、賈母は夜が長くて餓有些と覺得て、鳳姐は、鴨子肉粥が預備て居ますがと回説る。賈母、我は清淡的が吃べたい。鳳姐、太太們的吃齋の預備に棗兒熬的杭米粥が也有て居ますが。すると賈母、油膩膩ものでなければ、甜的かな。鳳姐、還是杏仁茶が御座いますが、也甜いことは怕か。賈母、到是這個なら罷了と説著たので、已て命て人て殘席を撤去せ、別に各種精緻の小茶を設上せて大家隨便を吃了些、【三七】嗽茶を用過で方て散つた。

【三五】原文、満天星、九龍入雲、平地一聲雷、飛天十響、みな花火の名稱。
【三六】蓮花落は乞丐兒の歌なり。
【三七】食事の終に用ふる茶、うがひ茶。

十七日の早、又寧府に過つて禮を行、伺候して宗祠を掩了、影像を收過て方て回來た。此の日には薛姨媽が年酒を請吃た。十八日便是頼大の家で。十九日便是寧府の頼昇の家。二十日便是林之孝の家。二十一日便是單大良の家。二十二日便是吳新登の家と云ふ工合に、這幾家も打ち續いての宴會に、賈母は去的ことも有ば、去かれぬことも有、高興がつて直等居て衆人散方回的事も也有、也興盡きて半日して一時就來れることもあつて、凡て諸親友の來請や、席に來赴は、拘束だからと怕つて賈母は一概に會かれず、そこには王夫人、邢夫人、鳳姐の三人がうま

く料理、寶玉までも只だ縁家の王子騰の(家)に去く除餘者は亦皆などこにも會かず、賈母の解悶にこちらに留下ますと只説うた。所以到是て家下人家の請で、賈母が自便にすることのできる處へは高興去く恠に去つた。閑言は不提。當下元宵の節は已に過ぎた。端的は下回の分解にて知れ。

第五十五回

親女を辱めて愚妄閉氣を争ひ、幼主を欺いて刁奴險心を蓄ふ

話說それから剛て 年事が忙過と、鳳姐は 小月了ので、一ヶ月の在家何事もできず、天天兩三個の太醫の薬を用でゐた。鳳姐は門を出ること能ぬも、自ら其強壯なのを恃んで、種種と籌畫計算し、什麼事でも想起來と、便く平兒に命じて去つて王夫人に其事を回し執行ふ様なことにし、任人が他に養生する様、諫勧てもそれを聴かなかつた。王夫人は勝臂を失了た一様覺で、一個人では有る多大精神、凡て大事は自己で主張ひ、家中の瑣碎の事は一應都て暫く李執に協理させられたが、李執は尙徳不尙才から、下人に未免違縦了にさせる様なことになる。で、王夫人は探春に李執と合同に裁處させられた。只だ鳳姐は、一ヶ月も將息したら、好了だらう、そのうち仍た他に 交與するやうにと説了た。誰知鳳姐は稟賦血の氣が不足の兼に、年幼くて保養ををこたり、平生争強闘智ので、心力を使ひ虧し、また小月のために、竟著實虧虚下來、一月も後と、復た 下紅之症添了た。他はそれを雖不肯説出來が、衆人は他が面目黄瘦た様子を見て、調養が失だから、他にあまり心を操せてはいかんと云ひ。他自己も也大症なつて、人に 遺笑ればせぬかと

- 【一】 正月元宵の祝宴。
- 【二】 小月は小産なり。
- 【三】 原文、交與他、他即ち鳳姐に仕事をかへし渡す。
- 【四】 下血の。
- 【五】 原文、遺笑於人、人に笑はれる。

怕して、偷空調養せぬと、どうも一時常如り復舊恨不得かと思へたが、誰知一時痊かね、八九ヶ月間も調養到して纔漸漸と起復過來、下紅もそれから也漸漸的止了やうになつたが、此是は後の話である。如今且説目下王夫人は他が如此なので、探春、李執の二人も驟に其引き受けた事を卸めることが難ず、殊に園中に人が多いので、照管が失のは恐と、因て又特に寶釵に請了來、他に各處を小心て托ふことにし、老婆子は用に中たぬ上に、空兒を得んで牌を闘たり酒を吃んだりして、白日裡は睡覺て居て、夜裡になると反て牌など闘つてさわぐことなど我は都く知道的居ます、若し鳳姐頭が 外頭に在られる様になつたら、他們が還と懼怕であらうが、如今他們は又た便なことを取でせうから、好姪子、爾は還是個に妥當的人で、
【一】 爾兄弟姊妹們は又小さく、我は又工夫も沒いから、爾替我辛苦ながら兩天照看照看しておくれ、凡も想へ到かぬ事は我に告訴て來ておくれ、我が話回が沒やうなことがあつては困りますから、老太太が問出來になるのを等たぬ様にしてね。若し又那些人たちが不好やうなことがありまますなら、只管説ひきかせてやつて下さい、それを他們が如若聽きません様なら、爾來か我に告訴て、大事に弄出來ぬ様にして纔好と云はれた。寶釵は聽説て、只得答應了と云うた。時ど 孟春に届つて、黛

- 【六】 空は時間、即ちいそがはしくせず、からだを落ちつけ。
- 【七】 老婆子以下すと王夫人が寶釵に云はるる也。
- 【八】 裡頭、婦人の居る奥の反、病氣が全快して餘處、即ち人の居る處に出る。
- 【九】 老婆子們を云ふ、下の他們も同じ。
- 【一〇】 寶釵に云はれた、我國に云はぬ云ひかた也、爾はよいこだから。
- 【一一】 寶玉始め、榮寧兩府の諸媛たち。
- 【一二】 初春。

玉は又嗽症が犯、湘雲も亦時氣所感して、蘅蕪院に臥病で一天も醫藥の斷えたことがなく、探春と李
 紈とは間隔どうしに相住で、往年と不レ比て二人は近日同レ事、(二三)來往したり、回話の人等が不便
 である故、二人は議定して、毎日早晨皆園の門口の南邊の三間の小花廳に(到去て)會齊て事を辦
 早飯を吃過、それから午錯ころに方て房に回ることにして居た。一體這の(四)三間廳は原と元妃(五)省
 親の時、衆執事や(六)太監の起坐之處に預備た係であつたから、省親之後
 は、(七)也用不レ著、毎日只だ婆子們が上夜して居たが、如今は天が和煖にな
 つたので、室内を十分に修飾せず、只不レ過の略略的鋪陳了して、他二人
 の起坐によいだけのにした。この廳上に輔仁論徳の四字を題著した一匾
 が也有たので、家下では俗に皆が只議事廳兒と呼ひ、如今は他の二人が毎
 日卯正に此に至て、午正に方散、凡一應執事媳婦の來往して話を回ふもの
 が絡釋と絶間がなかつた。衆人は先め李紈が獨りで辦つて居たので、各各
 心中に、李紈は素日は個厚道、多恩無罰的から、自然鳳姐よりも搪塞好と暗に喜んで居ると、後から
 又探春が添了たけれども、也都な不レ過是個年輕の(八)未三出閣一小姐で、素日から和平恬淡なことを想
 著居るから、因レ此べつに在レ意うてゐず、前からみると許多て懈怠了て居た、然るに只の三四日後、
 幾件の事を過レ手て言語は安靜、性情は和順が、漸漸探春の精細處が、仲仲鳳姐に譲らぬことが覺

- 【一】 原文、來往回話人等、人等は召使など、やしきの用事のために其召使が、探春と李紈の間に往復する。
- 【二】 前の小花廳のこと。
- 【三】 此のこと十八回に出づ。
- 【四】 大奥の宮内官、官宦なり。
- 【五】 使はぬ。
- 【六】 まだ關を出て嫁入せぬ。

つて來た。可巧と連日この榮寧兩邸の親でなければ、世交の家の王侯公伯世襲の官員幾十處の方で、
 陞遷したり、黜降されたり、或は(九)婚喪紅白等種種の事があつて、王夫人は(一〇)弔賀迎送、應酬に暇
 がないのに、前邊に更にそれを取扱ふ人がないので、他の二人は一日ちうその廳上に起坐、寶釵は一
 日ちうその上房で監察をし、王夫人が回られてから方散、毎於二夜間一針線
 が暇時、臨レ寢先に、小轎に坐了、園中の上夜人等を帶領て各處を一次と巡
 察ると云ふ如レ此に、他の三人は一理てゆき、鳳姐が當權して居る時から
 みると、到更謹慎了覺、因レ此裡外の下人など、都な暗中は抱レ怨で、剛剛
 ど一個の(一一)巡海夜叉が去了と思つたら、又三個の(一二)鎮山太歳が添て來て、
 率性夜裡でも偷著と酒を飲んで頑的工夫も都で沒了てしまつたと説して居
 た。這の日王夫人は正ど錦郷侯の府に赴席往去れるので、李紈と探春と
 は早已く梳洗して伺候、王夫人が出門て去かれて後、纔て廳上に回至つて
 坐下て、剛と茶を吃まうとして居る時、只見吳新登の家的の(一三)媳婦が進來
 て、趙姨娘の兄弟の趙國基が昨日死了れましたから、昨兒太太に回過まし
 たら、太太は自分は知道から、(一四)姑娘奶奶に叫回來なさいと説はれましたと説畢て、垂レ手と旁に侍つ
 て、再不三言語で居た。彼時回話に來る的不レ少あつて、他の二人が如何辦事するか打聽て居、若し

- 【九】 紅は喜び祝ひごと、白は葬式凶事、故に紅白は吉凶、婚喪にあたる。
- 【一〇】 支那は文章虚禮の邦にて吉凶共に非常に儀式やかましこは只だ形容に非ず。
- 【一一】 龍王の下役、鳳姐を惡口し云ふ。
- 【一二】 上の鳳姐に對し、李紈、寶釵、探春を云ふ、荒神のこ
- 【一三】 即ち吳新登の妻也。
- 【一四】 姑娘は寶釵、探春、奶奶は李紈。

其辦得が妥當なれば、大家安^二個畏懼之心^一だらうし。之に反して少しにても妥でないといふ様な嫌隙でも有つたら、みんな畏服せぬ位のことではなく、一ど^二一門を出ると、許多の笑話を編り出来笑に取れる丈のことであるので。吳新登の家的媳婦は、心中に已と主意をきめ、若是鳳姐の前なら、勤獻して許多と主意説ひ出て、又許多の舊例を查出来て、鳳姐兒の揀擇やうに施行してもらうたであらうが、如今他は李統の老實、探春は是年輕的姑娘なのを藐視、所以で這な一話を説出來て、他の二人が何して主見かそれを試さうとしたのであつた。すると探春は、便く其事を李統に問ふと。李統は想了一想居て、^二前兒か襲人的媽が死了時、賞了た銀子は四十兩だつた聽見説だから、這ども他に四十兩を賞りましたらどうでせうと便道た。吳新登の家的媳婦は之を聽いて是と忙答應個て、對牌を接つて就ぐ走かうとした。探春は、爾且と回來と道うたので、吳新登の家的媳婦は只得^二回來た。すると探春は、^二銀子を支去のはあとにして、爾且と聞きたいが、那の幾年間、老太夫の屋裡的の老嬢娘には、^二家裡的と、^二外頭からきた的とがあつて、家裡的が死了人は、是多少賞り、外頭的が死了人ら、是多少賞ると、ちやんと分別が有個て居るではありませんか、爾且づその兩個のことを我們に説うて聽聽ておくれと一問れて、

- 【五】 大觀園は二門を通りて本邸に通じ居る也。
- 【六】 原文、前兒襲人的媽死了此のこと前に出づ。
- 【七】 原文、別支銀子去、銀子を支(うけとり)に去(ゆく)別(なか)れ。
- 【八】 家生と云うて親の代から其家に居る家の子、郎黨、その家の子より嬢娘、めかけになつた者。
- 【九】 原文、外頭的、そこから雇ひ入れられたもの、上の家裡的の反對。

吳新登の家的は本是忘了居たので、忙く陪笑しながら、這は何麼も大した事では御座いますまい、賞^レ多賞^レ少も、誰も還た^二敢争不^レ成と回説^一。探春、這な話は胡鬧、我の依説は一百兩賞つても到好と思ひますが、それにはちやんと理が按きませんと、爾們から笑話る位は別^レ説が、それでは明兒也^二爾二奶奶に見る面目がありません。すると吳新登の家的、既這麼説、我舊い^二眼を查べて去う、此時は能く記えて得ませんからと道ふ。探春は、爾は辦事は老了辦つて居て、還て記^レ得ひ、到て我を難せに來たのですか、爾は素日も爾二奶奶に回みする時、現に^二眼を查べて去たことがあつたでせうから、若し這個な道理が有つたとしたら、我々が今説ふことは鳳姐は利害は不算、也就て寛厚と算はれませう、それに還た快く我に找來瞧にもこず、そんなことで再た一日遅くして、^二爾們的粗心を説はず、反て我々が主意没像に云ふのでせうと笑道れて、吳新登の家的は滿臉通紅して忙く轉身から出て來つた。衆媳婦們は都な舌頭を伸して驚いた。這裡から又別の事を回。一時すると吳新登の家的は舊眼を取了來た。探春は接過來て看る時、上面に兩個の^二家裡的に、皆是二十四兩、兩個の^二外頭的に、皆是四十兩賞過、外に還た兩個の外頭的に一個は一百兩、一個は六十兩賞過たことが記せてあつて、這の兩筆の底下に、一個是は^二隔省父母の柩を遷つてゆくので其外に六十兩を賞、又一個是は葬地

- 【一〇】 敢て争ふことはできませんまい。
- 【一一】 鳳姐。
- 【一二】 吳新登の家内自分。
- 【一三】 前の【二八】を見よ。
- 【一四】 前の【二九】を見よ。
- 【一五】 支那本土は十八省に別ちあり、省を隔つれば遠方のことわかる也。

を現買ので、外に二十兩を賞つたと皆く其原故を註して有つた。探春は便を李纨に遞與て看せながら、探春は、他に二十四兩銀給ることにして、我門細く看みたいからこの賑はここに留て下ますからと便説。吳新登の家的は答應と云うて去了。すると忽見趙姨娘が進つて来たので、李纨、探春は忙しく坐下を讓めた。趙姨娘は口を開いて便説ふ道、這屋裡の人は都な我を躪下去たやうなことをしなざるがそれは還た罷了としても、姑娘爾は想一想でせう、我の替に出氣してくれても纔是で該と、一面説一面は眼涙鼻涕をながして哭起来た。探春、姨娘這の語は誰のとで御座います、我竟も解ません、誰が姨娘を躪つける様なことをしましたか、説出來、我替に姨娘一出氣から。すると趙姨娘は案外にも、姑娘は現に我を躪してゐますもの、我誰に告訴去ませう。説を聽いて探春は忙しく起來ながら、

【三六】 原文、熬油、辛抱する。
 【三七】 趙は身分低けれど探春の生母故かく云ふ也、吳新登家の趙に向ひ何か言ひし故、かく激せる也。

私は竝て 不レ敢 すると李纨は也忙しく站起来来てしきりと勸めた。趙姨娘は、爾們請坐、能く我の説ふことを聽いておくれ、我は這の屋裡に 油を熬似的に這慶の大年紀熬もし、又爾と、爾の兄弟とも有つたが、這會子はあの襲人にも如はぬやうになつたのですもの、我は還た什麼臉がたたう、爾も也臉面が沒いではありませんか。すると探春、原來這個なのですか、それなら我竝も不レ敢犯レ法違レ理わと笑道一面就く坐了、例の賑を翻與て趙姨娘に瞧せてやり、又他に念んで與聽せてやつて、這是は祖宗が手裡的書になつた舊規規で、人人も都な依著で御座いますから、我が偏に這例を改

了ることは成しません、但に襲人ばかりでは御座いませぬ、將來 環兒が外頭的の女孩兒を收了やうになつても、自然也是襲人と同一様にせられることで、這なことは原から什麼も争レ大争レ小的事ではありませんし、又臉が有つとか、臉が沒れるとか話上では講不レ到、他是などは太太的奴才で、我はは舊規矩の按に辨的、祖宗的恩典や 太太的恩典を領的する文ですが、若し其 辨が不レ勻だと説ふことですな、那是糊塗で 福と云ふものの何たるを知らぬ方ですから、我が抱レ怨去とも只好憑、必ずから太太が房子を人に賞了になりましても、我は什麼も臉が有る處もなく、一文も賞なされんでも、我は也什麼も沒レ臉のこともありません、が我が説では、今太太は不レ在家ですから、姨娘は安靜と神を養けて居らつしやつたら罷御座んせう、何苦もさう心を操になることは御座いますまい、一體太太は満心裡我を疼がつて下さいます、姨娘が 毎何事か生れるで我は幾次も寒心させられますものですから、工合が悪く御座いますが、我が但凡是個男人でも御座いますなら、出得去、我は必早走了、別に一番事業を立てかし、那の時には自づと我一番道理を可以うけれども、偏ても我是個は女孩子で、一句多話も我の勝手のことを説ひました的は沒有、そんなこんなを太太は満心裡都知道ですから、如今は我に重看了て下さつて、(我に)家務を照管させられますのに、還た一件というて好い事も作沒有に、姨娘は到て

【三八】 趙姨娘の子。
 【三九】 王夫人、下の太太同じ。
 【四〇】 前の恩典をさす、それは死んだから、香奠にやつたもの、貰ふ人より云へば幸福のやうなもの。
 【四一】 原文、毎毎生事、寶玉を訊うたことなど前に出づ。

先づ來られて我を踐せられますが、倘し或は太太がこんなことを知りましたら、我は爲難と怖うて、不叫我管ましたら、那纔正經是に我も臉没で御座いませう呢、すれば嬢娘も也た眞に臉が沒れなさるわけで御座いますわと、一面説一面は禁はず涙滾下來ので、趙嬢娘も別話と答對の仕様も沒了、便て説ふ道、太太が爾を疼して下さるのだから、爾は越發か 我們を拉扯拉扯して該なさいや、爾は只顧太太的疼ばかり討うて、我を忘れたさんなや。すると探春は、私怎麼して忘れた居ませう、我に怎麼して拉扯してさせるよりは、這ことは他們的各人に問みになつた方が宜うござんせうが、那一個主子は出力奴才を疼らないのは無く、那一個好人は人に拉扯つて用來著はしませんと道ふと。李執は旁から、只管と、嬢娘どうかね別生氣一ましてね、也 嬢娘をお怨みなさいますな、他は滿心裡から拉扯してあげる心でも、怎麼其事を口裡に説的出來ますまいから。すると探春は、這大嫂子、爾は又た糊塗了ですことね、我が誰を拉扯しませう、又誰家の嬢娘が奴才を拉扯來著せうか、他們的好歹と云ふものは、それは自然爾們が知道になり該から、そんなことは與我は何も相干よと忙道たので。趙嬢娘は氣的で、誰が爾に別人を拉扯して去と叫みましたらうか、

【四三】 原文、作踐、探春が、あたまのあがらぬ様なことをする。

【四四】 私に管(しばい)されられぬ。

【四五】 探春の此の挨拶をよく讀み味へば眞に涙も出る也、泣くといふを怪む勿れ、趙嬢娘は實に厄介な愚母なる也。

【四六】 我們、趙嬢娘は其子買環をこめて云ふ。

【四七】 趙嬢娘に云ふ。

【四八】 探春。

【四九】 原文、誰叫爾拉扯別人去了、趙嬢娘は別にお頼みに參つたわけではありません。

我は爾が家のことを當けなさるなければ、我は也た決して爾に問ませんで御座います、爾が如今現に一と説ひますと是一になり、二と説ひますと是一になるやうなことですから、如今若し爾舅舅が死ななれば、爾が二三十兩多く給になつても、難道も不依爾、太太は是に好太太に、都是して爾們はさう尖酸刻薄なさるのでせう、可憐に太太がいくら恩があつても無處施、嬢娘放心なさい、何も這ど爾的銀子を使不著のですから、明兒爾が出了閣なさいます等は、我は還た爾が額外趙家を照看下さつたことを、想呢、爾は如今長羽毛に沒有さきから、就に其根本を忘れなさつて、ただ高枝に揀つて飛去了れと問道た。探春は、不聽完、已氣的で臉の色を白へ氣を噎せて、抽抽咽咽一面、我的舅舅とは一體誰是でせうか、我的舅舅は年の下に、九省檢點に陸了てここには去了のに、那裡から又舅舅が一個跑出來ましたらう。我は素習も按禮尊敬のに、越發這些な親戚が敬出來たのでせう。しかし既這麼説は、毎日環兒は出て去きます時、什麼で叔父の趙國基さんは又站起来、他に跟いて學に上去ながら、什麼して舅舅的款を拏出もせず、何苦でこんなことを説ひ來れるのでせう。我はが嬢娘養的であると云ふことなどは、誰不知道ことですから、兩三が月もかからんで一

【五〇】 原文、當家、家のことを引き受け取締る、物を頼みたくて來たのではありません、爾が家内の當局者だからまゐつたのです。

【五一】 母方の叔父、茲にては譬へて、若し爾の叔父さんと云ふ、暗に趙嬢娘己の兄に引きくらべてなぞをかける也。

【五二】 原文、額外照看趙家、今規定外に自分に錢をくれと云ふ也。

【五三】 鳥に譬へ云ふ。

【五四】 母のことなり。

【五五】 聞き完らぬうちに、官名。

個の由頭はすぐ尋出來要から、よく徹底子翻騰一陣、それでも人が知道ぬ生怕と、故意にそんなことを表白表白し、誰が誰に臉を沒させると云ふとも不知。しかし幸虧に我は還と物の道理は明白ます積ですが、但凡糊塗で道理を知らぬ的でしたら、早に堪忍袋が急て居ましたらうよ。すると李統は急的只管と勧めたが、趙姨娘は又只管と嘮叨云うて居た。忽ち人か 二奶奶の打發から平姑娘が來了ましたと聽たので、趙姨娘は(説を聽いて)方ち 把口止住。只見て平兒が走進て來ると、趙姨娘は又、我は正と瞧去と要うて居ましたけども、就只 沒得空兒御座いますものですから、爾奶奶に好些問と忙と陪笑讓レ坐して居た。李統は平兒が進て來たのを見て(他に)什麼か作で御座いますかと問と。平兒は、奶奶が説はれますには、趙姨娘の兄弟が死了ましたさうで御座います、恐怕 奶奶と姑娘とは舊例を能く知ありますまいが、若し常例照でしたら、只だ二十四兩になつて居ますけれども、請か如今は姑娘も奶奶もちと裁度著しまして、再に添些してあげたら也使得と笑道た。其時探春は已に涙痕を拭去て忙說道、好好的又什麼添てあげねばなりませんまいか、誰しも 二十四ヶ月も養的することはありますまいし、不然也是那の馬に放兵に出に 主子を背著て逃過命一ると云ふこ

【五七】 口をだまる。
 【五八】 ひまが御座いません。
 【五九】 趙姨娘のこと。
 【六〇】 奶奶は李統、姑娘は探春のこと。
 【六一】 原文、二十四月養的、十月は懷妊のきまり月なり、故に廿四兩はきまつてやる金それ以上はやるのは不服と云ふこと、二十四兩と云ふ故、似寄つた二十四ヶ月と云ふたり。
 【六二】 原文、背著主子逃過命不成、探春等は王夫人なる主人の命を受けて、此の邸の取締

とは成ますまいと考へますに、爾主子は倒也巧く、我にこんな例を開かせて、して他は好人になり、反て太太の 心の疼まぬ錢で、樂得人情を作さるのですか、爾どうか他に告訴して下さい、我は敢て添減も出來ませんから、それはどうとも主意 混出て 他添なり、他恩を施るなり、他の病氣が好了ら出て來て、怎麼も添してと愛ひなさるなら、又怎麼してでも添して去りなさら宜う御座んせう。すると平兒は一來と時に、對半とは已く明白了が、今一番の話を聽いて、越發と意ひ會ることがあり、殊に探春が怒つてゐる色を見て、往日の喜樂之時とは不三相待て、只一邊に垂手て黙侍た。時ど寶釵が也上房の中から來たので、探春等は忙く起身て讓レ坐し、まだ未及二開言に、又(一個)媳婦が進來て何か事を回うとしたが、探春が纔と哭いて居たので、三四個の小丫環が沐盆、巾帕、靴鏡等物を捧つて來たが、此の時丁度探春は矮い板榻の上に盤膝んで坐在るので、那の盆を捧つた丫環は跟前に走至、雙膝を跪下、高と沐盆を捧すと、那の兩個の丫環が也旁に膝を屈つて巾帕並靴鏡脂粉類を捧著て居た。ところが平兒は 待書之類が這裡に在ないので、便く上前て探春のために袖を挽り、鐳を卸つてやり、又一條の大手巾を接過來て、探春の衣襟の面前に掩了やつた。

【六三】 爾主子は鳳姐、平兒は鳳姐附の女中なり。
 【六四】 原文、不心疼的錢、鳳姐自身の心のいたまぬ錢、人のおあして、太太即ち王夫人の心のいたまぬに非ず。
 【六五】 原文、混出主意、よい加減の胡魔化し考で。
 【六六】 原文、他添、他施恩、他は鳳姐をさす。
 【六七】 女中の名。

探春は方て手を伸し盆の中で盥沐て居た。すると那の媳婦は、奶奶や姑娘、家學裡で使ひます環爺と蘭哥兒の一年的公費を支下さいましと同道た。平兒は、爾は什麼をさう忙ぐのでせう、眼睛を睜著てみるがよい、姑娘が臉を洗つて居らつしやるのが看見ませんかね、爾たちは去伺候著もせんで、先くせきたてて説話來とはあんまりだ。二奶奶の跟前でも、爾は這様に眼色没やうなことを來著のですか、姑娘は恩寛な御方でも、我はこれから去つて二奶奶に、爾們(の眼裡に)は都で姑娘を没て居ますと回丁あげたら、爾們は都と虧に吃りますから、其時に我を怨むことはありませんよと只説た。那個媳婦どもは唬つて、我ども粗心了御座いましたからどうか、と忙に陪笑説一面説一面忙退出して去つた。すると探春は臉に勻け一面ら、一面平兒に向ひ(冷笑して)爾は、遅ゴ一步兒と、還だ可笑ことがありました。這一個に事も辨了らるる筈の、吳姐姐までが、(七三)不レ查三清楚にて、我を混に來ましたが、幸虧我們が他に詳しく問きただしたものですから、他は、(七三)竟有レ臉忘了て居ましてすみませんと説ひましたから、我は他に、(七四)主子に事か回すとき、也忘了ましたから、再と查べて去りますと説へますか、私の料著では爾那の主子は、(七五)有耐性兒にて他の去查のを等つてはくれますまいよと説うてやりました。すると平兒は、他

- 【六八】 賈蘭。
- 【六九】 鳳姐。
- 【七〇】 きたが一步兒(ひとあし) おくれました。
- 【七一】 吳新登の家内、前に出づ。
- 【七二】 はつきりしたことをしらす。
- 【七三】 それだけの臉(たいめん)をそはへてゐて。
- 【七四】 鳳姐をさす。
- 【七五】 きつと勘忍して下さるとは請合へぬ、大方まつてくれまい。

は這一次が有ましたら、(七六)包管腿上の筋は兩根に折了てしまつたでせう、姑娘決してあの人等をうつかり御信用なさいますなよ、他們は、(七七)大奶奶は是個菩薩の様なかた、姑娘は又是臍臍小姐と睨著つて、固然そんなことで托懶て來混しようとしたので御座いませうと説著て、又く門外に向ひ、爾們只管撒野しておきなさい、奶奶が大安了なつたら、その時僧們再たよく説しあげますからと説道と。門外の衆媳婦たちは都な笑道、俗語にも、一人罪を作れば、一人はせひ當られると説し、(七八)姑娘爾は何事も最く明白なつた人、我們竝して小姐を欺弊にはいたしませんことはおわかりで御座いませうし、殊に小姐は嬌客で居らつしやるし、若し認真に惱になる様だと我們死も葬身之地が無くなりなすからと笑道うたので、平兒は、爾們がそのことが能く明白居れば就で好了と冷笑しつ。又探春に陪笑しながら、姑娘知道の通り二奶奶は本來事が多う御座いますから、那裡這些に照看が届かぬかも知れせんから、或はちと保三不レ住不レ忽略、俗語にも、旁觀者清と説します位で御座いますもの、この幾年間、姑娘が冷眼と看著になつたら、或添すべきことや減らすべき去處が有りまして、二奶奶ではまだ行き到かぬ所が御座いませうから、姑娘爾が竟り一な添減をなさいましたら宜う御座いませう。さうしますと頭一件太太の事益に有ませうし、第二件は也レ枉も姑娘が我們

- 【七六】 原文、腿上筋早折了兩根、足が折れぬが不思議で御座います、不實な天罰を受けませう。
- 【七七】 王夫人。
- 【七八】 お嬢様、探春を云ふ。
- 【七九】 姑娘は平兒をさし、小姐は探春をさす。
- 【八〇】 上の二奶奶も俱に鳳姐を云ふ。

に待になる情義も違きまます様なわけで御座いますからと、話未三説完に、寶釵、李執は都な、(八二)好丫頭、鳳丫頭が偏と他を疼になるも怨不得で御座います、本來から申しますと、添減するやうな事ではないので御座いますのに、如今爾の一説を聴ひますと、到て能く事情を斟酌斟酌して此の兩件を找出して下さるなど、不辜負に爾の這話ですわ。すると探春は又、我は(八三)没三人煞三性子一肚氣、正ど掣他出氣去と要うて居ましたら、偏と他が備了來這些話で下さるものですか、我も主意が沒了やうになつてしまひましたと笑道一面、方纔の那媳婦を叫來て、環爺と蘭哥兒との家學裡の這一年的銀子は、那一項に用ひますと問うた。那の媳婦は便ち回説、一年學裡に(八四)點心を吃べ、あとの剩的で紙や筆を買ひますには、每位八兩の銀子が使用します。探春、凡て爺們の使用は、都是各其屋裡から月錢を領了てあります、環哥兒は是姨娘屋裡から二兩領し、寶玉さんは是老太太屋裡から襲人が二兩領り、蘭哥兒は大奶奶屋裡から領りなるので、怎麼で又學裡で每人に多這な八兩もかかりますのでせう、原來學に上去是爲這の八兩を御やりになつたのですなら、今兒從起、(八五)這一項は蠲了ませう、平兒おうちに回去でしたら、這の一條は(八六)務必免了ますからと、我的の話しましたことを、爾奶奶に告訴げて下さい。すると平兒は、早就免めるやうに該ませう。舊年に奶奶が原とから免めようと説る御積で御座いましたけれども、年下

- 【八二】 平兒に云ふ。
- 【八三】 人に性子(いかり)を煞(こら)へきるることなからしむ。
- 【八四】 點心、小食。
- 【八五】 その一項、八兩別途にやること。
- 【八六】 俗語慣用、ぜひ、必ず。

で忙しう御座いましたから、就了居らつしやいましたので御座いますよと笑道たので、那個媳婦たちは只得答應著に去了しまつた。就て大觀園中の媳婦們は飯盒を捧了來、待書、素雲の二人はまた早已く一張の小飯桌を擡過て來ると、平兒は也忙著菜を上した。すると探春は、爾(八七)話が説完了ましたら、かまはず去罷、(八八)在這裡忙什麼。平兒、我は原沒事でしたから、二奶奶がここに我を打發了になりましたのは、一則是説話に、二則には這裡の人が不三方便だらうから、我に妹妹們的帮著をして、又奶奶姑娘に伏侍します様にとのとで御座います。探春は因た寶姑娘には怎麼して飯を端來であげて一處に吃るやうにしないのですと問うた。丫環們は説を聴いて、忙く簷外に出至て、媳婦們に、寶姑娘も如今廳上で一處に、飯を吃りになりますから、他們に飯を送了て來るやう去て説ふ様命つけた。探春は又説を聴いて、便ち高聲で、爾們混と人を支使は別、(八九)那は都是大事なことを辦管家娘子們なのに、爾們は飯や茶を要するやうなことに支使うとする、(九〇)連一個高低都都不知道、平兒爾這裡に站著什麼も作ずに居なさるのなら、すみませんが、爾すぐ叫呼去て下さい。すると平兒は忙く一聲と答應了て出て來ると、那些媳婦們は悄悄と拉き住めて笑道、那裡も姑娘が叫に去に用ひることはありません、我は已經に人を叫に去りましたから、と一面説一面手帕で石礎上を擲了一擲て、姑娘は半天站了了了でしたらう、這の太陽地裡に且歌歌なさいま

- 【八七】 原文、説完了話、云ふことかすみましたら。
- 【八八】 いそがしいでせうに、何もここに在ることはありませんまい。
- 【八九】 一つの高低(よしあし)も、まるで知らぬ。

しと説ふので、平兒は便く坐下た。又茶房裡の兩個の婆子が坐褥を拏了個來て、それを鋪下やりながら、石頭は冷ます、這は極く乾淨で御座いますから、姑娘將就か坐一坐兒なさいと説ふ。平兒は多謝と陪笑して笑道た。又一個が一碗の精緻の新茶を捧了出來て、也悄悄と、這は我們では常用できません茶で御座いますが、姑娘們に伺候たう御座いますから、姑娘どうか且潤一潤喉ましと笑説ので。平兒は忙しく欠身てそれを接了ながら、衆媳婦們に指つて、爾們は太鬧的不儻了ではないかな、他は是個姑娘家だから肯て發威動怒ぬのは、這は彼の尊重して居られるのです、爾們は就に他を藐視たり欺負にしたやうな仕振があつたから、果然招三動了大怒、他は不過の(一個)粗糲ひとと説うて就完と云うて居たが、爾們は就現に吃不了の虧て居るじやありませんか。他が嬌兒を撒個ても、太太も也得他一二分を譲りになり、二奶奶でも也敢怎麼ともされない位にして居らつしやるに、爾們は就這麼著をするとはひどいではありませんかと説道た。衆人は都是趙姨娘の鬧的で御座いますと道うた。すると平兒は又悄悄に道ふやうに罷了、好奶奶們、牆が倒れるは衆人が推すからと云ふことがあります、那の趙姨娘は原から到三不到兩から、何事か有了としたら、都他の頼でもありませんが、爾們が素日から

- 【八九】 身をそらす、敬禮の様子。
- 【九〇】 太はあんまり、鬧は騒動、不儻はあたり前とちがひ、あんまり騒動しすぎる。
- 【九一】 他、探春の怒を招き起させた。
- 【九二】 吃不了はあひきれぬ、下を受け云ふ、虧はひどい目、たへきれぬ程な目に逢ふ。
- 【九三】 かならず。
- 【九四】 此の事すぐ前に出づ。
- 【九五】 足らぬくせに出しやばる。

眼裡人と沒、心裡利害ことなど、我がこの幾年間に難道で知道すに居ませう、二奶奶でも若是一點兒でも差がありましたら、早く爾們や這些奶奶に治倒了ましたらう、又饒這麼著にして居ても、一點の空兒でも得らうものなら、還ぐ他を難一難しようとして、是迄も沒落了口聲ことは好幾次あつたと思ひます。さう云はれると、衆人は、如何敢て出來ませう。平兒、他は利害から、爾們は都な怕他して居ませうが、それは他心裡も也、爾們を不算不怖られることは、惟だ我が知道てゐる丈で、前兒か我們が還た這裡ことを議論したことがあります、更に依頭順尾と事がゆかず、必と兩場氣が生がりますと。又那の三姑娘は、是姨娘的姑娘だからと想うて粗略にませうが、爾們都是看見了です。御覽なさい二奶奶が、這些大姑子や小姑子のある中で、只單だ他だけを懼つて居られる位なのに、爾們は這會子他を不放在眼裡にゐますと、正説著と、只見秋紋が走來たので衆人は忙著問好、又、姑娘也且歇歇みなさい、裡頭では擺飯ですから、飯桌子が撤下來から、再た回話去たら宜う御座んせうと説うた。秋紋は、我は爾們とは比不得ますから、我は那裡等著と説著て便く廳に上去としたら、平兒が快回來と叫うたの

- 【九六】 こんな手落ちなくして居ても。
- 【九七】 口聲(わるくち)を落(うく)ることなからんや、悪口を受けた。
- 【九八】 原文、不算不怖爾們、お前達を怕、こぼが)られぬではない、お前達を怕はがつて居られる。不算、思はぬ、怕れぬとは思はぬ、ちと怕がられる。
- 【九九】 妾腹に生れた御嬢。
- 【一〇〇】 眼中におかぬ。
- 【一〇一】 秋紋に云ふ、秋紋に限らず、襲人にも、平兒にも、女中ではあつても上向き用のする様な者には皆が姑娘と云ふ也。

を聴いて、秋紋は回頭つて見ると平兒であつたので、一回身て平兒の褥上に坐しながら、爾は又這裡で什麼の (二〇二) 外圍的防護を充るのですと笑道た。平兒は反つて悄と、什麼を回しに來ましたと問道の、秋紋は、寶玉さまの月錢と、我們的月錢は、多早晚纔領かを問一問とおもひます。すると平兒、這は什麼も大事なことではありませんから、爾は快ぐ回去て、憑ひ什麼な事があつても、今兒は都て其事は回し別、若し一件回したら、管と一件は駁れ、一百件回したら、又管と一百件は駁れますからと、我的が話したと、襲人さんに告訴して下さい。秋紋はそれを聴いて、是は又什麼した爲でせうと問道た。平兒は衆媳婦と都忙く他に其原故を告訴し、又今正と幾處の利害事を找べ、體面的人に來んで例を開いて法子を作て衆人を鎮壓する與め (二〇四) 榜樣を作ようとして居た處に、何苦で爾們は先に這の釘子上に礮在に來るのでせう、爾が這一去このことを説了でござんなさい、(二〇五) 他們が若し爾們を (二〇六) 作二一二件榜樣やうでは、又老太太の嘴に碍著やうなことになる、それかと云うて爾們のことを (二〇七) 不作二一二件榜樣たら、人家は又 (二〇八) 一個に偏り、一個に向るのは、老太太や太太の威勢を仗著するので、就ち他を怕て (二〇九) 不致敢動と、我們的軟的を鼻子頭にすると説ひませう。爾聽聽下さ

【二〇二】 擊退係。

【二〇三】 探春がそれはいかんと拒絶したこと、すぐ前に出づ。

【二〇四】 かた、しめし、だれか又た小使を下さいと頼に來た者を拒絶して、拒絶の例、かたを示す。

【二〇五】 探春、李紈。

【二〇六】 人に示しとして斷る。

【二〇七】 其たのみを聴て、榜樣(しめし)なせぬ。

【二〇八】 原文、偏一個、向一個、寶玉一人によいやうに偏頗片ひいきをする。

【二〇九】 敢てどうすることもせぬ。

い罷、うちの二奶奶的して居られた事さへ、衆人の口聲を押的任んが爲に他は還た兩件までも駁めさせようと要たのですよ。すると秋紋はそれを聴いて舌を伸ながら、幸に平姐姐に這裡で在ましたから、一鼻子灰を燥沒宜う御座んした、我趣早他們に知會去しませうと説著て便く起身て走了と、接著寶釵の飯が至たので、平兒は快進來伏侍などした、那の時は趙姨娘は已に去つてしまひ、三人は板床の上で、寶釵は南面に、探春は西面に、李紈は東面で吃飯するに、衆媳婦は皆な廊下に靜候、裡頭には他們的緊跟常侍の丫環だけが伺候、別人は一概に敢撞に入ることは出来なかつた。その時這些媳婦們は都悄悄的議論ながら、都に沒良心的主意を安著別やうにして、大家省事をしようじやありませんか、吳大娘は纔も沒意思に討了なかつたが、俗們でも又是什麼も有臉でもありませんからと説うて、他們は一邊で悄悄と議論、飯が完んだら事を回ふつもりで居たが、裡面は鴉雀無聞、竝ぞ碗箸之聲も聞なかつた。一時只見一個の丫環が簾籠を高掲ると、又兩個で桌子を擡き出し、(二二三) 茶の房からは三個の丫頭が三沐盆の水を捧つて來て、飯桌が已出たのを見て、三人は便く進つて去了、一回すると又沐盆や嗽盂を捧て來た。方て待書、素雲、鶯兒の三個が、每人茶盤に (二二三) 三盞碗の茶を捧了て進つて去つたので、一時他の三人が出て來るのを等つて、待書は小丫頭們に、好生伺候著おあげ、我們も飯を吃了來、爾們と換つてやりませうから、又 (二二三) 偷坐著去別

【二〇〇】 手のかからぬ。

【二〇一】 茶を煎る處。

【二二三】 盞碗、ふた茶碗、小皿を上へのせた茶碗。

【二三】 なまけて用をせずにかける。

やうに可おいでと命けると、衆媳婦們は方て慢慢的に一個一個的安分事を回ひ、敢して先前の如に輕慢疎忽はしないやうになつたので、探春は氣が方漸と平まつて、因て平兒に向ひ、我は一件大事なこと

を僮奶と能く商議したいことを、如今可巧想へ起來ましたから、僮は快いで飯を吃了て來て下さい。寶姑娘も此に在るから、僮們四個人で商議了まして、僮奶奶に行りませうか、止しませうかを問ねしたう御座いますから。すると平兒は答應して回去た。鳳姐は因く、何で這一日も去て居ましたと問ねた。平兒は方纔の原故を細細く他に説與聽了た。鳳姐は、好、好個な三姑娘は、我が説うた不錯でせう、が只だ惜しいことには、太太の肚子裡から脱生沒で、ほんとに他は命薄です。それを聽いて平兒は、奶奶は也(二六)糊塗説を説ます、他は是太太から養的ではありませんが、それを難道で誰敢が(二七)他を小看して、(二八)別のと一様に看了ぬ様なことが成ませうと笑道と。鳳姐は嘆息しながら、僮が那裡してその事情が知道ませう、然は一樣のやうに説うても、女兒は却も男人とは比不得ます、殊に將來攀親の事になると、如今は一種輕狂人があつて、庶出は不要だからと云うて、先づ姑娘は是正出ですか是庶出ですかと打聽たがりますが、殊不知(二九)庶出説別も、

【二四】只だ好個と云はんとしてどもり、三度、好と云ひし也。
 【二五】原文、我説他不錯、我が探春さんは、えらいと説うたが、其通り錯はしますまい。
 【二六】つまりぬこと。
 【二七】原文、小看他、探春さんを馬鹿にさせう、しませぬ。
 【二八】原文、不與別的一様看了不成、外の人より輕蔑する様なことはしますまい。
 【二九】原文、別説庶出、庶出と云ふとはありません、庶出と云うてけなすことばありません、此の殊不知より還強呢迄の廿四字は文法上の斜挿で、それ丈なくとも、上下の文意は通ずる也。

我們的丫頭們は、人家の小姐と云ふ者よりも還と強つて居る位だからね、しかし將來には那個沒二造化で庶腹の女を挑めて妻とした者が事を悞つた不通知か、也は那個造化有て庶腹の女を挑らなかつた者が正の事を得了去ものか不通知であらうよと説著て、又平兒に向ひ、僮が知道る通り、我は這の幾年と云ふもの、多少省儉法子を生了る者だから、一家子は大約背地裡で我を恨まぬ的は沒いやうな始末になり、然を看破ぬではないが、我も如今となつては、(三〇)騎上老虎の勢で、奈も仕方は無く、一時寛放ることとは出來ませんし。又二則には此頃家裡は出去的が多くて、進來的が少いから、凡そ大小事でも、仍是老祖宗の手裡的規矩に照著みても、一年中に進的る産業は先時に及ばず、それかと云うて、多く省儉すれば、外人の笑話がうるさく、老太太や太太が委屈になり、家下の人が刻薄と抱怨が趣早省儉の計を料理ないと、再幾年のうちには家産が都な賠盡しますからね。すると平兒は可不是ますよ、將來還だ(三一)三四位の姑娘や、兩三個の小爺や、一位老祖宗のちの事が未だ完みませんから這幾件大事で御座います呢。鳳姐、我も也這裡は慮到して居たが、到は也勾了やうだ、寶玉と林妹妹の(他兩個の)一娶一嫁は(三二)官中の錢を使不着でも可以やうです、それは老太太に自と梯己が有りますから、それを拏出來ただきませうし、二姑娘は大老爺那邊から出して

【三〇】騎虎の勢、老虎(とら)に騎上(のつ)た、のりかかつた舟。
 【三一】三四位姑娘(は嫁入りし)二三個小爺(は妻を迎へ)一位老祖宗(はいつか御とむらひせればならず)、支那にては婚姻、葬式は非常に金がかかると也。
 【三二】賈邸の會計、賈邸の人人の費用は普通邸費なり。

ただから算ひませんが、剩了兩三個のかたは滿破著にしまして、每人に一萬位の銀子は、(二三)花上
ませう、それから環哥兒の親娶は限たもので、三千銀子も花上になれば、
那裡も(二四)一振子などを省する程のことも不_レ拘て、也就了御座んせう、
若し老太太に萬一の事が出来ましても、不過の零星雜項使費も、也滿破し
て三五千兩の銀子で、一應都是全的了から、如今から更に省儉些してゆき
ましたら、陸續も也就了御座いませう。しかし只だ怕することは如今平
空に再た一兩件事か生出来たら、可就では(二五)了不得了から、俗們且別後
事を慮へておかねばなりません。爾も且飯でも吃了まして、快く他が什
麼商議になりますか聽いてきてくれ、這正我的の機會ですけれども、愁
なことは我正に膀臂が沒個ことで、寶玉さんが有個つても、他は又是這裡
頭の貨でもなく、總ひ他を收伏了だにしても、我們的用には中ませんし、
(二六)大奶奶は是個佛爺で、也不_レ中_レ用で、二姑娘は更に不_レ中_レ用、況且是
(二七)這屋裡的人でもなく、四姑娘はまだ小呢、(賈)蘭小子は更に小く、小
環兒は更是個で(二八)燎毛的小凍猫子みた様に、只だ熱竈火炕にばかり等つ
て居るのは、(二九)讓二他鑽去罷。眞眞に一個の娘の肚子裡から這樣な天懸地隔の(三〇)兩個が跳出來ると

【二三】使ふ、費やす。
【二四】ぶらし様の櫛、婦人の道具、此は婦人の云ひさうな詞。
【二五】上の了は虚字で、結末をつけること、了不得はこまる、下の了は助字で、物のすんだことを言ひ、古文の矣の字にあたる。
【二六】王夫人。
【二七】原文、不是這屋裡的人、榮國府のかたでない、寧國府のかた。
【二八】さむがり火のはたにはかり居て毛をやくやうな猫、ただ何も知らぬ。
【二九】それがどこにでも、もぐりこむのはほつておく、まだ何とも仕様がな子供ですもの。
【三〇】探春と賈環。

は、我は這裡を想到へると、就も天道様に不伏です。再者に又た林丫頭と寶姑娘の他兩個は、偏も又
都是も親戚の間柄で、到く好ですが、俗們家の務事を管するわけには好ず、況して一個はは(三一)美人燈
兒みた様なもので、風でも吹吹たら就ぐ壞了さうだし。一個は仲伸掣了了主意居て、己の事に干係
ないことは、何事でもまるで口を張かず、一問頭を擡つて(三二)不_レ知な
で、也十分に去問_レ他_レことも難ず、さうなると只だ三姑娘だけに剩了ます
が、心裡も嘴裡も都也來得て、又是も俗們家の(三三)正人で、太太も他
を疼がつてはゐられるが、面上は淡淡的のやうでも、それは那(三四)老東西
の趙姨娘があんまり鬧的なものだからで、其心裡では却是て寶玉さんと一
様に疼がられて、まるで環兒とは比_レ不得、實在に環兒は疼がりたうて
も(三五)令二人難_レ疼から、我的の性子依りにすると要たら、早く擡出_レ去了
たいくらゐだ、如今他も既這個な主意をして居らつしやるなら、正該
他と協同し、大家に膀臂て作個たら、我也も不_レ孤不_レ獨から。按_二正理_一
天理良心上論ふと、俗們に他這個一個人でも幫著ていただけば、俗們も也心が省些、太太的事にも也
有益になるが、若し按_二私心_一藏_レ奸上論すれば、我也(三六)太と毒を行し、也て抽_レ頭退歩、傍から回
頭と看_レ看_レのだね、若しみんなを窮追苦刻をしたならば、人の恨も極了て、暗地裡笑裡藏_レ刀かわか

【三一】美人を畫である燈籠、みかけは奇麗でも、こぼれ易い。
【三二】初の通り三度目もうちあはぬ、いつも干係せぬ。
【三三】寶釵でも黛玉でも、親戚ながら、賈邸の人でないに、探春は賈邸の娘。
【三四】ふるだぬき。
【三五】人をして疼り難からしむ。
【三六】原文、太行毒了、ちよつと氣附かぬ様に、自己の利を獨ること。

りません、僭們は兩人で纒た四個の眼睛と兩個の心と丈だもの、一時不防して居るまに、弄壞了てしまひませう、で緊溜の中に、他がちやんと出頭く一料理をしておかれたら、衆人は往日の僭們恨は暫く解れてしまひませう。それから還た一件、我は恐怖、僭心裡挽不過來、と雖知僭極明白が、如今僭に囑咐ませう、他は姑娘家であつても、他心裡は却事、事明白て居ても、不過是言語に謹慎ばかりで、他又た我どもより知書識字で、更に一層利害かたで、如今俗語に、賊を擒にするには、先づ王を擒にせよと云ふことがあるが、他が如今開端て法を作てんと要ては、一定と先づ我を開端にしようとなさるでせう、倘或我が我的回に駁されても、僭はそれを分辯はないで、僭只越恭敬で居て、越駁的説る程是て纒好御座んすと説うて居て、千萬か我が没臉怕などと想著ないでおくれ、他と一強などしては、就不好よと。平兒は其説を聴きも完へぬに、便く笑ひながら、僭は太り、把人看糊塗ますわ、そんなことは、我纒已經に行在、先了りましたに、這會子僭は反つて我に囑咐になりましたと道ふと。鳳姐、我是は僭は心裡眼裡只だ我の云ふことばかりを知つて、一概で別の人は沒有ものの様に恐怖かしらと、囑咐しなければならぬわけになつたのさ。しかし既已に行在、先居たとすれば、それは更に我よりは明白了が、僭は

【二七】原文、僭心裡挽不過來、雖知僭極明白、僭の心をひき直させ、信用させることは出来ず、その通りにならぬことは明白(よく)知て居ますけれども。
 【二八】支那にて、盜賊のかしらなどは、早速何王と稱したる者也。
 【二九】人を見くびる。
 【三〇】原文、不得囑咐、たのまればならぬわけさ。

又急了、僭兒だ我兒だなどと滿嘴裡起來のかね。すると平兒は笑道やう、我が僭と説ひました、偏が、僭の依りませんなら、這ぞ不是嘴巴子にて、再打頓一頓になりまして、難道も這の臉上は還だ、是迄噂過たことがないからと云つて、打てぬと云ふことは成まい。鳳姐、僭這小蹄子は我の、多少過子を翻らうとするのかしらんが、まあ纒罷、這個様兒我は病的して居るに、還にやつて来て我を瀉すのかね、まあ過に來て坐下、横豎人も來ないから、僭們は一處に飯でも吃たが正經うと説著と、豊兒等三四個の小丫頭子が進つて来て小炕桌を放すと、鳳姐は只だ燕窩粥と、兩碟子の精緻小菜と毎日【二四】原文、偏説僭、僭と説ひましたことに偏(かきつ)て、偏字意強し。
【二五】嘴巴子は口と耳の間で、人をなぐるに尤も都合よい處、主人の氣にくはぬ様なことをするのには、なぐるべきことではありませんか。
【二六】燕窩は支那第一の料理、それで粥を煮たもの。
【二七】上の分例も同じ、いつも
 の分例を吃べて暫已減去せた。豊兒は平兒の四様の分例菜を端ぎ飯を盛つて桌上に至出のを、平兒は一膝を炕の沿之上に屈け、半身は猶は炕の下に立ち、鳳姐に陪著して飯を吃べ、鹽嗽が伏侍畢と、豊兒に話か囑咐了おいて、方て探春の處を往して來て只見と院中の人には已に散了てゐた、端的は下回に分解を見られよ。

第五十六回

敏探春利を興して宿弊を除き、識寶釵小惠大體を全うす

話說平兒は鳳姐と陪著に飯を吃了、盪嗽が伏侍畢から、探春の處を往して来て、只見と院中は寂靜して、只だ丫環や婆子が窓の外に聽候て居た。そこで平兒が廳中に進入て見ると、他の姉妹たち三人が正とそこで家務を議論しながら、年内に頼大の家から吃酒の來請があつたことや、他家の花園中の事などを説いて居たが、他が來たので、探春は便く他に脚踏の上に坐了させ、因て説ふ道、我が想的た事は別の爲ではありません、我們は一月二月の月銀を有ひます(外)に、丫頭們は又(另)に月錢をやらねばなりません。然るに前兒か人が回つたことがありました通り、我們が一月に所用頭油や脂粉代は、毎人に二兩でありますが、這は又纔剛の學裡の的と同一様重疊して居ます、事は小さいことですが、限りある錢ですることですから、看起來もそれは妥當ないかと想ひますが、爾奶奶は怎麼して這個を想到せんでしたらうか。すると平兒が笑道には、這には原故が有個ますことと御座います、姑娘們的所用の這些東西は自然それは分例が御座います、毎月買辦が買ひ入れまして、女人們に各房他們に交與して收管せておきますのは、姑娘們的御使用に預備して

【一】鳳姐がうがひをするとき平兒が、うがひ桶や水など持ち出しやる也。
【二】寒中になればコタツ式のことをなすものあり。

就罷了不過で、一個も我們の中に天天各人が錢をもつて、人の找に胭脂や粉的を買ひにゆくものは沒有、所以外の買辦が總て領去、月を按めて其品を人に使せて、房按で我們に交與す様になつて居ました。姑娘們的の毎月のこの二兩は、原と這些東西をむかに買ふが爲ではありません、原是は例へば姑娘們が偶然一時幾個か錢使などが要でも、一時當家の奶奶太太が或不在家か、或は閑がないので、這是で姑娘が委屈に受つては恐怕からと、人を探ねて錢を受取る手間を省得る爲的にしたので、可ぞ知這個錢は這個爲に纔有的で御座いませうが、如今我が冷眼と看著みますに、各房的の姑娘や、各門的の姉妹がたも、都是現に錢を拏つて這些東西を買ひなされる的が一半有了の様で御座いますが、我が疑惑して居ますのは、あの買辦が脱了空たり又は日子に遅れないと云ふことなどではありません、就是正經貨を買はず、使不得的東西を弄些搪塞すためだらうかと想へます。
【三】買辦に、奥向と外向との二種あり、外頭は自身店屋にゆきて買ひ出す也。
【四】家をうけもつ。

せんが、只是日子遅些、催急いりよりの時、那裡で弄了來か知れぬ那の平常東西は、使不得ので、依然這の二兩の銀子で、別に別人的奶媽か、或は其兄弟哥哥兒子に、現金買得に買了來、纔使得居ます。若し官中的人から買去使了時は、照舊是那樣にいけないのは、舖子裡で壞了的不必要でも、他們都弄了來て、單だ預備いて我們に給れるのですか、他們什麼法子の不知。平兒は之を聽いて、買

辦が買的是、是那樣的にいけないのですが、（五） 他が好い的を買了來ては、
 交しませう。又他が壞心を使って、この外辦の職を奪げんと説ひませう、所
 以で他（六） 們も、寧ろ主子に得罪しても、外頭辦事の人に不（七） 肯得罪了
 と、只得如此のです、姑娘們が只得奶媽們を使（八） になる分は、他（九） 們は、
 也敢て閑話を説しますまい。すると探春、此だから我心裡どうも不
 自在（一〇） 一わ、兩起も錢を費つて、東西は又一半は白擲てしまふやうなことで
 すもの、算起來費三兩遮子錢、買辦（一一） 這一分子を免了た方がよいでせ
 う、此是一件事。第二件には、年裡頭の祝に頼大さんの家に請ばれて
 往り去したとき、爾も也去的ましたらう、他那の小園子は俗們的這個とは
 如何に爾看ですか。平兒、還俗們的這一半大も沒有で樹木花草も少（一二） 了
 で御座いますね。探春、我は他們家の女兒と閑話兒説て、那麼個園子から、
 他（一三） 們的（一四） 戴的る花兒や、吃的筭、菓、魚蝦等の除外に一年中そこを
 包了る人が有去て、年終には二百兩ばかりの銀子が剩て收入さうですが、
 那のこことを聴きました日から、我は一個の破荷葉、一根の枯草根子でも都
 是錢に値ると云ふことを纔知りました。すると寶釵、それこそ眞眞も膏

- 【五】 主人に云ふ、下の他同じ、
- 【六】 前に外頭とあると同じ、
- 【七】 うちとけた内證ばなし。
- 【八】 心持ち面白くありません
- 【九】 二三度分の錢をむだ使ひ
 することを勘定してみると、
 上旬の重複なり。
- 【一〇】 買辦一人前の給料など、
 つまり買辦と云ふことにな
 る。
- 【一一】 年頭、新年宴會。
- 【一二】 簪として頭にさす花。
- 【一三】 筭や菓物などはそこに植
 てあり、池より魚蝦をとる也。

梁統袴之談とでも云ひませうか。爾們は原是千金の家の小姐で、這な事を知じないのはあたり前
 で、爾們は但だ本を念過り字を識つたりしなすつばかりですもの、しかし竟（一） 朱夫子の人は不
 自（二） 棄との文一篇を見ません不成か。探春、也看過ましたけれども、是は勉人自勵ための虚比
 浮詞で、那裡でそんなことが眞に有ることせう。寶釵、朱子の那の句句は都（三） 有的で、都（四） 虚比浮
 詞がありませう。爾は纔と兩天的ばかり時事を辦了、就く利慾に心を薰られて、宋夫子を都（五） 虚と看
 てしまつたのですか。すると探春は、爾は這樣な一個の通人（六） で、姫子の書を看見（七） ならぬので
 すか。當日姫子は曾て、祿利の場に登り、運籌の境に處する者、堯舜の詞を
 竊み、孔孟の道に背くと云ひましたと笑道た。寶釵は、底下の一句はどう
 ですと笑道た。探春は、如今只だ章を斷ちて義を取るのですから、底下の
 一句を念出來、我自己で我自己を罵ると云ふ様なとは成ますまい。すると
 寶釵は、天下に用ひられぬ東西は沒有、既に用ひらるれば、それは便に錢に値ます、難爲爾是個聰明
 の人ですけれども、這些な正事上は竟にまだ經歷過（八） がありなさらぬでせうか、如今が可（九） 惜遅了些。
 之を聴いて李統は、爾們は人家を叫了來て、正事を説すに、且だ學問對講の様な（一〇） となさるのね。す
 ると寶釵は、學問中なのが便是が正事（一一） して、此刻（一二） な小事上（一三） に學問を應用すると、那の小事が越發
 一層高尚な趣味を加へる様になるもので御座いますが、學問で提醒著（一四） ませんと、便都（一五） が市俗に流入去了

- 【一】 竟
- 【二】 勉人自勵
- 【三】 都
- 【四】 都
- 【五】 都
- 【六】 通人
- 【七】 看見
- 【八】 經歷過
- 【九】 可
- 【一〇】 学問對講
- 【一一】 正事
- 【一二】 此刻
- 【一三】 小事上
- 【一四】 提醒著
- 【一五】 便都

からなど、三人は都是に取笑談と一回説笑了て、仍た正事の談などした。それから探春は又接著説ふ道、偕們的園子は他們よりも一半多い算ですから、其一倍と加算しましたら、一年には四百銀子の利息が有りますが、若此時こんなこととして出脱て銀子を生發ます様なことは、(自然)それは小器のすること、偕們這樣人家的事ではありませんから、兩個も一定の人に派出來ませうか、其許多の値錢之物を、一味で人の任踐にさせるのは、天物を暴殄する似乎なものですから、此の園子の裡の所有老媽媽の中から、幾個か本分老成として能く園圍の事などを知つてる的を揀り出し、他們に派準て收拾料理せ、必ずしも他們から交租納税をせず、只だ他們は一年中にいくらか 孝敬ますやうに問めておきましたら、一則園子に專管の人が有つて花木を修理するので、一年は一年似好くなりませうから、臨時に忙亂ことはありせんし、二則

【六】冥加金を差し上ること。

には、白に東西を辜負了て、踐にすることもなくなり、三則には老媽媽們も也此の借に小補つて、是迄の様に園中で枉だ辛苦ばかりする様なこともなくなりませうし、四則には亦花兒匠や山子匠や竝た打掃人等の工費錢を省了些ませうから、此の有餘で以て外の不足を補ひますなら、決して不可はありませうまい。其時寶釵は正と地下に在つて壁上の字畫などを見て居たが、如此説を聽いて、便く點頭ながら、善哉、三年の内は饑饉はありますまいと笑道た。李紈は、好な主意、這の一行は太太必と喜歡になりませう、それは錢を省きます事などは小さいことで御座いますが、第一人を省いて反つて打

掃が出来たり、専ら其職を司る者が出來、又他們は其物を賣つて錢がはひる様になりますから、所謂(二七)之を使ふに權を以し、之を動かすに利を以てすれば、其職を盡さざる者無からんせうよ。すると平兒は、這の件事は須得どうか姑娘から説出來下さいまし、我們的奶奶は此の心は有つても、未必好く出口にはなりませんまい、と云ひますわけは、此刻姑娘が此の園子裡に住著なざるに、奶奶は(二八)多と頑意兒弄些去陪襯らんで、反て人を去つて監管修理させて錢の省ぬやうなことを圖るので、這な話は斷じて出口になる様なことはありますまいと笑道た。寶釵は忙く走過て來て他の臉を摸著ながら、爾は嘴を張開(て我に瞧瞧)なさい、爾的の牙齒舌頭は是什麼で作きて、こんなに早從起這會子到、爾が説了這些話は、一套一個様兒で、三姑娘に奉承せられるでもなければ、也他們奶奶の才短想不_レ到を説うでも没見、三姑娘が一句か説はれると、爾は就ぐ一句是せられるやうですが、横豎三姑娘が一套を話出來と、爾も就た一套進去、總て三姑娘が想的到ことは、爾奶奶も也同じやうに想的到てゐて、只是は必ずいふのですね。這會子又姑娘が住的園子だから、錢を省すからと云うて、人をして園子を監管せ不好と云ふとですが、若し果して眞に園子を他人に交與させ、そこから錢を弄去やうにしましたら、

【二七】兩の之は、本來汎く使はるる者を指すことなれども、ここにては園内の使用人に應用し云ふ也。

【二八】原文、不能多弄些頑意兒去陪襯、何か頑意兒(なぐさみになるもの)でもやつて陪襯(たすけ)る。

【二九】鳳姐がさうしたいとは思ひながら、さう出來かぬるわけがあつて、然様出來ずに居る。

【三〇】不可_レ辦之故が有るといふのは、人をして園子を監管せ

三人 那人たちは人に一枝の花兒も指せせず、一個菓子動らせぬやうなことになる、姑娘們的の分中
 も、自然敢にできず、そのため天天小姑娘們と吵が清えますまい。他のこの遠愁近慮、不
 抗不卑態度は、他奶奶と便俗們と好はありませんでしたが、他這の
 一番話を聞いては、也必自愧て好了なつて來ますし、不和であつても
 也便和了するやうになつてきます。探春、丁度我は早起からしきりと一肚
 子が氣てゐましたが、他が來たのを聞いて、忽然他の主子(鳳姐)が素
 日家を當いて、好撒野的 奴才を使出來的なたことを想へ起、我他
 を見たら、更に氣が生れたが、他が來たら誰知、まるで猫を避ける鼠兒の
 似的に、じつと半天おとなしく站了、怪く憐さうになり、接著又那麼些話
 を説ふ時は、他の主人が 我を待好すると云ふことは説はんで、到て
 姑娘が不枉も 我們的奶奶に素日情意を盡して下さると説はれました
 が、この一語は、但に我を沒了氣させたばかりではありませぬ、我到
 て愧了、又傷心一來ました。我細く想ますに、我は一個の女孩兒家で、自
 己は還て没二人疼一没二人顧一のを鬧つてゐるのですもの、我が那裡に人的を待好處が
 口中説到這裡、免す又涙を流下た。李執等は、他がかく懇切なことを説的、又他素日趙
 姨娘に毎

- 【三】 園子をあづかり管理するばあやなど。
- 【四】 自分の取つてよいもの。
- 【五】 深謀遠慮。
- 【六】 抗(たかから)す、卑(ひくから)す。
- 【七】 【二二】 【二四】の鳳姐のやりかた。
- 【八】 しもべ、平兒を云ふか、買辦をいふか、媳婦等をいふか、不明の云ひ方なるなり。
- 【九】 探春に。
- 【一〇】 此は平兒が、探春のことを云ひし時、姑娘と云ひし故、其儘其語を借り云ふ也。
- 【一一】 鳳姐。

も誹謗れ、又王夫人の 跟前で、亦趙姨娘に色色累はされるのを想ひだして、免す涙を流下て泣た
 が、都な他を勸めて云ふやう、今日は清静ではあり、大家が集會て利を興し弊を剔く兩件の事を商
 議しようとしませぬのは、也た不枉太太が委託一場しましたもので御座
 いますから、(又提ふ様)這な要緊没泣いたり事して什麼に作りませう。す
 ると平兒も、我已明白了ました。姑娘、誰が好う御座んせう。竟一人派れ
 ば就完了せう。探春、如レ此でせうが、備奶奶に一聲と回しておかねば須
 得、我々が這裡で勝手に不遺搜剔てしまひますのは、已經に不當なこと
 で御座います、それも備奶奶は是個明白 人で御座いますから、我ども
 纔這様を行いますのですが、若是糊塗的でしたら、我は決してそんなことは
 肯ません、こんなことをしますのは、到ど勝手に 尖兒を抓む像なこと
 ですもの、豈して 可レ不商量了再行。すると平兒は笑ふ道、既這様、我
 去つて告訴一聲ませうと説著て去了た。半日して、方回て來て、我は
 一滴白走と説是ました、這様な好事ですもの、奶奶が豈有レ不依的だ
 か、探春は之を聞いて、李執と二人で命じて園中の所々有婆子の名單を要て來させ、大家で參度て大
 概幾個か定了て、他們を一齊に傳び出し、李執が即く大概を他們に告訴すと、衆人は之を聞いて願意

- 【一二】 王夫人にと云ふに同じ、趙姨娘がいつも、騷動させて王夫人が困られること。
- 【一三】 五穀などを盤に高く上突りに積みあげて、初穂を神佛に供ふる時の形也、人に先ち初手をやる。
- 【一四】 能く商量し考へてから再行せざるべけんや。
- 【一五】 原文、説是白走二一滴、ゆいて話せば、云ふことは必ずきかれますから、今そのことを云ひに一滴(ちよい)と走(ゆ)きますのは、白(むだ)と説是ひましたが、果してその通りでした。

ぬ者は無かつた。一個は説ふやう、那の一片の竹子は、單一年の工夫と云ふものは我に交給たせてく
ださい、明年又た一片は、家裡に吃的笋を除いて、一年中には何程かの錢糧を交些られませう。する
と又這一個は説ふやう、那の(一)片の稻地を我が交給て居れば、一年中の這些 頑的三四の大小の雀鳥的
糧食は必ずしも官中の錢糧を動いただかんでも、我は還て錢糧を交けることが出来ませうと。探春
は纔ど何か説話うと要て居ると、大夫が進園に姑娘を瞧に來りましたと人が回せたので、衆婆子は
只得大夫を領へに去くと、平兒は、單に僮們が一百個居ても、也體統が成個ない、難道管事的頭腦
が大夫を帶連してあげないのですかと忙道と。回事的人は、吳の大娘と
單の大娘の他兩個が西南の角上の聚錦門で等著居られますと説ふ。平兒は
説聽いて、方で罷了。衆婆子が去つて後、探春は寶釵に如何しませうと問
うた。寶釵は笑ひながら、三五 始に勤むる者は終に怠り、其辭を善くする者
は其利を嗜むと云ふことがありますと答へた。探春は之を聽いて、點頭きながら稱贊して、便く冊上
に向つて幾個人かを指出して、他の三人に看せると。平兒は忙く筆や硯を收つて來た。すると他の三
人はそれを見て説ふ様、這一個の三六 (老)祝媽是個妥當的三五 ござんせう、況て他の老頭子と他の兒子と
は、代代竹子打掃を管つて居ましたから、如今から這の所有竹子は彼に交與けるやうにしませう。そ
れから這一個の(老)田媽は、本と是個種庄家的ですから、稻香村一帶の凡て菜蔬や稻麥などは、必ず

【三四】 今進み出て兎角いふ者はあてになるまいといふ意也。
【三五】 祝老媽の意。

しも認真三六 するのでなく、ほんの頑意兒に種つて居ることでも、耕種の事などは、須得他に去んで、
再一時を按じて意を加へて培植してもらひましたら、(豈に)更に好いではありませんか。すると探春
は惜しいことには蘅蕪院と怡紅院との這の兩處は大地方でありながら、竟も利息を出すやうな物が没
有と笑道た。李執は笑道、蘅蕪院裡は更に利害ござんすが、如今香料舖や、並大市や大廟などで賣的
ます各色の香料や香草兒は、都是這些な東西ですから、よく算起來ば別的の利息よりも更に大さう御
座いませうよ、怡紅院も 別レ説別的小的、單只春夏二季の玫瑰花や、並那の籬笆の上の薔薇花や月
季花や、寶香、金銀藤等類沒要緊一花草は乾了て、茶葉舖や藥舖に賣去ば、也幾個錢に値りませう。
すると探春は、原來如此か、只是這な香草を弄りましても、それを在行
的人三七 がありませうまい。すると平兒、寶姑娘に跟いて居ます驚兒(他)媽は就
是會く這個を弄りますさうです、上回他三六 がそれを採了些晒乾了、花籃や葫蘆みたやうな物を編成で我
頑に給れましたのを、姑娘は忘了不成か。之を聽いて寶釵は、我が纔僮を贊成しましたら、僮は到
來て我を捉弄やうなことをなさいませうと笑道たので、三人は都な詫異したやうに、這是は又何して
と問道た。寶釵は、這の今三七 のことは斷斷でも使不得、僮們が這裡に多少得用的人は、一個個閑著沒
事辦三六 へますに、這會子我が又 我的人を弄れて來りましたら、那起人は我三七 こそでも看三六 小しませうか
ら、我は到つて僮們的替になるものを一個人想へ出し來た。それ怡紅院に茗烟の娘の(老)葉媽かゝる

【三七】 別といはんで。

せう、那是個は誠實の老人家で、又我們的驚兒の娘と極く好ですから、この事は葉媽に交與た方が宜う御座んせう、それで他が知道ぬことがありましたら、僂們でなくて、就く驚兒の娘の棧に商議に去きましたら、那怕葉媽はそのことは全で管けず、竟に那一個に交與でしまひませう、那是は他們的の私情兒ですることですから、人が閑話と説うても、僂們身上は怨不_レ到_レわけでせう、で如_レ此一行ましたら、僂們的の辦的は至_レ極結構でせう。すると探春、如此せうが、只怕他李執、平兒、それは至極結構でせう。すると探春、如此せうが、只怕他們は利を見て義を忘れる様なことはありますまいか。平兒、なかに相干ますまい、前兒か驚兒が還た葉媽を、乾娘と認作、請んで飯を吃べたり、酒を吃んだりして、兩家は和厚して很仲が好うござんすから。探春は其事を聽いて方云ふことを罷たので、又俱是に他四人で素習から冷眼に中を取つて公道で斟酌して幾個人か揀み出し、筆を用て圈し出した。一時婆子們が来て、大夫は已去て、藥方を送上去かれましたと回うたので、三人は之を看了一面、藥を取りに人を遣出去、竝た煎藥をする人を派つて其事が片つくと。一面では探春は李執と與に、某人は其處を管ち、四季按に、家中に定例に多少か用ふる。外、餘者僂們が自由に採取了去取_レ利るがよいが、年終にすつかり算帳すると諸人に明示した。すると探春は又笑道、我は

【三】 原文、作乾娘、老女を自分の母として交際する、賈芸が寶玉を父とすると云ふこと前に在り、こは女同志のとなり。
 【三】 除…外、…の外を除きと訓するより、除外してと讀んで意通ず、日本式にする…の外は、として除の字を讀まぬも、反て意通ず。

又一件事想ひ起したことがあります。若し年終に算帳して錢を歸める時、自然帳房に歸到れば、仍是上頭に又一層の管主を添へ、還た他們の手裡に在ば、又一層皮剥られるからつまらぬことだが、這如今我們が這事を興出め、僂們的の派やうにしたのは已是は他們的の頭を跨過去ことなので、他們心裡に氣がたつてたまらぬだらうが、只だ説ひ出來ぬ丈で、僂們が年終に帳に歸ひする時、他が不_レ捉_レ弄僂們_二等_一什麼、それから再者一年間什麼を管つても、主子の(一)全分の有から、他們は就の半分有ふのは、這是は家常的舊例で、人も共に知つて居ることだから、僂們どうか物を偷著で外にかくして在くやうなどはしない様にしておくれ、如今この園子は是我的新創たことだから、竟か他們の手に入つてしまふ様なことのない様にして、毎年の算帳が竟に、裡頭に歸到來になれば纔好から。すると寶釵は笑道、我的説では裡頭にも歸帳ぬ方が宜う御座んせうと云ひますわけは、這個が多了とか、那個が少了とかで、到て不好から、反て他們的の爲に、又一分子領去て、彼等を派して一宗事を攬去ました方がようござんせう。不過是の園子裡の人が動用する東西を、我が(替_二僂們_一)算出して來と、有限的幾件事では、不過是の頭油、脂粉、香、紙などで、每一位の姑娘、幾個の丫頭たちには都是定例が有、再者各處の茗帚、篋箕、擔子代や、竝大小の禽鳥、鹿、兔の糧食などは、不過這幾様は都是他們に包了去納めさせて、

【四〇】 上前をばねられる也。
 【四一】 僂們を捉弄(いびら)なれば、什麼(いつ)を等ちませう。
 【四二】 奥、主人の手元。
 【四三】 原文、領一分子去、金錢取扱の一項を設け。
 【四四】 天秤棒、あふこ。

賬房去錢は領さぬ様にしたら、備算算して御覽なさい多少省下になり來か。平兒は笑道、這幾宗で少くとも、一年中を通共算起來、也四百兩の銀子は省けませう。すると寶釵は笑道た、却又來ましたかね、一年で四百、二年で八百兩になりますから、租錢の取れる房を幾間も置得、薄地なら幾畝か添へませう。で然還有富餘的ませうけれども、他們も既に一年も辛苦しましたことですから、也他們に剩させてやつて自己の身に粘補粘補させたら宜う御座んせう。是利を興し用を節するのは綱ですけれども、物事は亦太り齎にしてはいけません、總ひ再二三百兩の銀子が省上やうになりました所が大體統を失了るのは像ますまい、所以如此一行ましたら、外頭賬房の裡で一年中に四五百銀子の支出を少出のは、不覺得很難了、他們裡でも却也小補に得些、這些營生の没い媽媽們も也寛裕了、園子裡花木も毎年滋生些、爾們も也使の物が得られましたら、這は、まあ庶幾か物の大體を失ひますまいかと思ひます、然し若し一味入費を省くことのみで苦心しましたら、それは那裡にか幾個錢か搜し出來ぬことはありますまいが、凡そ餘利になる様なものは一概に官に取り入れましたら、那の時怨聲が道に載ちてしかたなくなり、爾們這樣人家の大體を失了るやうなことになるはしますまいか。如今這の園子の裡の幾十個の老媽媽們がある中で、若し只だ這の幾個のみに給るやうなことにしましたら、那のとり剩された的は也必と不公道だと怨を抱ひませうから、我が纒説的通り他們が、只だ這幾様を供給するは、また寛裕すぎ

【四五】原文、入丁官、賈邸自分
が取る。

ますから、一年中に這個除了外に、每人餘りがあらうが餘りが無からうが論はずと、只だ幾吊かの錢を拏ち出來、大家湊齊て、那些園中の他の媽媽們に單だ散興ことにしましたらどうでせうか。無論他們は料理ませんけれども、他們も日夜園中で何か差を當居る人で、門を關めるとか戸を閉ぢるとか、早く起き晚く睡み、大雨大雪などに、色色やつて居るのですから、其分内として也。粘帶してもよい該些的で御座んせう。それから還た一句の至小的話ですが、率性説破了ませう、爾們は自己は寛裕して、他們にちつとも分けて與らなかつたら、他們はそれは無論明らさまに怨を云ひますまいが、其心裡には却つて不服を抱いて居て、公を假つて私を濟して、爾們が管つてる幾個の菓子を摘上り、又幾枝の花兒を拏上たら、爾們は己のしたことではなく、ほんの冤であつたにしろ、どこにそれを訴へて、己の潔白を表します、だから他們にも便宜を得些させてやれば、爾們が照顧の到らぬところは、他們が亦爾們的替に照顧つてくれませうからと。すると衆婆子は這個議論を聽けば、これからは賬房の轄制を受けず、又鳳姐の所に去つて算賬することもない、一年中に不過多幾吊の錢を拏出來丈のことなので、各各異常に歡喜んで、出て去つて他們に色色と揉搓られるよりどれ程強如かわからぬに、還た其上に錢が拏出來やうな、こんなよいことはない願意と都な齊聲た。又その事的を得管ぬものは、毎年終には無故錢が得られると云ふことを聽いて、都な歡喜起來口内說道、他們は毎年辛苦して勤めるのですから錢を剩して粘補けるのは該

【四五】均霑。

ですが、我々はその爲には何もせんで穩に三注を吃るのは勿體ない様で御座います。すると寶釵は、みんなに、この位のことでは分内應當のですから、媽媽們にも推辭するには及ばないが、爾們は豫備で、縦放に人と酒を吃たり賭錢したりせずに、よく日夜も辛苦してくれば、就了、不然我は這なことを説はない、一般よく聽見ておくれ、と云ふのは、姨媽さんが三五回も我に囑托で説はれますには、大奶奶は如今間兒がなく、又別の姑娘たちはまだ小いから、我に照看照看して托れよとのことですが、我が若し管つてあげねば、分明しても姨媽に心を操ける様になり、殊に爾們奶奶は又多病多災で、家務も也忙に、我は原是個閑人で、便是個街方に鄰居るので、少不得去小就大、衆人が我を嫌ふなどは講姨媽が我に托まれますので、少不得去小就大、衆人が我を嫌ふなどは講つて起れませんか、かう云ふ次第で、倘し或は我が只小分ばかり沽名釣譽のために、那時だれか酒に酔ひ又は賭博などして何事か出来たら、我は怎麼な臉して姨媽さんに見へませう。爾們那の時になつて後悔して也遅かず、爾們の那素昔からの老臉も也で丢了てしまひませう。這些な姑娘、小姐と這様な一所の大花園を、都是爾們が看管するのは、皆な爾は三四代このかたの老媽媽だからなのですから、最も循規蹈矩と、大家心を齊へて體面を顧些に該なのに、爾們は反つて別人を縦放に、意に任せて酒を吃み賭博させる様なことを

【四七】 李純のこと。
 【四八】 王夫人。
 【四九】 原文、顧了小分沽名釣譽、婆子們をゆるやかにして、みんなにほめられたため。
 【五〇】 小姐は、姑娘より尊敬して云へども、大體同意なり。

姨媽さんが聽見て、教訓一場る位は猶可いが、倘し或は那の幾個の管家娘子に知られて、其時他は姨媽に回はす、竟に爾們を教導一場る様なことがあつたら、爾們は這年老的して、反つて年少的の氣を受了わけです、他は管家と云ひ條、管的著よりは、他が如何得來作踐に、爾們自己に體面を存些ねばなりません。それで如今爾們的替に這個な額外の進益を想出來やる所以は、大家心を齊せて、この園子を謹謹慎慎で周全させ、那些看執事的に、這般嚴肅謹慎なのを看見て、他に不用操心させたら、他に心裡に敬服せぬこととはあるまい、さすれば不枉爾們的替に這な進益を思つて籌畫つた甲斐があるわけで、それで他們的權を奪つて使用せず、反つて爾們的利益になるやうにしてやるのだから、爾們自己這の話を理想で御覽と笑道た。衆人は之を聽いて、都な歡聲鼎沸して、姑娘の説的は很是も御座います、此後は姑娘、奶奶只管か放心なさいまし、姑娘や奶奶が這様に我を疼願して下さるに、我眞要に其上情を體しませんやうでは、天地にも容れられますまい、勿體ないわけで御座いますと、剛ど這裡を説て到と、只見林之孝の家的が來て、江南の甄府裡の家眷が、昨日到京になり、今朝賀の爲に進宮されますので、此刻先づ人を遣はし禮物を送たせて安を請はれまして御座いますと、説著て便く禮單を送上て來た。探春は接つて看ると、是は上等の粧緞蟒緞十二疋と、上用の各色の寧絨十二疋、上

【五一】 いかんぞ來て作踐(しつれい)をしよう。
 【五三】 上用は上等なり、文を互にしたる也、宮とは宮中に用ふる程との意、我國の品名の上、「御」の字をつけしやうな意味、つまり上等の意。

用宮紬十二疋、上用緞十二疋、上用紗十二疋と、上用各色の紬綾が四十疋であつたので、李統はそれを看過して上等の封兒を賞他なさいましたと説道で、又人に命じて其事を賈母に回させた、賈母は又人に命じ、李統、探春、寶釵等を也都な叫び過來て其禮物を看了て、李統に一邊かに收過させ、又丙庫上人に吩咐けて説はれる様、太太が回來られたら看了て再ら收なさいと。それから因た賈母は説道れる様、甄家は又別家とは不三相同一ますから、上等の封兒を男人に賞なさい、只怕轉眼又打發の女人が請安に來ますから、尺頭を預備しておきなさいと一語未完ると、果然甄府から四個人の女人が來請安まして御座いますと人回された。賈母が便くこちらに帶進來と命人た。那の四個人は都是な四十往上の年紀で、其穿戴之物は、皆な其主人と甚く差遠はないが、請安問好が畢むと、賈母が便く四個の脚踏を挈了來られた。他の四人は謝して坐けて、寶釵等が坐けてから、方て坐下た。賈母は便く多早晚進京的でしたと問はれた。四人は忙く站起來つて、昨日進京致しまして、今日太太は姑娘を帶了て請安に進宮去了ましたので、先づ奴才們に來請安、又姑娘們的好み俱に問候せられました次第で御座いますと回説た。賈母は、這些年進京られませんでしたから、今年來えられようとは想到ませんでしたと笑問た。其四人も也、正是と今年は旨を奉じて進京致しましたわけに御座いますと笑道。賈母は又、家眷都な來了られましたかと問道た。すると四人は、老太太

【三】 封紙などに入れやる心付け、祝儀。
【四】 一人前丈に使へる様に切つてある反物。

と哥兒と兩位の小姐と、並別位の太太とは都な來に沒ませず、就只太太が三姑娘を帶了て來りましたと回説た。賈母は、もう人家かに有了になりましたか沒有御座いますと道れた。その四人は沒有で御座いますと回道した。賈母は又笑つて、僮們の大姑娘、二姑娘の(這の)兩家と、我們的姑娘とは甚く好で御座いますからと道はれた。四人は正是と毎年姑娘們は信の回去が有りまして、全く府上の照看に虧りますと説つて居られましたと御座いますと笑道と、賈母は笑ひながら、什麼の照看でせう、原是から世交で、又是老親ですから、それはあたりまへ應當的ですからです、又僮們的二姑娘は、更も自ら尊大にせられぬ、所以で我們纔もこんなに親密に走的を願つて居ますと笑道れた。四人は、這是は老太太の過謙で御座いますと笑道た。すると賈母は又、僮們的哥兒は也僮們老太太と跟著に御座いましたか。四人は説、老太太と跟著で御座います。賈母、幾歳です。又書など念了に沒有か。すると四人は、今年十三歳で、長得に齊整で、老太太は便く疼になられますが、幼から異常淘氣で、天天學に逃けれども、老太太は也取り十分管教云はれもなさいません。賈母、重不成了。我們的が、僮們的の哥兒は名字は何と叫べます。四人は説す道、老太太が寶貝の一樣に可愛當作、他又(生得)色が白いので、老太太は寶玉と叫他作られました。すると賈母は笑ひながら李統等に向つて道はれる道、

【五】 上の甄家の小兒は、丁度賈母の寶玉と同名で、性格などまるで同様なるが、他人の口を借りて、賈母の寶玉をそしり戒しむる也。
【六】 我們(うち)の家的(こ)では成(あり)ますまいな、よく似てる。

偏に又、寶玉と叫作ますか。之を聽いて李執等は、身を欠して笑ふ道、從古至今、時を同じうし代を隔てて、重名の的も很多ありますから。其四人も也、這な小名兒を起されて後、我們上下都な疑惑をして居ました、(五)那位親友家にか似的名の人がある像でしたが、十來年ばかりも進京しませんので、都記不眞了と笑道た。賈母、豈敢、就是は我的の孫子の名で御座いますよ、人か來でと笑道れた。衆媳婦や、丫環が答應了一声で走進て來た。賈母は、園子裡の偕們的寶玉を叫了て來て、他們的寶玉さんとは、如何な様だか、這の管家娘子に瞧瞧て給いたらよからうと笑道られた。媳婦たちは之を聽いて、忙く去了半刻してから寶玉に圍了進て來た。四人は一見して、忙起身ながら、(六)我、若是我們府に進來ませんで、倘若と別處で遇見致しましたら、還只我們的寶玉さまと當ひましたらう、後趕著也進了了京になりませう、と一面說一面都上來て他的の手を拉つて、問長問短はなし、寶玉も也問好をしつつあると。賈母は、偕們的の的とは如何長的と笑道れた。李執等は、四位の媽媽さんが纔一説れました模様では、なんだか模様兒がよく相做らつしやる様ですとねと笑道た。賈母、那で這様な巧事はありますまいよ、大家子の孩子們は、嬌嫩く再養的ますから、つい面上などに殘疾が有つて、十分黒醜的の樣

【五】 賈母にも寶玉と云ふ故、びつくりされたの也。
 【六】 原文、欠身、坐して居た者が、姿勢を正し、
 【五九】 子供の時だけの名、我國も古へ此の風ありたり。
 【六〇】 自分等の知つたうちに、暗に賈母をさす。
 【六一】 豈に敢てせんや。
 【六二】 私共びつくりいたしました、我等をおどろかす。噓了と一跳と略ぼ同意。

なものの除は、大概は都是一様に齊整として看見るので、別に什麼も怪處は沒有すると四人は又笑道、如今看來ました模様兒ではどうも一樣で、老太太の說の様に洵氣もまた一樣で御座います。我們看來も這位の哥兒の性情が、我們的のよりもまだ好些ゐらつしやいませう。賈母は怎得してそれを見得になりましたかと問れた。四人は、方纔、我們は哥哥の手を拉り説話など申しあげて便ぐ知りまして御座います、我們的の一個は、我們を糊塗だと説はれまして、慢で手を拉り申すと説ふと位ではありません、他的東西を我們が略と動一動しようとしましても依になりませんから、使喚の人は都是女孩子們で御座いますと。話末に説完、李執等は、忍不住笑つて居た。すると賈母は也笑つて、我們這會子人か偕們的寶玉さんを見に打發去、他の手を拉して説話でもして見ませう。さすれば他も也自然勉強て一時は忍耐して居られませう。可憐爾我這様な人家の孩子們は憑ひ他們は什麼刁鑽古怪な毛病兒が有つても、外の人に見へば、必ず還た正經と禮數が正しく出來ものです、が若し還た正經と禮數ません様では、決して他に刁鑽なことを去ては容ません、さうなつてしまひますのは就是ち大人が溺愛ますからで、又一則には其生得が可愛いので、自然人の意見に得り、二則には人が己を能く禮數るので、竟に己も不不錯も大人より行出來し、人がそれを見て可疼可愛ならぬ様になるものだが、若し、背地裡にも所以に他を一點子とでも縦にさせて、(若し一味)他が只管沒裡沒外して、大人を爭光やうにありま

【三】 しのび住(きれ)す。
 【六四】 不行儀してもかまはぬ處。

せんなら、憑ひ怎樣他生的して居ても、也是は打死てやらねば該的了と道れた。四人は之を聴いて、老太太のこの話は正も是で御座いますして、然も我々の寶玉さまは古怪く洵氣でいらつしやいます、時時人客に見了になります時は、規矩禮數などは、大人より趣がおありなされるので、(所以)人でも見つて愛にならぬ方はありません位で、其折檻を聴いては、什麼であんな他を打になるかと説になる方が御座います、他が家裡ではまるで無法無天で、大人も想へ到かぬやうな話を、(他は)偏と説に會つたり、大人が想へ到かぬやうな事を、(他は)偏に行うとなさいますものですから、老爺や太太が無法恨的になります、就是性を弄るのは、小孩子の常情ですけれども、還でも治的て過來ねばなりません。が第一這な一種刁鑽古怪的脾氣が天生下來ては、如何も使得がありませんと、一語未了に、太太が回來了御座いますと人同があり、王夫人はやがて進つて來られて問安畢、他の四人も亦請了安をし、大概兩句互に説了てると。賈母は、まあちと歌歌でいらつしやいと命はれたので、王夫人は親で茶を捧過來、方て退出されたので、四人も賈母に告辭了し、便く王夫人の處に往來、一回家務なことを説了し、それから他們は打發回去ことなど、不必細説。

【六五】一語いまだをばらぬに。

這裡に賈母は喜的人に逢ふごとに、他家にも一個の寶玉と云ふ兒が有つて、行景が也是で自家の寶玉と一樣だと告訴て居られたが、衆人は天下世宦之家などには同名者があつて、それに又其孫を溺愛

する祖母があるのは、亦古今の常情で、是などは什麼も罕しい事でないとして爲うて居るので、皆なそれを意に介せなかつたが、獨り寶玉は迂濶馱公子な心性だから、那の四人の云うたことは賈母を承悦す爲であると爲うて居た。それから後回で園中へ去つて史湘雲の病を看に去くと、湘雲は他に、偏はこれから放心で鬧が出來ます罷、先是は單絲は線ならず、孤樹は林ならずと云ふ喩の通り、一人で仕方が無かつたでせうが、如今對子が有了個ましたが、鬧急したら再た很く打たれますから、其時偏が南京まで逃げて走到て、那の一個を找ねて去くでせう。寶玉、那裡的謊話でせう、偏は也偏に寶玉と云ふ者が有個と信しますか。湘雲、それじゃ怎麼で春秋列國の時、蔣相如があり、漢朝に又司馬相如があるのは、どうしたのです。すると寶玉、這也罷了ですよ。偏に又模樣兒まで一樣なと云ふことは這是は沒有的事でせう。湘雲、では怎麼で匡人は孔子を看見て、陽虎だと當ひましたらう。寶玉、孔子と陽虎は容貌は同て居ても、名姓が不同、蔣と司馬とは名は同じでも、又容貌が不同、ところが我に偏つて他の寶玉さんと、兩樣俱に同じやうなことは成、まい。すると湘雲は答對話ことが没す、因で笑ひながら、偏は只會く胡攪なされるから、我は偏と分證は致しません。

【六六】糸は一縷では使へぬ、幾縷も合せて一筋の糸とし使ひ木一本では林は出來ぬ、寶玉も是から二人づれで、わるさが出る。

【六七】原文、模樣兒一樣、蔣相如と司馬相如とが名だけ同じ己と他の寶玉とは名も恰好も同じ様なことばない。

【六八】匡人は曾て陽虎のためにひどい目に逢ひしに、孔子の容貌が陽虎に似て居したため、孔子が匡を通られる時、匡人之を殺さんとしたり、史記に出づ。

【六九】名と容貌と。

それで有りましても罷ござんす。没んでも也罷御座んす、與我無干と説著、便睡て下了。寶玉は心中に又疑惑し起來、若し必く無いと説ば然亦有似だし、それかと云うて若し必と有るかと言へば、又竝ぞ目覩ものもなく、心中悶悶として、己の部中の榻上に回至、默默と種種盤算て居る中に覺はず忽忽と睡去て、竟に一座の花園の内に到了た。寶玉は詫異想へる道、我々の大觀園の除了に、竟又どこに這個な園子が有るのだらうかと、正と疑惑して問ると、那邊からか幾個の丫頭らしい女兒が來るの

【七〇】 這一千人の略、一千は種類、等の意。

で、寶玉は又、鴛鴦、襲人、平兒の除外に、也竟還な可愛い。這千人が有るかしらと道うて只見、那の丫環は笑ひながら、あら寶玉さま、爾は又怎麼して這裡に跑到來いましてと道ふのを、寶玉は、是は他自己に説ふのだと當うて、忙く來て陪笑しながら、我は偶ま此に歩到ましたのですが、不知是は那位の世家の花園ですか、好姐姐們、我を帶て俵俵て下さいな。すると衆丫環は寶玉を見て、都な笑ひながら、原來是は偕們家の寶玉さまではありませんでしたね、他の寶玉さまは生的が到也還だ餘程乾淨うて、嘴兒などは到也て乖う御座んすわと道ふのを、寶玉は聽いて、姐姐們這裡にも也竟寶玉と云ふ人が有るますかと忙道た。丫環們は寶玉さまと云ふ二字は、我々は老太太や太太の命を奉じて、他さまの延壽消災を保佑ために、(我

們は)さう叫他のですよ、他はそれを聽見になりますと、ひどく喜歡になりますのに、爾是は那裡の遠方から來一個の臭な小子と、也亂叫起來ながら、さあよく仔細なさい、爾的臭肉、打不爛爾一個のかなと忙道かと思へば、又是一個は、偕們快く走罷、寶玉さまに看見られたら別ませんからと笑道。又一個は、這な臭い小子と説了話と、偕們的薰把臭了なりますからと説著て、一逕ずんずん去了しまつたので、寶玉はひどく納悶道ふ様、從來人も如此に我を塗毒た者はないが、他們は如何して這樣なにひどいのだらう、眞亦に我一人這樣な目に有ふのは不成就のだらうと、一面想ながら、一面歩に順せて早く一所の院内に到了。寶玉又詫異ながら道ふやう、怡紅院の除了に、どこに也意還た這麼な一個の院落があるだらうかと、忽て臺階上了屋内に進了て、只見榻の上に一個人か臥著て居るに、那邊に幾個も女孩兒が針線を做てゐるもあり、嘻笑頑耍などして居るもあつた。只見と榻の上の那個の少年は一聲に嘆息了すると、一個の丫環は、寶玉さま、爾は睡みなならんで、什麼を嘆息なさいます、想必、爾妹が病だからでせうが、爾又、胡愁胡恨もしかたありません呢と笑問道のを。こちらの寶玉は聽説て(心下)也便ち吃驚して居た。只見榻の上の少年が説ふ道、我は老太太が、長安の都中にも也寶玉と云つて、我と一樣的な性情の人が有個と説はれましたのを聽見て居ましたけれども、信せんで居たが、我は纔丁度一個夢を作了て、夢中で都中に到了て、(一個)花園子の裡頭で幾個の姐姐に遇見したら、都が我を臭い小子だと

【七一】 實際の妹にあらず、親密の間柄に云ふ、此は夢中に女が他の寶玉に問れ、それを買邸の寶玉が聽いて居て、林黛玉のことに似て居る故、びつくりする也。

【七二】 胡(なに)をうれへ、胡(なに)を恨まんや、胡ぼうるんな、わけがわからぬと云ふこと。

【七三】 賈邸を云ふ、賈邸は長安に在りと云うてある、一回に出づ。

叫つて、我を理ひつけなんだが、我が好容易と他の房裡に找到してみても、偏他は【七四】睡覺で、空しく皮囊がある丈で眞性に那に去つたか知らない。すると寶玉は説を聽いて、【七五】我は寶玉を找して這裡まで來りましたのですが、原來爾就是寶玉さんですか、と忙道と。榻の上の寶玉は、忙くそこを下りて來て、拉き住めながら、原來、爾就是聽見て居ました寶玉さんでしたか、這は夢裡ではありますまいかと笑道。こちらの寶玉は、如何で是が夢でせう、眞而又眞了ですよと、一語未了只見に人か來て、老爺が寶玉を叫んでゐらつしやいますと説うたので、唬的と二人は都慌了し、一個寶玉は就走てしまひ、一個の寶玉は、【七六】寶玉さん快回來、快回來と忙叫たと想ふと、旁に在た襲人が、他の夢中で自喚ぶのを聽いて、他を忙推し醒ましなから、寶玉さんが那裡に在らつしやいますかと笑問道た。此の時寶玉はもう目か醒めて居たが、神思恍惚として、まだ門外を指しながら、寶玉さんは纔出て去つてしまひましたと道ふと、襲人は笑ひながら、おほかたそれは爾夢に迷了てゐらつしやるのよ、眼を揉つて細く瞧瞧なさいまし、そら是は爾の影兒が鏡子裡に照的なので御座いますよと道はれて、寶玉は前に向いて照了照てみると、原是那の嵌的ある大鏡に對面と相照て居たので、自己も也笑した。早く嗽盂や茶滴を捧て過來たのでそれをとつて口を嗽了た。すると麝月は、怪道老

【七四】 れむりさむるに非ず目
がさむる迄、睡て居る也、此
の語、到る處に在り。
【七五】 原文、我因找寶玉來到這
裡、爾就是寶玉。此の十六字
は、賈郎の寶玉が、夢の中で
他の寶玉にたづぬる也。
【七六】 原文、寶玉快回來、快回
來、他の寶玉が叫ばれてゆき
し故、賈郎の寶玉が呼びかへ
す也。

國譯紅樓夢中卷終

太太が常に小人の屋裡には鏡子は有いて可な、まだ人が小く魂も全らぬに多了と鏡子などに照したら、よく睡覺て驚恐して胡夢を作ますからと囑咐て説られましたが、如今大鏡子の那裡に床を安了て、鏡套を放下てあるのは還だ好う御座んすが、往前來と天熱なつて、人が肯困てくれれば、那裡他を放したことなど想的到ることなどは、比如ば方ど纔了了てしまつた様に、自然先づ淌下になつて、己の影兒を瞧著頑んで居て、一時眼を合上ても、自然に胡夢が顛倒でせう。然なければ、如何で自分で自己を看得著、自己の名字を叫びでせう。不_レ如明兒此の床を他に挪進來おしまひになるが正經御座んせうと、一語未了ととき、王夫人が寶玉を叫びに人を遣はされた。不_レ知それは何話説なるや、下回到分解すべし。

【七七】 小兒は晝、見なれぬ物を見
ると夜びつくりした夢を見
る、實際のこと也。

話說寶玉見那麒麟心中甚是歡喜便伸手來拏笑道虧爾揀著了。爾是那裡揀的。史湘雲笑道幸而
 是這個明兒倘或把印也丟了。難道也就罷了不成。寶玉笑道倒是丟了印平常。若丟了這個我就該
 死了。襲人斟了茶來與史湘雲吃。一面笑道大姑娘聽見前兒爾大喜了。史湘雲紅了臉。吃茶不答。襲
 人道這會子又害臊了。爾還記得十年前。偕們在西邊暖閣住著。晚上爾同我說話。那會子不害
 臊。這會子怎麼又把爾派了。史湘雲笑道。爾還說呢。那會子偕們那麼好。後來我們太太沒了。我姐姐住
 了一程子。怎麼就把爾派了。跟二哥哥。我來了。爾就不像先待我了。襲人笑道。爾還說呢。我姐姐住
 姐短。哄著我替爾梳頭洗臉。作這個弄。那個。如今大了。就拏出小姐的欸來。爾既拏小姐的欸。我怎麼
 敢親近呢。史湘雲道。阿彌陀佛。冤枉冤災。我要這樣。就立刻死了。爾幾聲話未了。忙的襲人和寶玉都
 來先瞧。爾不信。爾問問。兒。我在。家。時。刻。刻。那。一。回。不。念。爾。幾。聲。話。未。了。忙。的。襲。人。和。寶。玉。都
 勸道。頑話。爾又認真了。還是這。麼。性。急。史。湘。雲。道。爾。前。兒。送。爾。姐。姐。的。心。真。史。湘。雲。道。是。誰。給。爾。的。襲
 手帕子。將戒指遞與襲人。襲人感。謝。不。盡。因。笑。道。爾。前。兒。送。爾。姐。姐。的。心。真。史。湘。雲。道。是。誰。給。爾。的。襲
 可。見。是。沒。忘。了。我。只。這。個。就。試。出。爾。來。了。戒。指。兒。能。值。多。少。可。見。爾。的。心。真。史。湘。雲。道。是。誰。給。爾。的。襲
 人道。是。寶。姑。娘。給。我的。湘雲。笑。道。我。只。當。林。姐。姐。給。爾。的。原。來。是。寶。釵。姐。姐。給。了。爾。我。天。天。在。家。裡。想
 著。這。些。姐。姐。們。再。沒。一。個。比。寶。姐。姐。好。的。可。惜。我。們。不。是。一。個。娘。養。的。我。但。凡。有。這。麼。個。親。姐。姐。就。是
 沒。了。父。母。也。是。沒。妨。礙。的。說。著。眼。睛。圈。兒。就。紅。了。寶。玉。道。罷。罷。不。用。提。這。話。史。湘。雲。道。提。這。個。便。怎麼
 我。知。道。爾。的。心。病。恐。怕。爾。的。說。著。越。發。心。直。嘴。快。了。寶。玉。笑。道。我。說。爾。們。這。幾。個。人。是。難。說。話。果。然。不。錯。史
 笑。說。道。雲。姑。娘。爾。如。今。大。了。越。發。心。直。嘴。快。了。寶。玉。笑。道。我。說。爾。們。這。幾。個。人。是。難。說。話。果。然。不。錯。史

訴肺腑心迷活寶玉 含恥辱情烈死金釧

第三十二回

原本紅樓夢 中卷

但我素日之意白用了。且連爾素日待我之意也都辜負了。爾皆因總是不放心的原故。纔弄了一身病。但凡寬慰些。這病也不得一日重似一日。林黛玉聽了這話。如轟雷掣電。細細思之。竟比自己肺腑中掏出來的。還覺懇切。一時不知從那一句上說起。却也怔怔的望著黛玉。兩個人怔了半天。林黛玉只咳了一聲。兩眼不覺滾下淚來。回身便要走。寶玉忙上前拉住。說道：「好妹妹，且畧站住。我說一句話再走。」林黛玉一面拭淚。一面將手推開。說道：「有什麼可說的。爾的話我早知道了。口裡說著。却頭也不回。竟去了。」寶玉站著。只管發起呆來。原來方纔出來慌忙。不曾帶得扇子。襲人怕他熱。忙掣了扇子。趕來送了。與他。忽抬頭見了林黛玉。和他也說話。並未看出是何人來。便一把拉住。說道：「不帶了。扇子去。」虧我看見。趕了送來。寶玉出了神。見襲人。和他說話。並未看出是何人來。便一把拉住。說道：「不帶了。好妹妹。我的這心事。從來不敢說。今兒我大膽說出來。死也甘心。我為爾也弄了一身的病。這裡又不曉得魂鎖魄散。只叫神天菩薩。坑死我了。便推他道：「這是那裡的話。敢是中邪了。還不快去。」寶玉一時醒過來。方知襲人送扇子來。羞得滿面紫脹。奪了扇子。便忙忙的抽身跑了。這裡襲人見他去了。自思：「方纔之言。一定是因黛玉而起。如此看來。將來難免不才之事。令人可驚可畏。想到此間。也不覺怔怔的。滴下淚來。心下暗度如何處治。方免此醜禍。正裁疑間。忽見寶釵從那邊走來。笑道：「大毒日頭地下。出了什麼神呢。這襲人見問。忙笑道：「那邊兩個雀兒打架。倒也好頑。我就看住了。寶釵道：「寶兄弟這會子。沒叫什麼了。忙忙的那裡去了。我纔看見走過去。倒要叫住問他呢。他如今說話越發沒了。經緯。我故此想起什麼來。生了氣。叫他出去教訓一場。襲人笑道：「不是這麼。想是有客要會。寶釵笑道：「這會子沒意思。這麼熱天。不在家裡涼快。還跑些什麼。襲人笑道：「倒不是說的是。寶釵因而問道：「雲丫頭在爾們家做什麼呢。襲人笑道：「纔說了一會子。閑話。爾瞧我前兒粘的那雙鞋。明兒叫他做去。寶釵聽見這話。便兩邊回頭。看無人來。往便笑道：「爾這個明白人。怎麼一時半刻的就不會體諒人情。我近來看著雲丫頭的神情。再風裡言。風裡語的聽起來。那雲丫頭在家裡。動手。為什麼這幾次他來了。他和我說話兒。見沒人。在跟前。他就說家裡累的很。我再問他。兩句家常。過日子的話。他就連眼圈兒紅了。口裡含糊。」

糊。待說不說的。想形景來。自然從小兒沒爹娘的苦。我看著他也不覺的傷起心來。襲人見說這話。將手一拍。說：「是了。是了。怪道上月我煩他打十根蝴蝶結子。過了那些日子。纔打發人送來。還說這話。打的好。且在別處。噤著使罷。要勻淨的。等明兒來住著。再好生打罷。如今聽寶釵這話。想來我們煩他。他不好推辭。不知他在家裡。怎麼三更半夜的做呢。可是我也糊塗了。早知是這樣。我也不煩他。寶釵道：「上次他告訴我在。家裡做活計。做到三更天。若是替別人做一點半點。他家的。那些奶奶太太們。還不受用呢。襲人道：「偏生我們那個牛心左性的小爺。憑著小的。做一點半點。他家的。那些奶奶太太們。上的人。作我。又弄不開這些。寶釵笑道：「爾理他呢。只管叫人做去。只說是爾做的。就是了。襲人道：「那裏說。這信。他。纔是認得出來呢。說不得。我只好慢慢去罷了。寶釵笑道：「爾不必忙。我替爾做些。如何。襲人道：「當真的。這樣。就是我的福了。晚上我親自送過來。一句話未了。忽見一個老婆子。忙忙走來。說道：「這金釧兒呢。就是太太屋裡的好。前兒不知為什麼。撞了一跳。忙問那個金釧兒。那老婆子道：「那裏還有兩個金釧兒呢。就是太太屋裡的好。前兒不知為什麼。撞了一跳。忙問那個金釧兒。那老婆子道：「那裏會他。誰知他。不見了。纔剛打水的人。在那東南角下。井裡打水。見一個尸首。起著。叫人打撈起來。誰知是他。他們家。還只管亂著。要救活。那裏中了。寶釵道：「這也奇了。襲人聽說。點頭嘆道：「素日同氣之情。不覺流下淚來。寶釵聽見這話。忙向王夫人處。來安慰。這襲人回去不提。却說寶釵來至王夫人房中。只見鴉雀無聞。獨有王夫人在裡。問房內坐著。垂淚。寶釵便不好提這事。只得在旁坐了。王夫人便問。爾從那裡來。寶釵道：「從園裡來。王夫人道：「爾從園裡來。可知道一樁奇事。金釧兒忽然投井死了。寶釵見說。了。衣服。出去了。不知那裏去。王夫人點頭。哭道：「爾可知道。我把一件東西弄壞了。我一時生氣。打了他幾下。怎麼。好好的。投井。這也奇了。王夫人道：「原是前兒。他把一件東西弄壞了。我一時生氣。打了他幾下。怎麼。好好的。投井。這也奇了。王夫人道：「原是前兒。他把一件東西弄壞了。我一時生氣。打了他幾下。怎麼。好好的。投井。這也奇了。」

素日是有心的。況且他原也三灾八難的。既說了給他過生日。這會子又給人去粧裹。豈不忌諱。因為這模樣。我現叫裁縫趕兩套給他。要是別的了。頭賞他幾兩銀子。也就完了。只是金釧兒雖然是個丫頭。素日在我跟前。比我的女兒也差不多。口裡說著。不覺流下淚來。寶釵忙道。姨媽這會子又用什麼裁縫趕去。我前兒倒做了兩套。掣來給他。豈不省事。況且他活著時候。也穿過我的舊衣服。身量又相對。王夫人道。雖然這樣。難道不忌諱。寶釵笑道。姨媽放心。我從來不計較這些。一面說。一面起身就走。王夫人忙叫了兩個人來。跟寶釵去。一時寶釵取了衣服回來。只見寶釵在王夫人旁邊坐著。垂淚。王夫人正纔說他。因寶釵來了。却掩了口。不說了。寶釵見此景況。察言觀色。早知覺了八分。於是將衣服交割明白。王夫人將他母親叫來。掣了去了。再聽下回分解。

第二十三回

手足耽耽小動唇舌。不肖種種大承答撻。

却說王夫人喚上他母親來。拏幾件簪環。當面賞與。又吩咐請幾眾僧人。念經超度。他母親磕頭謝了。出去。原來寶玉會過雨村回來。聽見了。便知金釧兒含羞賭氣自盡。心中早又五內摧傷。進來。被王夫人數落教訓。也無可回說。見寶釵進來。方得便出來。茫然不知何往。背著手。低頭一面感嘆。一面慢慢走著。信步來到廳上。剛轉過屏門。不想對面來了一人。正往裡走。可巧兒撞了個滿懷。只聽那人喝了一聲。站住。寶玉唬了一跳。抬頭一看。不是別人。却是他父親。早不覺倒抽了一口氣。只得垂手在旁。站了。賈政道。好端端的。偏垂頭喪氣。咳些什麼。方纔雨村來了。要見你。叫那半天纔出來。既出來了。全無一點慷慨。揮洒談吐。仍是葳蕤。我看你臉上一團思欲。愁悶氣色。這會子又咳嗽。嘆氣。爾那些還不足。還不自在。無故這樣。却是為何。寶玉素日雖然口角伶俐。只是一心總為金釧兒感傷。恨不得此時也身亡命殞。跟了金釧兒去。如今見了他父親。說這些話。究竟不會聽見。只是怔怔的站著。賈政見他惶悚。應對不似往日。原本無氣的。這一來。倒生了三分氣。方欲說話。忽有回事人來回。忠順親王府裡有人來。要見老爺。賈政聽了。心下疑惑。暗暗思忖道。素日並不與忠順府來往。為何今日打發史官先就說道。下官此來。並非擅造潭府。皆因奉王命而來。有一件事相求。看王爺面上。敢煩老大人

作主。不但王爺承情。且連下官輩亦感謝不盡。賈政聽了這話。抓不着頭惱。忙陪笑起身問道。大人既奉王命而來。不知有何見諭。望大人宣明。學生好遵諭承辦。那長史官冷笑道。也不必承辦。只用大人找一句話就完了。我們府裡有一個做小旦的。琪官。一向好好在府裡。如今竟三五日不見回去。各處去。相與甚厚。下官輩聽了。尊府不比別家。可以擅來索取。因此啟明王爺。王爺亦云。若是別的戲子呢。一百個也罷了。只是這琪官。隨機應答。謹慎老成。甚合我老人家的心。竟斷斷少不得此人。故此求老大人轉諭令郎。請將琪官放回。一則可慰王爺。諄諄奉懇。二則下官輩也可免操勞。求覓之苦。說畢。忙打一躬。賈政聽了這話。又驚又氣。即命喚寶玉來。寶玉也不知是何緣故。忙趕來時。賈政便問該死的奴才。爾在家不讀書也罷了。怎麼又做出這些無法無天的事來。那琪官現是忠順王爺駕前承奉的。人。爾是何等草芥。無故引逗他出來。如今禍及於我。寶玉聽了。唬了一跳。忙回道。實在不知此事。究竟連琪官兩個字。不知為何物。豈更加引逗二字。說著。便哭了。賈政未及開言。只見那長史官冷笑道。公子也不必掩飾。或隱藏在家。或知其下落。早說了出來。我們也少受些辛苦。豈不念公子之德。寶玉連說不知。是說傳也。未見得。那長史官冷笑道。現有據證。何必還賴。必定當著老大人說了出來。公子豈不吃虧。既云不知。此人那紅汗巾子。怎麼到了公子腰裡。寶玉聽了這話。不覺轟去魂魄。目瞪口呆。心下自思。這話他如何得知。既連這樣機密事。都知道了。大約別的瞞他不過。不如打發他去了。免的再說出別的事來。因說道。大人。既知他的底細。如何連他置買房舍。這樣大事。倒不曉得。聽得說他如今在東郊離城二十里。有個什麼紫檀堡。他在那裡。置了幾畝田地。幾間房舍。想是在那裡。說。可知。那長史官聽了。笑道。這說。一定是在那裡。我且去找一回。若有了便罷。若沒有。還要來請教。說。著。便忙忙的走了。賈政此時氣的目瞪口呆。一面回頭。命寶玉。小廝快打快打。賈環問。他父親。唬得骨軟筋酥。忙低頭站住。賈政便問道。爾跑什麼。跟著那些人都不管。爾不知往那裡。他父親。唬得骨軟筋酥。忙低頭站住。賈政便問道。爾跑什麼。跟著那些人都不管。爾不知往那裡。從那井邊。一過。那井裡淹死了一個丫頭。我這人。頭這樣大。身子這樣粗。泡的實在可怕。所以纔趕著跑了。過來。賈政聽了。驚疑問道。好端端的。誰去跳井。我家從無這樣事情。自祖宗以來。皆是寬柔以待。下人。大約我近年於家務。疎懶。自然執事人。操冠奪之權。致使出這暴殄輕生的禍患。若外人知道。